

服飾デザインを通じた地域創生と国際交流に関する実践的研究 ～ ブルー&グリーンアートプロジェクトBGAP 2024 「海と陸とアップサイクル」を事例として～

Practical Research on Regional Revitalization and International
Exchange through Clothing Design : A Case Study of the Blue & Green
Art Project (BGAP) 2024 “Sea, Land and Upcycling”

水谷由美子* 原田裕作** 柏原エリナ***

*Yumiko MIZUTANI **Yusaku HARADA ***Erina KASHIHARA

キーワード：地域創生 服飾デザイン 海ごみ・工場廃棄物 資源循環 アップサイクル

Keywords: Regional Revitalization, Clothing Design, Sea Trash/Factory Waste,
Resource Circulation, Upcycling

要旨：

2020年から開始されたブルー&グリーンアートプロジェクトBGAPは、地域における環境問題の課題解決について、海と陸を繋げて考える点に特徴がある。ここ数年はシンポジウムと展覧会を実施して、課題解決の議論とともに芸術文化を通じたプレゼンテーションを行う方法をとってきた。今回は着物のアップサイクルをテーマにした展覧会を実施し、併せて環境問題をテーマに創作活動をしている美術家、長坂真護の作品も展示した。作品とシンポジウムにおいて、長坂の環境と文化と経済の循環を目指すサステナブルキャピタリズムという考えに学ぶこともBGAP2024の目的であった。

本論は「服飾デザインを通じた地域創生と国際交流」をテーマとし、主にBGAP2024の活動の中で服飾デザインの領域から考察したものである。Ⅰ章は研究概要、Ⅱ章はBGAPの前身であるアグリアート・フェスティバルから今日までの服飾デザインの活動について、地域創生と国際交流の観点から検証した。長年、山口の地域資源を活用する国際的なワークショップを行ってきたが、今回はハワイ大学マウイカレッジとオンラインワークショップを実施して、日本サイドと共に着物のアップサイクルを行った。

Ⅲ章では長坂真護の美術作品を含め、展覧会の服飾作品をコンセプトとともに紹介する。また原田裕作は工場廃棄物を、柏原エリナは海ごみを活用した服飾デザインをしており、それぞれが作品について検証した。今回の展覧会では国際交流として着物のアップサイクルを行った結果、制作するフェーズと展示して鑑賞するフェーズで、双方の考え方が見られ有意義であった。

以上のように地域創生と地域の課題解決に向け芸術文化活動としての服飾デザインの活動をしてきた。今後は小さな活動であるかもしれないが、経済へと少しでも循環させられるような活動をして行くことが目標である。

*山口県立大学名誉教授 **山口企画デザイン研究所研究員 ***玉川大学学術研究所研究員

*Emerita Professor of Yamaguchi Prefectural University YPU

**Researcher at Yamaguchi Planning & Design Institute Y-PADI

*** Research Fellow at Tamagawa University Research Institute

Abstract: The Blue & Green Art Project (BGAP), launched in 2020, is unique in that it addresses regional environmental issues through the interconnected perspectives of sea and land. Over the past few years, BGAP has held symposiums and exhibitions to encourage discussions on environmental challenges while presenting solutions through art and culture. The 2024 exhibition focused on kimono upcycling and included works by environmental artist Mago Nagasaka. A key objective of BGAP 2024 was to explore Nagasaka's concept of "Sustainable Capitalism," which aims to create a harmonious cycle among the environment, culture, and economy.

This paper examines the theme of "Regional Revitalization and International Exchange through Clothing Design," primarily discussing the activities of BGAP 2024 in the realm of clothing design. Chapter I provides an overview of the research, while Chapter II traces the evolution of clothing design activities from BGAP's predecessor, the Agri-Art Festival, to its current endeavors, analyzing them through the lenses of regional revitalization and international exchange. BGAP has long facilitated international workshops that utilize Yamaguchi's local resources. This year, an online workshop was held in collaboration with the University of Hawaii Maui College, focusing on kimono upcycling with participants from both Japan and Hawaii.

Chapter III highlights the clothing pieces featured in the exhibition, including Mago Nagasaka's art and their underlying concepts. The works of Yusaku Harada, utilizing factory waste, and Erina Kashiwara, incorporating marine debris, were also featured. The process of kimono upcycling in this exhibition, framed as an international exchange activity, proved to be significant, offering insights into perspectives in both the creative phase and the exhibition and appreciation phase.

In summary, BGAP continues to utilize clothing design as an art and cultural initiative aimed at regional revitalization and addressing local issues. Looking ahead, the project aims to expand these efforts, even on a modest scale, with the aspiration of contributing to the local economy through sustainable practices.

I 研究創作概要

2020年から開始されたブルー&グリーンアートプロジェクトBGAPは、地域における環境問題の課題解決について、海と陸を繋げて考える点に特徴がある。ここ数年はシンポジウムと展覧会を実施して、課題解決の議論とともに芸術文化を通じたプレゼンテーションを行う方法をとってきた。今回は着物のアップサイクルをテーマにした展覧会を実施し、併せて環境問題をテーマに創作活動をしている美術家、長坂真護の作品も展示した。作品とシンポジウムにおいて、長坂の環境と文化と経済の循環を目指すサステナブルキャピタリズムという考えに学ぶこともBGAP2024の目的であった。

本論は「服飾デザインを通じた地域創生と国際交流」をテーマとし、主にBGAP2024の活動の中で服飾デザインの領域から考察したものである。Ⅱ章は「ブルー&グリーンアートプロジェクト2024 海と陸とアップサイクル」における基調講演で筆者が発表したBGAPの前身であるアグリアート・フェスティバルから開始された地域発の服飾デザインと国際交流の変遷を報告する。そして今日までの約10年余りの活動を振り返り検証する。

国際交流については、ハワイ大学マウイカレッジの学生と教員に対して、筆者が滞在していたホノルルからオンラインワークショップを行なった。ここでは、メールの記述式インタビューにより、筆者が持参した着物のアップサイクルについて、マウイカレッジからの参加者が日本文化とハワイの文化をどのように解釈し作品を制作したかについても言及する。

Ⅲ章では美術家、長坂真護の作品を含め、展覧会の服飾作品をコンセプトとともに紹介する。山口ファッション&テキスタイル研究所と山口企画デザイン研究所のメンバーは着物の他に、海ごみ、工場廃棄物など、資源の循環やアップサイクルをテーマに制作された。加えて原田裕作は工場廃棄物を、柏原エリナは海ごみを活用した服飾デザインをしており、それぞれが作品について検証した。

本論の理解を深めるために、「ブルー&グリーンアートプロジェクト2023 Vol.2 海のある周防大島とハワイの幸福 - 地域循環共生と再生型観光の視点から -」（2024年3月24日実施）と「ブルー&グリーンアートプロジェクト2024 海と陸とアップサイクル」（2024年10月19日実施）におけるシンポジウムについて文字起こしした原稿を本論の後に編集して収録している。

パネラーのミツエ・ヴァーレイ（ハワイ州観光局日本支局支局長）によるとハワイでは観光振興やサステナブル観光のフェーズから、オーバーツーリズムにより破壊されつつあるハワイの自然や暮らしについて、再生型ツーリズムが実践されている。ハワイアン伝統的な精神に基づき、人を労い敬うというマラマとアロハの双胴船を目指した活動が紹介された。伝統的なコミュニティの再生や自然保護や再生を観光客や住人を巻き込んだ新しい観光のあり方など、山口の地域においても学ぶべき点が多かった。

こうして日本サイドでハワイの現状を知るとともに、ハワイの若者に日本文化としての着物の歴史や基本知識を共有するなど、双方の生活文化や伝統に関する情報が共有された上で、作品制作が行われた。

我々の実践的研究は、環境に関わるものであるが、基本的には環境と調和した人間の暮らしのウェルビーイングを目指すものであり、環境問題に関わることが苦しいとか大変というのではなく、自然に意義が感じられ、楽しく行動できる活動へと動機付けをを目指しているものである。ウェルビーイングについては、「海と陸とウェルビーイング ～ 幸せは手仕事にやどる ～」（2023年10月22日、ラポールゆや）におけるシンポジウム^{（註1）}を参考して欲しい。

Ⅱ アグリアート・フェスティバルからブルー&グリーンアートプロジェクトへと展開した服飾デザインと国際交流

1 活動のはじまり

2020年から開始されたブルー&グリーンアートプロジェクトは、2013年から2019年まで実施されたアグリアート・フェスティバルの後継として開始され、現在まで継続している創作活動である。共同研究者の安倍昭恵BGAP会長が2011年に起きた東日本大震災からの教訓で、農業の重要性に改めて気付き、農業を始めたことから服装の重要性を考え、筆者に農作業着の開発の提案をしたことがきっかけとなっている。地域の農業振興を考えるとときに、若者に関心を持ってもらうことが重要だ。スタイルから入ることで、若者が農業に興味を持つ動機付けができるのではないかと。ということで、共通のスタンスが共有された。その結果、mompekkkoシリーズを開発することになった。

筆者は2007年からルーラルファッションいわゆる農作業着に着想を得た田園ファッションをテーマに研究創作の活動をはじめた。フィールドリサーチのために山口市仁保地区の農業者へのインタビューをした。そ

の時にほとんどの女性が農作業着でモンペを絶賛したことに着目した。仁保の道の駅での展覧会や第1回山口県総合芸術文化祭ミュージアム・タウン・ヤマグチ2007「HEART2007」の一環として、山口県立美術館との共同研究でアグリ・アート・ツーリズム^(註2)を山口中心商店街、主に米屋町商店街のアーケードを舞台として開催した。この時に、モンペ・ヌーボーの商品開発を有限会社ナルナセバと共に行なった。その6年後にmompekkok開発プロジェクトが始まった。

2 アグリアート・フェスティバルにおけるmompekkokの開発、地域創生そして国際交流

(1) アグリアート・フェスティバルの概要

アグリアート・フェスティバル^(註3)では、舞踊やコンサート、シンポジウムそしてファッションショー及び展覧会などの構成で取り組んできた。ファッションショーではプロのファッションモデルや芸能人さらに地域住民や学生などがモデルを担い、豊かなステージの内容が展開された。地域住民の参加者を通じて、アグリアート・フェスティバルが地域の人々の新しい文化として認知されるようになった。

テーマは「大地の声をさく」（2014年）、「和敬清寂～夏は涼しく～」（2015年）、「自然との対話」（2016年）、「The Force of Water水の力」（2017年）、「リアル・アグリ～風と遊ぶ～」（2018年）、そして「光の棚田」（2019年）であった。農業文化振興のために、稲作に注目して東後畑で田植えフェスティバルを数回実施した。瑞穂の国である日本という視点から、上記のような日本文化の特徴と考えられるテーマをコンセプトにしてきた。お田植え神事などに登場する早乙女の新作衣装もデザインし、東後畑の地域の早乙女と共同で田植えフェスティバルでの儀式的なはじまりの田植えとルネッサ長門における能舞台の背景における演技的空間で、地域の子供や大人と大学生と一緒に早乙女の踊りを披露した。

長年、作曲は田村洋、振付及びステージングはリレイ・ダンススタジオのREI・KOをはじめとするダンスパフォーマー、映像撮影は山口メディア研究所などがプロジェクトに参加した。長門市の文化振興課や農業振興課の多大なるサポートによって大規模なイベントへと成長した。



写真1 2013 mompekkok global



写真2 2014 mompekkok raita



写真3-1 2015 mompekkko & salopekko takijima



写真3-2 2015 サプライズ参加された安倍晋三内閣総理大臣（当時）



写真4 2016年開発のmompekkko cosmoと2019年開発のsumokukko



写真5 2017 mompekkko nagato
モデル DOZAN 11 aka 三木道三(左)
安倍昭恵(中央) 水谷由美子(右)



写真6 2018 mompekkko motonosumi
モデル 大西倉雄市長（当時、左から4番目）と長門市民



写真7-1 2019 mompekkotanada モデル 我妻マリ

(2) mompekkの開発

アグリアート・フェスティバルの主な成果はmompekkシリーズの開発である。特に長門市からの受託研究も内包していたために、全国の棚田百選に選ばれた東後畑に注目し、発表は主に長門市で行われた。開発されたmompekkは有限会社ナルナセバとの協働により、実験的な販売を行うことができたために、人々の生活の中に提案した農作業着が落とし込まれた。

7年間のプロジェクトは長門市で2019年10月13日に全国棚田（千枚田）連絡協議会の主催で開催された棚田地域振興・第25回全国棚田サミットとの共同開催への参加で幕を閉じた。mompekkは「グローバル」（2013年）（写真1）、「raita」（2014）（写真2）、「takijima」（2015年）（写真3-1,2）、「cosmo」（2016年）（写真4）、「nagato」（2017年）（写真5）、「motonosumi」（2018年）（写真6）そして「tanada」（2019年）（写真7-1）をテーマにして、毎年のように商品開発をして、舞台にて発表した。この活動を開始した後で、長門市の海岸に突き出るように赤い鳥居が見事な景観を作っている元乃隅神社（現在改名され元乃隅神社）がアメリカのCNNが選ぶ今年行くべき日本の31ヶ所選ばれたために、この



写真7-2 2019 元乃隅神社と東後畑の夜の写真を用いた音楽ソフトでデザインした作品 モデル 安倍昭恵



写真8 2021 左からmompekk salopekk tsunagikko

エリアが有名になり、多くの来訪者が訪れる事になった。突然に、インバウンド観光のデスティネーションとして、急成長を遂げた。こうした事情を取り込んで、2018年のmotonosumiは染織によるオリジナルの生地を作るのではなく、プリントで制作した。それはこの年にコンサートで参加したDOZAN11（現DOZAN11 aka 三木道三）が写真をスキャンして作曲するソフトを開発したことに起因している。このソフトがスキャンするプロセスで縞模様が生まれることに着目して、123基の赤い鳥居が青い海に向かって陸上からラインを作っている元乃隅神社の美しい景色の写真と東後畑の棚田の風景の写真などを活用して、縞柄を作りプリントでそれを表現した（写真7-2）。テクノロジーとの融合であるとともに、この頃世界的にインテリアのみならずアパレルにおいてもテキスタイルのインクジェットプリンターが普及をしてきた頃だったので、あえてプリントのテキスタイルデザインに挑んだ。

2013年の実験的な制作にはじまり、2014年から独自にデザインされたやまぐち縞（機械織）の生地を使ったモンペの商品開発は2019年まで続いた。開発された商品は長門市をはじめ、県内各地にて販売され、地域の人々に知られるようになった。後に山口市のふる

さと納税の返礼品にも登録された。その他、カタログ販売の通販に参加して一定の成果を上げた。

ファッションショーに関しては、上記のmompekkkoとシリーズ作品(salopekkko、tsunagikko、sumokukkoなど)(写真8)のコレクションとともに、各年のテーマに沿って制作した作品や国際交流によるワークショップでできた作品あるいはフィンランドやハワイなどテーマに沿って自国で制作された作品の発表などが行われた。

(3) 国際交流とデザイン

他方で創作作品のコンセプトは一貫してサステナブルと地域資源の活用及び国際交流などをテーマにデザインを展開して来た。国際交流はまず2009年からラップランド大学との共同研究から始まった。以後、新型コロナウイルスが蔓延する以前の2019年まで続いた。

2015年にやまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会(実行委員長 水谷由美子)を作り、公益財団法人東芝国際交流財団からの支援を受けた。そこでフィンランドをはじめフランス(LISAA Paris)、中国(青島大学)、韓国(慶南大学校)から学生や教員及びその地域のプロのデザイナーを招聘して、山口でワークショップを始めた。また、2017年にハワイ大学マウイカレッジを訪問する機会があり、その後学術的な交流が始まった。以後のイベントにはラップランド大学やハワイ大学マウイカレッジ、慶南大学校からの参加もあった。

その都度、グループ分けをして、日本の学生と海外の学生という組み合わせで、創作活動を行なった。主に山口の地域資源としては、山口市における徳地手漉き和紙、防府市の伝統的な藍の天然灰汁発酵建ての染色、柳井市の柳井縞、下松市の国際美容文化研究所の着物の着付けのワークショップを行った。加えて重要

な素材としてはデニムを使った。現代的素材であるデニムを使った背景は以下のである。

デニムは、2000年から2009年まで山口市でデニムの全国レベルのコンテスト、ジャパンファッションデザインコンテストin山口を開催した時の主な素材テーマであった。また、2006年に山口で開催された第21回国民文化祭におけるファッション文化の振興部門のメインテーマにデニムが選ばれ、プレイベントから2年間、産学民公で多くのイベントが開催されて山口における素材として認知された。その結果、デニム加工技術が山口県の地域資源として認定された。

その他に、日本文化を伝えるために日本の建築や庭園などにおける研修には、瑠璃光寺五重塔、山口市葉香亭、常栄寺雪舟庭などを訪問した。

共同研究として、フィンランドからはトナカイの皮革や羊毛のフェルトが提供され、双方の文化融合が感じられる作品が生まれた。服飾デザインにおいては、こうした文化融合などが容易に生まれやすい特徴があり、フランス、中国、韓国そしてハワイの若者の作品にもこうした特徴が見られた。特に、ハワイは人種の坩堝で参加者は先祖あるいは自身が多様な国の出自のもので参加していた。それゆえに、それぞれの参加者にとってもアイデンティティと思われる出自の文化の特徴が色やモチーフなどに現れ、必ずしもハワイアン文化の表現という訳ではなかった。その結果、日本人を含む多国籍な参加者による、文化の対比や融合など、ユニークな作品が生まれた。

やまぐち国体・地域文化フォーラムの活動であった国際的なワークショップで創作された作品は、毎回アグリアート・フェスティバルのファッションショーで発表された(写真9)。

(4) 成果



写真9 アグリアート・フェスティバル2017フィナーレ ラップランド大学とハワイ大学マウイ校のゲストと共創



写真10 東後畑での田植えフェスティバルにおける新田の早乙女

東後畑をフィールドとして、農業文化振興や地域活性化を目的として活動をしてきた。そこで、7年間、継続したイベントを開催したために、地域の人々に認知され愛されるものに成長してきた。それ故に、地域文化創造という点や早乙女の踊り（写真10）の共創など、農業文化振興という点からは意義あるものになったと考える。

しかし、東後畑の棚田の振興に果たして役立ったかという疑問が残るところであった。幸いに、アグリアート・フェスティバルの最終年に、長門市で全国棚田サミットが行われ、地域のNPO法人ゆや棚田景観保存会が積極的な活動を開始した。具体的には藪になっていた棚田を開墾し、ハーブ畑にする計画が持ち上がった。そこで、保存会メンバーや大学生そして高校生とともに、BGAPのメンバーも棚田で初めてのハーブ植えの行事に参加した。

その後、この地域に行く度に藪が棚田に変わっていた。現在は、ハーブ畑だけでなく、ドッグランなどもできている。棚田の先には日本海が広がっていて、この景観を楽しむことができる遊具もあり、この地域を訪ねてきた観光客のデスティネーションにまでなっている（写真11）。

3 ブルー＆グリーンアートプロジェクト2020-2024

(1) プロジェクトのはじまり

アグリアート・フェスティバルが終了し、筆者が次のフェーズは陸から海へと課題を展開しようと提案した。それに対して、安倍昭恵共同研究者が次のような話をした。海を整えるのに陸の環境を整備することで成功した例がある。東日本大震災において気仙沼の牡蠣養殖者が陸と海をつなげて開発していたために、東日本大震災による大打撃から見事1年で復活したというNPO法人森は海の恋人（代表 畠山重篤）の活動についての話である。その話は筆者にははじめて



写真11 藪から開墾された後畑の棚田の風景 2024年10月

の知見であった。その内容が非常に感動的であり、今後の活動の目標にもなる内容だと共感した。安倍とこうした考え方を基調に活動をして行こうと決定し、海をブルー、陸をグリーンと形容して、ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委委員会を命名し、新たな活動を開始する事になった。

ただ、2020年の春には新型コロナウイルスが蔓延しはじめており、それから2023年までは非常に不自由な環境の中で開催せざるを得なかったが、開催内容を検討しながら毎年継続してきた。また、アグリアート・フェスティバルは1年に1度の開催であったが、主催者や協力者の意欲が高まり1年に2回から3回など活動が活発化されてきている。

(2) アグリアート・フェスティバルを継承したファッションショー

ブルー＆グリーンアートプロジェクトは、2020年にアグリアート・フェスティバルと同じフィールドである長門市の東後畑ではじまった。アグリアート・フェスティバルは2013年から棚田の再生という目標も掲げつつ実施してきたが、前項で述べたように棚田の直接的な再生への貢献は難しかった。2019年の夏に開始された棚田のハーブ畑化が進んでおり、1つの畑がコス



写真12-1 ブルー＆グリーンアートプロジェクト2020 開墾された後畑のコスモス畑の舞台（長門市）



写真12-2 ニホンアワサングをモチーフにしたウエディングスタイル

モス畑になっていた。ここに上記保存会が舞台空間を作った。そこには手作りで白塗りされた木製のステージができていた。長門市立旧文洋小学校が会場であったが、シンポジウムが始まる前に、棚田でのファッションショーが実現された(写真12-1,2)。地域との協働で棚田でのファッションショーを行うことは2013年から目標にしてきたことで、長年の夢だった。上記の棚田開発における中心人物、和田愛子(写真12-1の右から2番目)は、以下で述べるファッションショーにmompekkkoを着て出演した。地域との共同、共感、そして共創が実現した出来事だった。

この時以来、ブルー&グリーンアートプロジェクトに関する安倍昭恵会長との共同研究は新たなフェーズへと移行する事になった。たとえばテーマだけでなく、活動の場所も長門市から山口市、周防大島町、そして今回のように下関市へと拡大された。

(3) ブルー&グリーンアートプロジェクトの展開

農業という陸の課題について取り組んで来たが、2020年以来、三方を海に開かれた山口県における海の課題について取り組む事になった。特に海と陸を繋げた課題解決ということが基本的なコンセプトになった。

特に、長門市においても海の課題があり、ビーチクリーンを行いながら、その課題について認識をもった。新たなフィールドとして、周防大島との協働の環境が



写真13 アトリエa.p.rファッションショー2024「Yamaguchi Tourism」やまぐち大殿ひなさんぽ2024内1dayイベント 大殿大路にて 2024年3月3日

整ったことがあり、以後、毎年、取り組んできた。

4 国際交流と日本の着物のアップサイクル

(1) 着物のアップサイクルの計画

現在、日本では多くの家のタンスに眠っていた着物が古着市場に出回り、着物のアップサイクルが家庭で、あるいはビジネスとして盛んに行われている。家庭内で母親や祖母などの着物を自分の洋服に仕立て直す、ビジネスでオーダーを受けて市販の着物あるいは家族の着物から自分のドレスや普段着にするあるいは着物生地を使って生活小物やインテリアにするなど多くのリメイクが行われている。好例として、山口ファッション&テキスタイル研究所のメンバーである片山涼子(アトリエa.p.r代表)は、一般の個人からのオーダーを受けるとともに、演奏家や歌手あるいはダンサーなどとのコラボレーションをしている。山口市の大殿大路に関わる複数の団体との協働により、ファッションショー(写真13)をひな祭りの時期に長年継続して行っている。そこでは着物のアップサイクルと地域との共創を実現しており、長年の実績と評判を得ている。

今回はアップサイクルをテーマに、捨てられるものにもう一度命を与え、新たな価値を創出する活動を、国際交流を交えて実施しようと考えた。

しかしながら、世界的な感染症蔓延による影響でか

つてのように日本に招いて日本人などと共同でワークショップする環境が整っていなかった。それ故に、日本人は各自のテーマで自分に縁の着物を用いて制作することにし、ハワイの参加者には筆者が着物を持参し、オンラインにてワークショップを行うことにした。

日本サイドは、山口ファッション＆テキスタイル研究所Y-FATIと山口企画デザイン研究所Y-PADIに呼びかけ、参加を得ることになった。海外ではハワイ大学マウイカレッジとラップランド大学に参加を呼びかけた結果、前者が参加申し出をしてきた。海外の場合には、着物の入手が難しい。そこで、幸いにも山口市徳佐の古民家に残されていた着物の寄贈を受けたので、それらを筆者とハワイ大学マウイカレッジの学生たちが活用することにした。

(2) オンラインワークショップの開催

筆者はいくつかのプロジェクトをするために6月にホノルルを訪問した。期間が8泊9日と短期間のために、マウイ島まで行くことが難しかった。それ故に、ホノルル滞在中のホテルからマウイカレッジの教員と学生に向けてワークショップを開催する事にした。

この期間に第13回太平洋芸術・文化祭ハワイ2024「オセアニアを再生する」がホノルルで行われる事になり、マウイカレッジの国際交流の責任者、ステファニー・オヒガシがハワイ大学のブース参加のためにホノルルに来る事になっていた。筆者の滞在したホテルは上芸芸術祭会場の近所であったことも功を奏し、オヒガシの助けを得てワークショップを開催する事になった。偶然、オヒガシがハワイで長年日本舞踊を習っていたことがわかった。それ故に、着物についての知識も豊富で、当然着物の畳み方も心得ていた。

オヒガシと準備を終えて、2024年6月10日の午前11時（ハワイ時間）から1時間程度、オンラインワークショップを行うことができた。ベッドに持参した振袖、

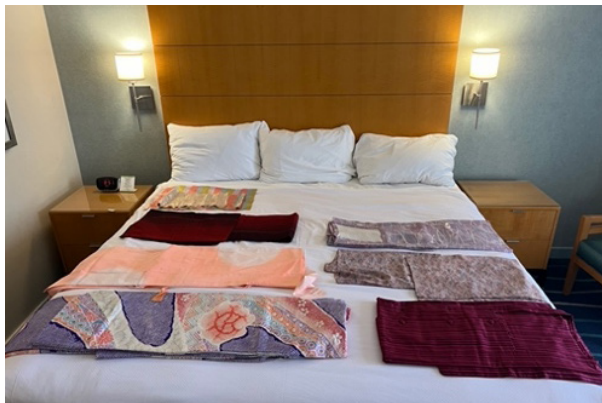


写真14 オンラインワークショップのための着物 ホノルルのホテルにて 2024年6月12日

道行コート、訪問着などを並べ（写真14）、パソコンのカメラで写しながら、着物の歴史や種類、それぞれの特徴などをレクチャーし、最後には身につけてみて、簡易に着方の説明もした。

カメラの向こうには、山口県立大学にてかつて行ったワークショップに参加した教員、シェリル・マエダとマリア・ラゾウティ及び学生3名がいた。当初は10数人以上の学生が参加希望していたが、奨学金対象の人数に限りがあり、選抜された3名の学生が参加していた。

(3) ハワイ大学マウイカレッジにおける制作について

具体的なワークショップの作品は次章で紹介される。以下の質問を展覧会終了後にラゾウティ先生に記述式で尋ねた。以下にラゾウティの言葉を以下に引用する。

1) 今回の着物のアップサイクルのテーマについてどのようにディレクションをしたか？

「私は学生たちに、ハワイの文化や自分が継承しているものについて何かエピソードを話してもらいました。私は個人的に、着物をアロハシャツのようなハワイで一般的に着用されている衣服にアップサイクルさせることを提案したが、学生は最終的には各自のデザイン美学を反映したものをデザインした。」

2) オンラインワークショップで、学生たちは着物についてどのような理解を得たと思いますか？

「学生たちは、着物がどのように作られ、どのような場面で着用されるのか（フォーマル、セレモニー、インフォーマル）を理解できたとともに、このプロジェクトに参加できることに感謝していました。」

3) 生徒の作品についてどう思われますか？簡潔にお答え下さい。

「着物をリサイクルするのは今回が初めてでした。それを考えると、みんなよくやったと思う。繰り返しますが、これは文化交流なので、アロハシャツやムームーのような、ハワイで一般的で、日常的に着用されているものをもっと反映したものを作ってほしいと思いました。しかし、最終的には彼女たちに任せました。」

各学生から共通して聞かれたのは、このプロジェクトは彼女たちがそれぞれに日本のスタイル（着物）の美学を愛好していたので難しかったということでした。そこで彼女たちが作ったのは、日本の美学とハワイの文化や、学生のプリエラにとってはフィリピン伝統を反映させたストーリーとのリミックスになりました。」

次に学生に以下の質問をしてプリエラから返信があったので以下に引用する。

4) 今回、着物をテーマに洋服をデザインしてみて、どのような感想や発見がありましたか？

「着物はデリケートで大切に扱わなければならないので、アップサイクルすることに緊張と興奮が入り混じっていました。着物ははるばる日本からマウイまで運ばれてきて、届いてからどれを使うか検討しました。私のインスピレーションは、祖母が持っていた『Every Grain of Rice』という本から得たものだった。最終的に、白と桃の振袖と紫の道行きを選びました。」

5) 日本人の様々なアップサイクル作品を見て、どのような印象を持ちましたか？

「みんなが着物で作ったものを見るのが好きでした。どの作品も伝統に敬意を払いつつ、創造性、革新性、環境への配慮がミックスされていました。これらのデザインは、古い衣服に新しい命を与え、芸術的で機能的な物語に変えていました。」

5 まとめ

(1) 展覧会全体について

次章において、参加者の作品について、各自の書いたコンセプトと作品写真を掲載する。またコンセプトは本論の付録として掲載した「ブルー&グリーンアートプロジェクト2024 海と陸とアップサイクル」の当日プログラムの内容を転載している。

展覧会では、着物のアップサイクルの他、海ごみ、工場廃棄物や店舗で廃棄されるカーテンなどに注目して制作した服飾作品も展示された。

また、イベントのコンセプトでアップサイクルに関して、文化と環境と経済の循環に着目しており、サステナブル・キャピタリズム（持続可能な資本主義）を提唱している長坂真護の作品も展示した。共同企画者である安倍昭恵ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会会長がかつてから長坂と交流しており、作品を所有していた。筆者の企画を安倍に提案した際に、偶然にも非常に親しい関係であったことがわかった。同時に、故安倍晋三元内閣総理大臣が、長坂のアトリエで長坂の手ほどきを受けて、作品を制作していた（写真15）ことも展覧会開催のしばらく前に解り、安倍会長所有の長坂作品と同時に安倍元首相の作品も展示された。シンポジウムの際に、長坂がパネラーとし

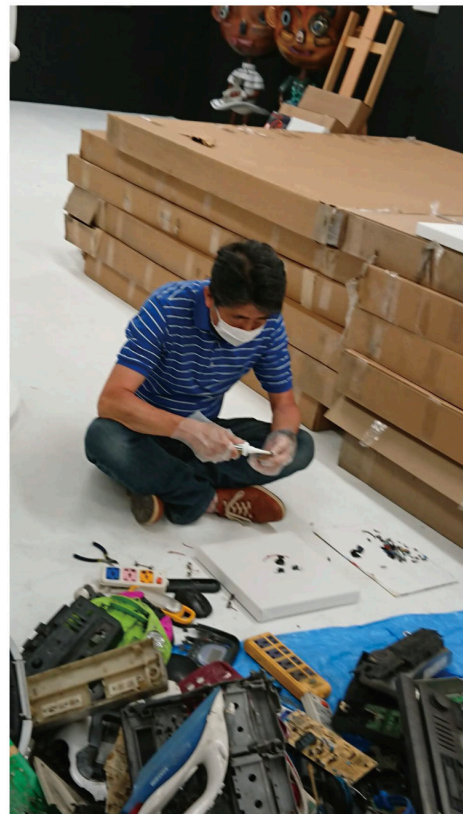


写真15 安倍昭恵 長坂真護 安倍晋三（長坂のアトリエにて）

て発言した際に、安倍元首相の作品は昭恵会長とのコラボレーションでもあると語られた。

(2) 山口ファッション&テキスタイル研究所及び山口企画デザイン研究所の作品

以下で具体的な作品について作者自身の言葉でコンセプトが語られたものを転載しているが、ここでは、簡単にどのような着物あるいは工場廃棄物などのアップサイクルをしたのかを俯瞰してまとめる。

出自はここで特に述べないが、いわゆる使用されなくなった着物を用いて制作したのは、入江幸江、小田令子、武永佳奈、そして水谷由美子である。工場や店舗で発生した廃棄物やストックを活用したのは原田裕作、石田彩夏であり、長年染織アトリエで眠っていた生地を提供され活用したのは甲斐少夜子であった。

Ⅲ 「海と陸とアップサイクル」展について

1 展覧会概要

本展覧会は「海と陸とアップサイクル」をテーマに、下関市民会館中ホールロビーにて、服飾及びアート作品等の展示を行ったものである（写真16）。出展者はブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会から依頼を受けた、山口ファッション&テキスタイル研究所Y-FATI、山口企画デザイン研究所Y-PADIのメンバー及びアップサイクルやりサイクルをテーマに活動するアーティストら、企業等である。さらに国際交流

の一環として、ハワイ大学マウイカレッジで服飾デザインを学ぶ3名の学生も来日参加し、水谷が現地に赴いた際に提供した着物生地を主素材に用いた服飾作品が出展された。

本章では、すべての出展作品について写真とコンセプト（作品概要）とともに紹介する。次節では筆者らの作品2点を取りあげ、アップサイクルの手法及び実験的な取り組みについて解説し、多角度からその成果を検証する。

以下で記載される出展作品の作品概要は基本的に作者自身が記述したものであるが、No. 1-No. 3の作品については、制作者又は所有者が提供した作品説明をもとに実行委員会によって記述された。また、ハワイ大学マウイカレッジの学生による3作品（No. 04-1-No. 04-3）は作者自身による紹介文（原文）と翻訳文を掲載している。



写真16 BGAP2024 展覧会場の様子

2 出展作品について



写真17 月シリーズ



写真18 ドラゴン



写真19 春夏秋冬そして天



写真20 Pray your happiness



写真21 夏休み

No. 1

長坂 真護（美術家）

①[月シリーズ]（写真17）

平和と健康のイメージがお月様で表現された作品。

②[ドラゴン]（写真18）

長坂真護氏の夢に現れた真実の象徴としてのドラゴンが描かれた。

③[春夏秋冬そして天]（写真19）

④[Pray your happiness]（写真20）

安倍晋三氏が亡くなられた後、長坂真護氏によりてきたイメージが描かれた2作品。



写真22 左: Jellyfish-Futuro 右: Jellyfish-Avenir



写真23 Hoku Moon and Her Waters



写真24 Haleakalā, "House of the Sun"

No. 2

安倍 晋三（元内閣総理大臣 故安倍晋三）

[夏休み]（写真21）

安倍晋三氏の夏休みの思い出が描かれた作品。

No. 3

柏原 エリナ（ライトモードアーティスト）

「未来の海を光で輝かせるクラゲ達」

① [Jellyfish-Avenir] ② [Jellyfish-Futuro]（写真22）

作品は、桜美林大学芸術学部のプロジェクト授業として制作された。授業では、Japan Environmental Action Network(JEAN)主催の海岸クリーンアップキャンペーンに実際に参加して、海岸のプラスチックゴミ採集も行った。海洋の自然、生物を調べ、「光」と組み合わせる事を考えて、クラゲを造形のテーマに選んだ。発光する不思議なメカニズムを調べ、検討する中で、クラゲには海水を浄化する能力を有するものがあり、また自ら分裂しコピーを作って増殖したり、中には不老不死といえるものもあるという。そのミステリアスな生態が未来の海のために貢献してくれることを期待して美しく未来的な光のドレスを制作し、いつか美しい海洋環境を取り戻す事を願いながら制作した。

No. 04-1

Meghan Reny（ハワイ大学マウイカレッジ UHMC）

[Hoku Moon and Her Waters]（写真23）

（原文）I created my upcycled garment with the Hawaiian moon calendar as the inspiration. Ancient Hawaiians had a deep relationship and understanding of the phases and changes of the moon as it was used for survival and ritual: they used the moon to read the changing of the tides for fishing and also to understand the cycles of plants. The moon was the messenger to Hawaiians revealing the secrets of the land and the ocean. The top of my piece represents the Hoku moon phase, which is the full moon phase of the moon. I used the lining of a recycled wedding dress as the fabric, and hand sewed opal beads on the surface to represent the beauty and luminescence of the moon in this phase. The skirt of my garment, which is the beautiful kimono fabric, represents the “wai” or waters of the ocean. The patterns on the kimono

reminded me of all the life in the Hawaiian waters, and the relationship the water has to the moon and to us. I hand sewed beads to the bottom of the garment to further represent the beauty of the water, and I used an upcycled Aloha shirt to create the Obi on the back of the garment. My piece was created with the intention of honoring the beauty of the moon and the waters of Hawaii, and how the connection of moon, land, and water breathes life into all of us, and how it is our “kuleana”, or responsibility, to protect this deep relationship.

（翻訳）ハワイの月の暦にインスピレーションを得て、アップサイクルされた服を創作した。古代ハワイアンは、月の満ち欠けや変化を生存や儀式に利用し、深い関わりと理解を持っていた。彼らは月を使って潮の満ち引きの変化を読み、漁をしたり、植物のサイクルを理解したりしていた。ハワイアンにとって月は、大地と海の秘密を教えてくれるメッセンジャーだったのだ。私の作品の上部は、「Hoku」（満月）を表している。リサイクルしたウェディングドレスの裏地を生地に使い、表面にオパールビーズを手縫いして、この時期の月の美しさと輝きを表現した。スカートは美しい着物の生地で、「wai」（海の水）を表現している。着物に描かれた模様は、ハワイの海に生きるすべての生命と、月や私たちとの関係を思い起こさせた。さらに水の美しさを表現するために、裾にビーズを手縫いし、背中の帯にはアップサイクルしたアロハシャツを使っている。私の作品は、月とハワイの水の美しさに敬意を表し、月、大地、水のつながりが私たちすべてに生命を吹き込むこと、そしてこの深い関係を守ることが私たちの「kuleana」（責任）であることを意図して制作した。

No. 04-2

Aliza Clarke（ハワイ大学マウイカレッジ UHMC）

[Haleakalā, “House of the Sun”]（写真24）

（原文）My home is on a dormant volcano Haleakalā, a place rich in cultural history and spiritual significance. Inspired by the land beneath my feet, I designed my skirt to reflect its beauty and sacredness. The striped red kimono represents the layers of lava that shaped its ridges and valleys, a testament to geological forces over millions of years.

Haleakalā, or "the house of the sun" (Halema'uma'u), is revered in Hawaiian mythology. Legend has it that the demigod Māui lassooed the sun from its peak to slow its journey across the sky, ensuring enough light for farming. This story emphasizes the sun's vital role in sustaining life in Hawaii. The top I chose symbolizes Ka Lā (the sun), a source of light and renewal. Watching the sunrise at Haleakalā fosters a deep respect for the land and a connection to ancestors. This experience embodies the spirit of Pono-living, in harmony with nature and embracing the cycles of life. Through my design, I honor the sacredness of Haleakalā and the enduring bond between the land, the sun, and the Hawaiian people.

(翻訳) 私の家は休火山ハレアカラ山にあり、文化的歴史と精神的意義の豊かな場所である。足元に広がる大地にインスピレーションを受け、その美しさと神聖さを反映したスカートをデザインした。縞模様の赤い着物は、数十万年を通して、ハレアカラ山の稜線と谷を形作った溶岩の層を表している。ハワイ語で「太陽の家」を意味するハレアカラ山はハワイ神話で崇拝されている。伝説によると、半神マウイが山頂から太陽を投げ縄で捕まえ、その動きを遅らせて農作業に十分な光を確保したと言われている。この話は、ハワイの生命を維持する上で太陽が重要な役割を担っていることを強調している。私が選んだトップは、光と再生の源である「Ka Lā」(太陽)を象徴している。ハレアカラ山で日の出を見ることは、大地への深い尊敬と祖先とのつながりを育む。この体験は、自然と調和し、生命のサイクルを受け入れるポノ・リビングの精神を体現している。私のデザインを通して、ハレアカラ山の神聖さと、土地、太陽、ハワイの人々の永遠の絆に敬意を表す。

No. 043

Brielle Pacli-Donato (ハワイ大学マウイカレッジ UHMC)

[WaiKō*] (写真25)

(原文) This wearable art piece represents the sugarcane crops that were grown on Maui. The white and peach upcycled furisode reflects Maui's official pink color. The purple michiyuki and blue textured organza symbolize the water from irrigation furrows

created by workers, with pieces of the michiyuki also flowing along the dress's side. At the bottom of the dress, green organza was shapely cut and sewn to imitate the sugarcane.

(翻訳) マウイ島で栽培されていたサトウキビを表現したウェアラブル・アート。アップサイクルした白色と桃色の振袖は、マウイ島の公式色であるピンクを反映した。紫の道行着物コートとブルーのオーガンジーは、労働者が作った灌漑用の溝から湧き出る水を象徴しており、道行着物コートの切れ端もドレスの脇に流れているようにあしらっている。ドレスの裾には、サトウキビを模してグリーンのオーガンジーが裁断され縫い付けられている。* WaiKōはハワイ語で水

No. 5

水谷 由美子 (山口県立大学名誉教授)

[循環の風] (写真26)

着古された道行コートを使い、着物風ワンピースをデザインした。一切、切られていないコートは手縫いで加工したため元の着物に戻り循環する。端切れのパッチワーク、縫いとめる、内側の紐で吊り上げるなどの技法により、風がもたらした造形というイメージを表現した。サザエの蓋を洗淨・穴空け・表面漆塗装などの加工を施し、オリジナルな装飾用ボタンを制作した。

着物提供：田村哲信 ボタン加工指導：桑原大内塗大内人形製作所

協力：原亜紀夫 松浦奈津子

No. 6

カイサヨコ (テキストスタイル作家)

[Wake me up!] (写真27)

織物産地は素材の宝庫である。糸や布、眠っている素材たちの声が渦巻いている。大地からの恵の鮮やかなブルーに目覚めさせてもらったかのように素材は命を吹き返す。海のブルーが心を癒してくれるように身に纏う人や周りの人の心へ穏やかな空気が流れ人々の心を癒してくれますように。

素材：絹織生地 (丹後ちりめん) 絹糸

技法：自家栽培藍生葉染

協力：与謝野町立織物技能訓練センター 田茂井康悦



写真25 WaiKo



写真26 循環の風



写真27 Wake me up!



写真28 白銀比のプルオーバー&スカート

No. 7

小田 玲子（周南公立大学非常勤講師、手芸サークル主宰）

[白銀比のプルオーバー&スカート]（写真28）

反物で真四角のプルオーバーを作ってみようと思ひ、シンプルなデザインを追求しました。取り外し可能な襟も作った。完成後「白銀比」という日本古来の美的比率があることを知った。試しにパーツの比率を調べたら近似値が出たので驚いた。もらった反物でボックスプリーツ付きのギャザースカートを作って合わせた。

No. 8

おおうち あみ（ニットデザイナー）

[球体ピンクタックワンピース]（写真29）

透かし模様の着物の裏を見て着想を得た作品。織物の技法に驚き、表と裏を組み合わせ作品にすることで、織物の奥深さと面白さを表現した。さらにボールを布で交互につつむことでピンクタックとなり、ボリュームたっぷりの作品となった。

No. 9

武永 佳奈（倉敷市立短期大学専任講師）

[芒に月]（写真30）

廃棄となる2枚の着物を使い、和を感じさせるスーツを制作。花札の「芒に月」の配色と、ジャケットとパンツにかけ繋がる円で、調和や力強さを表現した。

No. 10

原田 裕作（滋賀県立大学大学院生、山口企画デザイン研究所研究員）

[循環一糸と水一]（写真31）

布の製造（織り）工程で発生する「ふさ耳」をリメイクした作品。繊維廃材が新たに「循環」する様子と、海と山を通じて水が「循環」する様子を重ね合わせ、デザインに落とし込んだ。今回は主に綿の先染め織物が織られる際に発生したものを使用し、多くの色が混じり、かつ非常に柔らかいという素材由来の特徴をデザインに活かしている。

素材提供：兵庫県立工業技術センター 繊維工業技術支援センター

No. 11

石田 彩夏（山口企画デザイン研究所研究員）

[Garden]（写真32）

風が吹き抜ける洋風庭園をイメージしたドレス。素材には古くなったカーテン、およびカーテンレース生地を使用した。揺れる木々、フラワーアーチなどから着想を得て、華やかな緑のツヤ感や生き生きとした花のハリを表現した。

No. 12

有限会社マヴェリック

[カーボンリサイクル技術でゴミの地産地消を実現し、地域全体が繁栄する仕組み]（写真33）

カーボンリサイクル技術を活用し、行政や事業者、地域の人々と連携して「カーボン循環型社会」を創造することで、地域のゴミを資源に変え、海や山を再生することができる。このプロジェクトは、ブルーカーボン（海洋）とグリーンカーボン（森林）を活用し、自然環境の再生を目指し、自然と人間が調和し、地域全体が共に繁栄する社会を実現することを目指している。

（文責：原田裕作）



写真29 球体ピンタックワンピース



写真30 芒に月



写真31 循環－糸と水－



写真32 Garden



写真33 カーボンリサイクル技術でゴミの地産地消を実現し、地域全体が繁栄する仕組み

3 アップサイクルをテーマとした創作活動

(1) 「房耳」を用いた作品「循環糸と水一」

1) 製織過程に発生する繊維屑

本作品では、布の製織過程で発生する廃材を主素材に用いている。この廃材はレピア織機やジャカード織機などのシャトルレス織機で布地が織られる際に発生する房状の耳であり、房耳（ふさみみ）あるいは捨て耳と呼ばれている。シャトル（杼）を用いない高速織機では、織機で打ち込まれた緯糸を、特殊な機構で切りそろえることにより、布地の両端に房耳が発生する。そのため、織られた布地の長さに対応して房耳が排出されており、織工場では織機横に置いた箱や袋で房耳を回収し、自社焼却や産業廃棄物として処理している。昨今、繊維産業では製造工程内で発生した繊維廃棄物、繊維屑の再資源化に積極的に取り組まれており、その流れから房耳についても再活用の可能性が模索されている。房耳は織布の素材によって風合いは異なるが、切断された緯糸が広がり柔らかな特有の素材感を有している（写真34）。織物産地などでは、この特徴的な素材感を活かしてインテリア雑貨や小物などにアップサイクルされる事例が確認される。

2) 「房耳」の素材感から発想した服飾造形

本制作では兵庫県立工業技術センター繊維技術支援センター（兵庫県西脇市）から提供を受けた房耳を用いて、服飾作品を制作した。兵庫県西脇市は日本を代表する先染織物の産地であり、「播州織（ばんしゅうおり）」の名で知られている。提供を受けた房耳は主に綿織物が織られる際に発生したものであり、素材由来の柔らかな風合いが特徴的である（写真35）。また、一連の房耳においても様々な色や素材が入り混ざり、偶発的に配色されているが、これは先染織物由来の房耳ならではの特徴といえる。そのような房耳がもつ素材感、特性から着想を得て、ツーピースドレスを制作した。

房耳は数センチの幅の織耳であり、露出している糸は固定されているため、簡単に抜け落ちることはないが、制作に用いるには形状が安定しない。そこで、「結ぶ」「編む」や布地に叩きつけるなどいくつかの手法を検討して試作を行った。最終的には房耳特有の柔らかさと密集させるとボリューム感が生まれる特性を活かし、手織りで粗く織り上げることにより、新たな表現を見出すことができると考えた。そして織りあげた複数のパーツを房耳によって結合させることで、衣服を形作った（写真36）。また鮮やかな色味が重なる房耳を活かし、一体感のある衣服としてデザインす



写真34 作品に用いた房耳



写真35 房耳を手織りして作成したパーツ

るため、黒のバックサテンを用いたロングスカートと組み合わせてスタイリングした。

3) 制作に込めたテーマ「循環」

本作品は「海と陸のアップサイクル」のテーマのもと制作している。作品につけた「循環」のキーワードは、海と陸を巡る水の「循環」の様子と製織工程の廃材を再び織り上げてテキスタイルに戻すという「循環」を掛け表している。本制作では、偶発的に生まれた配色や風合いを持つ房耳に着目し、そこに意味やテーマを与えることで新たに素材としての価値を見出すことができた。このような廃材による造形活動の事例は多くみられるが、それらが直接的に問題解決に寄与するわけではない。しかし、廃材に美的感覚を介入させることで、他者と問題意識を共有するメディアとしての役割を果たすことができるのではないかと考える。（文責：原田裕作）



写真36 「循環―糸と水―」トップス部分

(2) 「未来の海を光で輝かせるクラゲ達」

1) ライトモードアートで海洋プラスチック問題に取り組む

柏原はライトアーティストとしてキャリアを始め、1985年頃から容易にLEDが入手できるようになったため、LEDを組み込んだ身にまとう光のアートを制

作し、発表を始めた。それらは身につけた人の生命反応を様々なセンサーで捉え、光に変換するインタラクティブな光のシステムを組み込んだ作品である。2000年ごろからはこれらの作品にライトモードアートと名付け、海外でのテクノロジーファッションショーやパフォーマンスイベントで発表してきた。

この活動の途上で2019年にバンクーバーで開催される海洋プラスチック問題をテーマにしたイベント「Future Oceans 2019」に誘われた。その時までにはこの環境汚染問題をテーマにリサイクル素材などを使って作品を制作したことはなかった。

しかしSDGs、サステナブルといったテーマは次世代に繋げてゆくべきだと考え、携わっていた桜美林大学の授業に組み込む提案をし、その結果学生たちと制作することにした。その経緯が学生の父母から安倍昭恵氏に伝わり、フランスで開催されるサミットに出かける際のアクセサリを制作する機会を得た。またその縁で今回のシンポジウムへの参加となった（写真37）。

2) クリーンアップキャンペーンと光くらげのドレスデザイン

今回の会場に展示した作品は「Future Oceans 2019」のランウェイショーに出品した作品3点のうちの2点“Jellyfish-Avenir”“Jellyfish-Futuro”である（写真38）。

作品は学生達と春先の湘南海岸でのクリーンアップキャンペーンに参加することから始まった（写真39）。海岸は一見するとゴミなどないように見えた。しかし総勢100人ほどの一般のキャンペーン参加者に混じってゴミを集めると大量のプラスチックゴミが採集された。それらを持ち帰りその活用方法を検討した（写真40）。

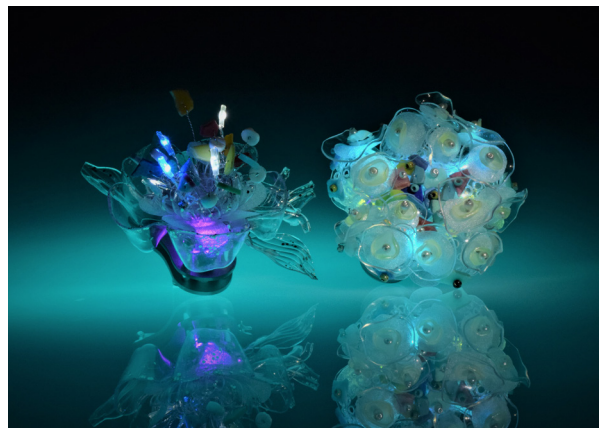


写真37 昭恵氏に提供したリサイクルペットボトルと海洋プラスチックゴミに光を入れたブローチ

同時に出品作品のテーマをディスカッションし、海洋生物の中でクラゲには発光したり、海水を浄化する能力を有するものがあり、また自ら分裂し、コピーを作り増加したり、中には不老不死といえるものもあると調べた。そこでミステリアスな存在である光るクラゲをモチーフに、未来的な光のクラゲドレスを制作することになった。またプラスチックゴミ問題をアピールするため、「プラスチックゴミを食べたクラゲ」のイメージを組み込み、未来の海のために貢献してくれることを期待した（写真41）。

本体は和紙に綿を裏打ちした生地を使用し、クラゲが海中に漂うような表現になるように襟、袖、スカートの下部に白い透けるシルクオーガンジーを使った。腕を広げると大きな円になり少しの動きでもゆらゆらとするようなデザインにした（写真42）。

そこに採集してきた海洋プラスチックゴミの小さなパーツを選んでビーズのように装飾として取り付けた（写真43）。また光るクラゲのようにLEDの光も入れたが、実は発光ではなく動きによる反射で光っているように見えるクラゲもいると知り、ペットボトルのパーツで光を反射する効果も併せて組み込んだ。

今回選択した光るクラゲという造形テーマは光を組み込むことで、海中の暗さを意識して照度の低い空間でその存在感を強くさせた。また見え隠れする海洋プラスチックゴミの装飾パーツに光をあてたり、シルエットで浮かばせることが出来た。海洋ゴミのテーマと共に光の作品としても成立していると思う。光を身につける物や衣装に組み込む場合、イルミネーション的に装飾として組み込むか、内在させて間接照明的に組み込むのが一般的となるのだが、光に装飾パーツを照らすという機能と、形状を浮かび上がらせるという

機能を持たせたので、光で存在感をもたせられる作品となった。

3) ファッションの多様性について

これまで参加した海外でのテクノロジーファッションやガラスアートのファッションショーに関しては、多くのアーティストが時代における流行性や、新規性、テクニックなどを取り上げて制作発表しているのを見てきた。今回のブルー&グリーンアートプロジェクトが開催した展覧会のようにファッションでダイレクトに環境問題をテーマとして打ち出し、アップサイクルに繋げることができるのは、ファッションが社会性を常に強く意識し、表現媒体として多様性を持つからだ。この試みが世界中で深刻になる環境問題を考える中で、一つのきっかけになることを願っている。

（文責：柏原エリナ）



写真38 光クラゲドレス “Jellyfish-Avenir” “Jellyfish-Futuro” inバンクーバー



写真39 湘南海岸クリーンアップキャンペーン参加



写真40 採集した海洋プラスチックゴミ



写真42 光クラゲドレス“Jellyfish-Avenir”



写真41 原寸スケッチ



写真43 制作風景

IVまとめ

本論は「服飾デザインを通じた地域創生と国際交流」をテーマとし、主にBGAP2024の活動の中で服飾デザインの領域から考察した。サステナブルをテーマにしたBGAPの前身アグリアート・フェスティバルから今日までの服飾デザインの活動を、地域創生と国際交流の観点から検証した。

アグリアート・フェスティバルでは、7年間の間、棚田の再生、農業文化振興を目指した服飾デザインと地域活動を実施した。その結果、舞台のパフォーマンスや棚田でのファッションショーを通じて地域との共同、共創が実現された。最終年に、棚田の開墾をしてハープ畑へと再生させる活動にも参加し、有意義な結果となった。

デザインを通じた国際交流については、山口の地域資源である素材を用いて、フィンランドを中心に、フランス、中国、韓国及びハワイとの共同のワークショップに取り組んできた。今回はハワイ大学マウイ校との共同と共創が実現された。オンラインによる学生への質問への返信から理解されたことは、彼女が日本文化である着物に対して尊重し、慎重に扱ったことと、また日本文化としての着物と自らの文化のアイデンティティを融合しようとしたことであった。これらのことから、地域創生を目指す服飾デザインにおける多文化融合の可能性が実感された。

着物のアップサイクルの他に、工場廃棄物、海ごみ、店舗や工房の在庫などが活用された作品も展示された。いずれも素材に手を加えることで、新しい生命が宿り、新しい価値が創出されていた。アップサイクルの活動を通じて、使用され捨てられようとしている布や衣服についての改めた理解や価値の見直しが行われ、そこから新しい価値が生み出されていると考える。

以上のように服飾デザインを通じて、地域創生と国際交流の活動を行ってきた。今後の実践研究の方向性を示唆するものとして、長坂真護の提唱する環境と文化と経済の循環を目指すサステナブルキャピタリズムがある。小さな活動であるかもしれないが、経済へと少しでも循環させられるような創作活動を行うことが今後の一つの目標となった。

謝辞

今回の研究を実現するために全般において安倍昭恵BGAP会長、BGAP代表顧問の柳居俊学山口県議長議長および周防大島におけるプロジェクトでは山口県立大学岡正朗理事長に多大なご指導を頂いたのでこの場

をお借りしてお礼を申し上げる。ハワイ大学マウイカレッジから学生を派遣したステファニー・オヒガシ、学生の参加への最初の導入をしたシェリル・マエダ元ハワイ大学マウイ校教員、オヒガシとの調整をしたウィルソン エイミー山口県立大学国際文化学部教授、英語整文の校正をしたマイケル シドニー山口県立大学国際交流員、その他、当実践研究を支えた多くの方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げる。

註

- 1 水谷由美子・下川まつゑ・原田裕作 「地域におけるサステナブルな創造活動とウェルビーイング～『BGAP2023 海と陸とウェルビーイング～ 幸せは手仕事にやどる』を事例として～」『山口県立大学学術情報17巻』山口県立大学、2024、691-747頁。を参照されたい。
- 2 水谷由美子・神大樹・片山涼子・永留靖洋「山口市における産公学連携によるアートがある街の創造－『アグリ・アート・ツーリズム』の実践的研究－」『山口県立大学大学院論集第9号』山口県立大学、2008年、39-50頁。
- 3 水谷由美子・高橋潤一郎・下川まつゑ・田村奈美「服飾デザインと地域資源のレジリエンス：スーパーグローバル・ファッションワークショップ2019とアグリアート・フェスティバル2019を事例として」『山口県立大学学術情報13巻』山口県立大学、2020年、27-59頁。左記において、今回のテーマである服飾デザインを通じた地域創生と国際交流について、アグリアート・フェスティバルとスーパー・グローバルファッションワークショップにおける実践的な作品事例を詳細に紹介している。

■本文写真撮影者及び提供者リスト

- 写真1+4 志賀敏彦
 写真2 OOMO Photograph
 写真3 伊勢本賢
 写真5+6+9+16-33 貝崎健
 写真7 竹島良
 写真8+12 鴨瀬克己
 写真10+11+13+14 水谷由美子
 写真15 安倍昭恵
 写真34+35 原田裕作
 写真36 武永佳奈
 写真37-43 柏原エリナ

■付録1-1 写真撮影者 川部耶萌

■付録2-1 写真撮影者 貝崎健

付録I-1

「ブルー & グリーンアートプロジェクトBGAP 2023Vol.2 海のある周防大島とハワイの幸福 ～地域循環共生と再生型観光の視点から～」収録

I 主催者及び来賓の挨拶

- 主催者 安倍昭恵 ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会 会長
- 来賓 柳居俊学 山口県会議長
岸 信千世 衆議院議員
岡 正朗 山口県立大学理事長
- 来賓紹介 畑原勇太・有近まちこ
山口県会議員
藤本浄孝 周防大島町長
- 主催者紹介 水谷由美子 ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会 実行委員長

II 基調プレゼンテーション「ニホンアワサングの施設開館を祝して」

周防大島高校普通科環境コース生徒

III シンポジウム「海のある周防大島とハワイの幸福 ～地域循環共生と再生型観光の視点から～」

パネラー

佐々木真二郎（環境省大臣官房地域政策課地域循環共生圏推進室長）「地域循環共生圏の推進」

ミツエ・ヴァーレイ（ハワイ州観光局日本支局 支局長）「ハワイの再生型観光について」

藤本浄孝（周防大島町長）「ニホンアワサングの学習施設開館の意義と活用」

コメンテーター

安倍昭恵（ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会 会長）

モデレーター

水谷由美子（ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会 実行委員長・山口県立大学名誉教授）

司会 柳沢みゆう（周防大島高校生徒）

I 主催者及び来賓の挨拶

（柳沢） 皆様、長らくお待ちいたしました。ただいまより「ブルー&グリーンアートプロジェクト2023 Vol.2 海のある周防大島とハワイの幸福～地域循環共生と再生型観光の視点から～」を開催いたします。

本日の進行は、周防大島高校、柳沢が務めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。（拍手）

まずは、主催者を代表いたしまして、ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会会長、安倍昭恵が御挨拶させていただきます。安倍昭恵会長、よろしく申し上げます。

○安倍昭恵 ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会会長 皆さん、おはようございます。御紹介をいただきました安倍昭恵でございます。

あいにくの今日は雨になりましたけれども、皆さん、お忙しい中、BGAP企画の海のある周防大島とハワイの幸福という企画で、この会に皆さん、お越しいただきましてありがとうございます。

私は、後ほど御紹介がある山口県立大学の水谷先生とともに、この山口県の地域の活性化についていろいろなプロジェクトを進めてまいりましたけれども、2020年からこのBGAPを立ち上げまして、今回、またこのような形で、周防大島で開催できることを大変うれしく思っております。

周防大島高校の皆さんともこうして協力して地域のことを考えていかれるということ、大変重要なことだろうなと。この若い方たちが地域のことを考えていくというのが本当に大切なことだろうなというふうに思っているところです。

また、今日は、環境省の佐々木さん、そして藤本町長にもお話をいただきます。

また、遠くはハワイからミツエ・ヴァーレイさんにもいろいろな御縁がつながってお越しをいただくことになりました。

皆さん方にはしっかりとこの地域のことを考える機会にしていだければなと思いますので、最後までどうぞよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 安倍昭恵会長、ありがとうございました。

続きまして、御来賓の皆様より御祝辞を賜りたいと存じます。

まず、山口県会議長、柳居俊学様、よろしくお願い申し上げます。

○柳居俊学 山口県会議長 祝辞「ブルー&グリーンアートプロジェクトBGAP 2023 Vol.2海のある周防大島とハワイの幸福」の開催に当たり、一言お祝いを申し上げます。

プロジェクト会長の安倍昭恵様、ハワイ州観光局日本支局支局長ミツエ・ヴァーレイ様、実行委員長をお務めの水谷由美子山口県立大学名誉教授をはじめ、シンポジウム開催に当たり御尽力をいただいた全ての皆様方に深く敬意を表する次第であります。

さて、瀬戸内のハワイと称される周防大島は、温暖な気候、穏やかな海、そして豊かな自然という地域特性を活かした独自の価値づくりによりまして、新たな人の流れと地域産業に好循環を生む取組が目目をされています。

一方で、明治時代、多くの島民の移住をはじめとして以来、世代を越えての往来が続くハワイとの交流。

また、歩く、見る、聞くことを大切に、全国の離島や農産漁村などを訪ね、地域に伝わる芸能などの発掘と育成を通じ、地域を活性化に導いた民俗学者、宮本常一先生の出身地であることなど、様々な分野で社会を切り開いた多くの先覚者を輩出したしております。

多彩な表情を持つこの島で、地域循環共生と再生型観光の視点から意見交換が行われ、新たなアプローチによる地域活性化の取組に強い関心を抱いているところであります。

こうした中、昨日、グランドオープンを行いました地家室園地休息所、そして拠点施設は、日本最大級のニホンアワサングの群生地が広がり、瀬戸内国立公園に指定をされる、ここ地家室を含む白木半島地区の地域資源を活用した瀬戸内海の自然体験や環境学習の拠点となるものであり、この施設を核とする交流人口の拡大によりまして、地域の活性化に大いに期待をいたしているところであります。

ここで御紹介をさせていただきますが、この拠点施設の設置に当たりましては、安倍昭恵様に並々な御協力をいただいたところであります。

併せて、開催されるニホンアワサングに着想されたオリジナルアロハシャツの展覧会は、周防大島の宝であるアワサングを多くの人に知ってもらおう好機と思っています。

私ども県議会といたしましても、将来にわたって県民生活が豊かなものとなるよう、活力ある地方創生に向けた取組を推し進めてまいりますので、引き続き、皆様方の御支援、御協力を賜りますよう、お願いを申し上げます。

本日のシンポジウムおよび展覧会の御盛會と御参集の皆様方の御健勝、御多幸を念願をいたし、お祝いの言葉といたします。

令和6年3月24日、山口県議会議員、柳居俊学。おめでとうございます。（拍手）

○司会 柳居俊学様、ありがとうございます。

続きまして、衆議院議員、岸信千世様、お願いい

たします。

○岸信千世 衆議院議員 おはようございます。ただいま御紹介賜りました衆議院議員の岸信千世と申し上げます。

本日は、このように盛大に皆様、お集まりの下、ブルー＆グリーンアートプロジェクトのこのようなシンポジウムが開催されますことを心よりお喜び申し上げます。

また、日頃から皆様にもお世話になっておりますけれども、日頃からの我々の活動についても多大なる御協力いただきますこと、この場をお借りしまして、改めて感謝申し上げます。

本日は、安倍昭恵会長並びに水谷由美子実行委員長、また周防大島町長、藤本町長、また柳居議長はじめ、岡理事長はじめ、様々な御来賓の皆様が御参集の下、このように地家室園地のオープン記念のシンポジウムが開催されますことを心よりお喜び申し上げます。

また、海の花束とも呼ばれておりますこのニホンアワサング、この国内最大規模の群生地となる周防大島で、自然に触れて環境を学べると。そうした場所が誕生したことは大変喜ばしいことでありますし、この島の宝というのをぜひ次世代につなげていただける機会となることを祈念いたしております。

今日もあいにくの雨となりましたけれども、雨じゃないとこちらに来ないような方々がちょうど中段、坊主頭の皆さんが来ていらっしゃったりですとか、また私も実は野球をやっていたもので、皆様ともと同じことをやっていました。また、司会の女の子もねえ、前、フラでお会いしましたけれども、そうした次の世代がこういうシンポジウムにも関わるといのが非常に大事なんじゃないかなあと、そのように思っております。

また今回は、周防島町の関係者の皆様、また環境省、そしてハワイ州の観光局の皆様からも熱い御協力をいただきまして、この後、パネラーとして皆様の情報共有、そして様々なディスカッションをされることと伺っております。

こうしたハワイと周防大島、こうした海、きれいな海があり、またこの環境とともに共生をしていく、そのまちづくりをしていくという共通点がある中で、様々なこれからの新しい未来に向けていろんな明るい話をいただけると、そのように信じております。

また、この周防大島がこの環境と観光により、ま

たさらに新しい世界を、未来をつくる。また目指す持続可能な新しい将来をつくるという、壮大な貢献がされるものと、このようなイベントには期待がかかっているところだと思います。

結びになりますけれども、この本プロジェクトが皆様の幸福を高め、そして周防大島町とハワイ州のさらなる活発な交流、併せまして、このたび御参集の皆様の御健勝、御多幸を併せまして、私からのお祝いの御挨拶とさせていただきますと思います。本日は開催、誠にありがとうございます。（拍手）

○司会 岸信千世様、ありがとうございました。

では続いて、山口県立大学理事長、岡正朗様、よろしく願いいたします。

○岡正朗 山口県立大学理事長 皆さん、おはようございます。ただいま御紹介いただきました山口県立大学の岡でございます。

今日は、日本唯一の、唯一と言っていい、ニホンアワサングの観察ができるこの周防大島の研究観察所ができて、その記念シンポジウムとして、ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会で、このようなすばらしいシンポジウムが開かれますことを心からお喜び申し上げますし、私も大変楽しみにして参りました。

このタイトルが海のある周防大島とハワイの幸福というところで、思いましたのは、海は全部つながっているということだけではなく、この周防大島から移民としてハワイに行かれた皆さんの思いがながっているんだなあというのを私、感じておりまして、この名前をつけられた水谷先生がすばらしいなと思っております。

さて、私が出てくると多分、皆さん興味があるのは、県立周防大島高校が令和8年度から山口県立大学附属高校になっていくということで、そのことはとても興味があるんじゃないかと思って、少しお話をさせていただきます。

山口県立大学は、どういう教育をしているかと言いますと、プロジェクトベースラーニングと言いまして、課題を学生が自ら見つけて、そして課題を解決するために様々な勉強と言いますか、学問を重ねていくと。そして自分なりに成果を出していくと。これが4年間の一番大きな目的であります。もちろん専門教育とかそういうのもありますけれども、その中に専門教育があるというふうに理解していただけたらと思います。

こういう時代に、日本グローバル化の時代に、今

の教育が主に大学入試に偏っております。そういうことを考えますと、県立大学としては、高校の3年と大学の4年、3プラス4年を7年間で、ぜひともそういう地域に貢献する優秀な人材を育成したいという思いが非常に強くございました。それで県庁、そして教育庁、そして山口県議会、柳居議長にもお願いを申したところ、学外委員を含めた検討委員会が立ち上がりまして、何度も協議をしていただきました。全ての山口県の公立高校がまず、狙上に上がって、そして私たちが申しあげましたプロジェクトベースラーニングというのに、親和性のある高校はどこだということで、その結果、周防大島高校が最も適任であるという答申を頂き、私たちもまさにそうだというふうに思っております。

本日のニホンアワサングの研究も長年、行われてきて、今日またその発表を聞くのを楽しみにしているんですが、こういうことが山口県立大学との親和性が非常に高いと、またハワイとの交流もグローバルの交流があるということで、様々な点で最もマッチする高校であるということで、最終的にはお願いをして認められております。

これは、まだまだ地元の皆さんとも話をしなきゃいけないというふうに思っているんですが、日本のモデルとなるような高校、大学として発展することを私たちは目指しておりますので、この辺りも御理解いただきまして御支援いただけたらと思います。

お祝いの言葉なのに、お願いばかり申し上げましたけども、本日のシンポジウムが皆さんにとってすばらしい思い出になっていくことを心から祈念をして、私のお祝いの挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございます。（拍手）

○司会 岡正朗様、ありがとうございました。

それでは、ただいま御挨拶をいただきました皆様のほかにも、本日、お越しいただきました御来賓の方を御紹介いたします。

山口県議会議員、畑原勇太様です。（拍手）

○畑原勇太 山口県議会議員 本日はおめでとうございます。（拍手）

○司会 山口県議会議員、有近まちこ様です。（拍手）

○有近まちこ 山口県議会議員 アロハー。（拍手）

○司会 本日はお忙しい中、御臨席を賜りまして、誠にありがとうございます。

それでは、後ほどシンポジウムに登壇します共催者と実行委員長を御紹介いたします。

まず、共催者の周防大島町長、藤本浄孝様です。

(拍手)

○藤本浄孝 周防大島町長 本日はよろしく願います。

○司会 続きまして、当BGAP実行委員長の水谷由美子でございます。

○水谷由美子 ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員長 お越しいただきましてありがとうございます。よろしく願います。(拍手)

○司会 以上の皆様の御紹介をもちまして、オープニングを終了いたします。

この後、発表の準備をいたしますので、しばらくお待ちください。御登壇者の皆様は、お席のほうへ御移動をお願いいたします。(拍手)

Ⅱ 基調プレゼンテーション 「ニホンアワサングの施設開館を祝して」

準備が整いましたので、基調プレゼンテーションとして、周防大島高校(校長 安部豊)による発表に移ります。

テーマは、「アワサング保護で日本の未来を救う！周防大島高校初、地域循環共生圏(ローカルSDGsづくり)」です。

○周防大島高校普通科環境コース生徒 今から周防大島高校普通科環境コースの発表を始めます。願います。(拍手)(写真1)

私たちの高校がある周防大島町は、山口県の最東端に位置しており、瀬戸内のハワイと呼ばれています。夏場には多くの観光客が訪れ、体験型、滞在型の観光が積極的に行われています。

また、豊かな自然資源を中心とした農業、水産業が盛んであり、代表的な特産品にミカンや太刀魚、いりこなどがあります。一方で、人口は1万5,000人弱と減少傾向にあり、特に高齢化率は高く、54%を

超えています。

私たちが研究しているニホンアワサングは、2013年に周防大島地家室沖で生息が確認されました。とても鮮やかな色で、花のような見た目から、海の花束と呼ばれています。周防大島には3,000平方メートルを超える世界最大級のニホンアワサングの群生地があり、重要な観光資源の一つであると考えています。

ところで、皆さんは、地域循環共生圏を御存じですか。これは、地域の中で資源が循環する地域分散型の社会をつくり、地域同士が互いに資源を保管し、支え合うという考え方です。ローカルSDGsとも呼ばれています。

周防大島では、食料などの自然資源や生態系サービスを活用して、自立した社会を形成している一方で、人口減少などの問題を抱えています。また、都市部は多くの若者がいますが、食料などの自然資源や生態系サービスが不足しています。もし、周防大島のような農産漁村部が崩壊してしまうと、都市部へ食料などが供給されなくなり、都市部も成り立たなくなる、つまり日本が成り立たなくなってしまうのです。

そこで、周防大島高校では、生徒の力を活用しながら、エコツーリズムや自然保護活動の実施により、資金や人材の供給を受け、地域を活性化させることで、持続可能な社会をつくる、つまり日本の未来を救う活動を行っています。

自立した地域とは、自ら課題解決を続け、地域づくりを継続している地域のことです。つまり、環境、社会、経済の課題を同時解決するローカルSDGs事業を地域で数多く生み出していく必要があります。

周防大島高校では、アワサングを保護し、未来につなげていくこと、アワサングと地域の共生を通じて地域活性化を図ることという2つの視点から様々な取組を行っています。

○周防大島高校普通科環境コース生徒 この研究を始めたきっかけは、2020年秋に、周防大島のアワサングに原因不明の大量死が発生したことです。そこで、アワサングの保護や生態調査を行い、大量死の原因解明に取り組みました。

自然公園指導員の藤本様と連携し、実際に現地での潜水調査などを行いました。

また、環境省の許可を得てアワサングの採取をし、学校での飼育を行うことで生態解明を目指しました。学校の飼育設備の様子です。玄関付近に設置する



写真1 周防大島高校による基調プレゼンテーション

ことで、生徒はもちろん、多くの来校者の方に見ていただき、興味を持っていただきました。

アワサングは、光合成を行う褐虫藻を体内に保有し、栄養分を得ています。こちらのスライドのように、様々な取組を行い、少しずつ生態が分かってきました。

また、水温管理により、生育に適した温度が10℃から28℃であることが分かりました。

宇部環境技術センターの協力により、島内の海水の検査も行いました。

また、岩国市ミクロ生物館の末友靖隆館長の協力により、プランクトンの調査も行いました。その結果、アワサングが生育する海域は、他の海域と比べ、窒素やリンの成分が多いことや植物プランクトンが多いことが分かりました。

水槽内での幼生の放出を確認することができました。実際に放出した幼生が自然の岩石に着生することも確認されました。今後は、アワサングの繁殖を目指していきます。

○周防大島高校普通科環境コース生徒 アワサングが生育する海域には、スナモグリが多く生息していることから、湧水が多いと推測されています。地家室付近には、落葉樹であるアベマキが多く生息しているため、養分豊富な湧水により、アワサングの生育に適した環境になっていると考えました。

そこで、竹林の整備や落葉樹のアベマキの植樹など、湧水の供給源である里山の整備活動を地元のNPO団体と連携して行いました。この森の整備、維持には、ボランティアの力やアベマキの苗、道具など、年間100万円程度かかっていることが分かりました。

また、この地域に多く自生する水仙を移植し、水仙の里とすることで、見頃の時期には多くの観光客が訪れる観光スポットとなっています。

アワサングが生息する海を守るために、地域のごみ拾い等を地域の団体やボランティアの方と一緒に行いました。

収集されたごみは、発泡スチロールなどのプラスチック類が多いことが分かりました。周防大島町では、海岸清掃等の分別したごみは、町が回収してくれていますが、町の生活衛生課に確認すると、年間120万円程度のごみ処理費用がかかっていることが分かりました。

また、海ごみなどは分別できないものも多く、産業廃棄物として処理する場合、1回16万円程度の処

理費用がかかっていることが分かりました。現在は、環境省の補助金などで賄っていますが、このままでは成り立たなくなってしまうというお話も伺いました。

また、マイクロプラスチックの調査も行っています。

有害物質に汚染されたマイクロプラスチックが、アワサングに付着したり、魚が誤飲したりすることで、生物に大きな影響を与える可能性があります。

トレードオフという言葉を知っていますか。これは、何かを得ようとして何かを失うことを意味しています。

島に観光客を増やすことで経済を動かし、地域活性化にはなりますが、ごみ問題が増えてしまっただけでは、この環境を持続していくことはできません。私たちは、ごみを減らすという観点から島の特産品であるミカンの皮に含まれるリモネンを取り出し、発泡スチロールを溶かすことで体積を10分の1以下に減らし、ごみの運搬コストを抑えたり、再資源化することを研究しています。

また、海ごみを減らすため、小学生などへの授業を行うとともに、海辺の会が実施する海のエコボックスプロジェクトに参加し、啓発リーフレットの作成も行っています。

これらの取組の結果、2020年に比べてアワサングの状態は回復しています。

○周防大島高校普通科環境コース生徒 これまで取り組んできた様々な環境保護の取組には、多くの人の力や資金が必要であることが分かりました。

そこで、周防大島の魅力的な自然環境を生かしつつ、都市部などの人の力や資金を協力してもらい、島の課題を解決し、島の環境を未来につなげていくためのツアー型プロジェクト、島キャンを考えました。

高校生が提案したプログラムを基に、地域の団体と町が連携してニホンアワサングの保全を盛り込んだクリアカヤックでのアワサング見学ツアーが行われました。

このようなプログラムを実施し、多くの人が参加することで、環境について興味を持つ人を増やすとともにツアーガイドなどの雇用の創出、観光客の増加等による地域経済の活性化など、さまざまな効果があつたと考えています。

これまでのような取組を継続していくことで、持続可能な地域づくりができると考えていますが、取

組を展開していくためには、お互いに連携する仕組みづくりが必要となってきます。この仕組みづくりとして、周防大島高校が中心となり、多くのステークホルダーと連携し、地域のプラットフォームづくりを行っています。

また、デジタルツールを活用したプラットフォームにより、私たちが企画したアイデアを地域の団体と共同して実施しています。

周防大島には、まだまだたくさんの観光資源や魅力があります。本年度、ニホンアワサンゴを保護する資金を得る目的でクラウドファンディングを行ったところ、50人以上という多くの人から資金支援を頂きました。その結果、総額約100万円が集まり、地元の環境保全団体に寄付することができました。

今後も様々な島キャンを企画し、地元団体等と連携して一緒に環境保護活動を行っていきたいと思います。

また、地家室の拠点施設と連携し、アワサンゴを中心とした様々な取組により、周防大島への再訪問者、移住者を増加させ、環境保全を行うことで、明るい未来につなげていきたいと考えています。

私たちの取組に御協力いただいた多くの方々に、この場を借りて深くお礼申し上げます。

御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございます。続きまして、シンポジウムに移らせていただきます。

準備を行いますので、いましばらくお待ちください。

Ⅲ シンポジウム 「海のある周防大島とハワイの幸福～地域循環共生と再生型観光の視点から～」

準備が整いましたので、シンポジウム登壇者は舞台にお上がりください。

それでは、ただいまよりシンポジウム、「海のある周防大島とハワイの幸福～地域循環共生と再生型観光の視点から～」を始めます。進行は、モデレーターとして、本実行委員長、水谷由美子が行います。

それでは水谷実行委員長、よろしくお願いいたします。

○モデレーター 水谷由美子 それでは、ただいまからシンポジウムを開催させていただきます。

先ほどの高校生の皆さんのプレゼンテーションがすばらしくて感動しました。（写真2）

それでは、本日お呼びしております皆様を、簡単に御紹介します。皆様の具体的な活動内容などは、

プレゼンテーションの中でお話しいただくということで、まずは、パネリストの、ハワイから本日来ていただきました、ハワイ州観光局日本支局支局長をしてられますミツエ・ヴァーレイさんです。（拍手）（写真3）

続きまして、環境省の、まさにこの地域循環共生推進の室長をされております佐々木真二郎さんでいらっしゃいます。（拍手）

そして、この周防大島を引っ張っておられます町長の藤本浄孝様でございます。（拍手）

そして、コメンテーターとして、我々BGAP会長の安倍昭恵様です。（拍手）

改めまして、私がBGAPの実行委員長をさせていただいています水谷由美子でございます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

それでは、最初に私のほうで、ちょっと数分だけ今までの流れについてお話をさせていただきます。

私どものブルー＆グリーンアートプロジェクトですが、2020年から発足させていただいたんですけれども、この周防大島町では、もう3年連続シンポジウムをさせていただいております。最初は、「海の豊かさを周防大島における近未来の生活デザインに活かす」、副題が「SDGsから白木半島地区の可能



写真2 左から安倍昭恵、水谷由美子



写真3 左からミツエ・ヴァーレイ、佐々木真二郎、藤本浄孝

性を探る」ということで、ここの場所でさせていただきました。そこでは、アワサングに大変注目して、皆さんでアワサングというものを理解したという会でした。

そして、続きまして、先ほど柳居俊学県議会議長からも御挨拶でありましたけれども、ここの御出身の宮本常一先生を取り上げまして、タイトルが、「民俗学者『宮本常一』に学ぶ地域創生～地域循環がある周防大島町のライフデザイン～」ということでした。そして、ニホンアワサング、そして、この歴史文化ですね、この地域のある歴史や文化を大事にしていく、そういう側面を浮かび上がらせつつ、地域循環共生につきましても、示唆をいただいております。そういったものも、この今日、高校生の方の研究にも反映されたのかなというふうにも思っております。

そういうことで2回させていただきました、今日が3回目ということで、まさに私たち地家学園地がまだできる前、地鎮祭じゃありませんが、何かセレモニーがあったときに、昭恵夫人と参加させていただいて、それが昨日、まさにオープンされたということで、この周防大島の歴史とともに私たちもシンポジウムをさせてきていただいているというふうにも思っております。

ここに、冊子として、今までのシンポジウムの記録がございますので、皆様もこの冊子のほうから見ていただけたらと思っております。そして、今年ですね、2024年にやるのに、何で2023年のVOL.2になるかということですが、年度ということで、今までの環境という問題を考えていくときに、我々の人間のウェルビーイングということを注目いたしました。1回目はですね、昭恵夫人のお友達であるデイビッド・ロックフェラー・ジュニア夫妻に来ていただきまして、昨年10月に環境問題を話し合いまして、そして、そこで地域の人と共に活動していくということの大切さとか、また環境問題は一人一人の心の問題なんじゃないかとか、それからウェルビーイングって、やっぱり自分も人も気持ちいいとか、心地よい状態をつくっていくことが大切なんじゃないかとかですね、そういうふうなことが、まとめの中で語られました。

そういうことで、今までいろんな議論をしてまいりました。

そこで、今回は、まさにこの周防大島のこの観光、そして環境というものを発展させていくというとき

に、環境省の提唱される地域循環共生というものを、具体的にどんなふうに全国でやられているかというような話を、佐々木様からしていただきますし、また、ハワイは先端的な世界的観光地でございますから、そこでどういうことが先端的に行われているかということ、今日はわざわざハワイから来ていただいて、私たちのために、いろんなサジェッションをいただくということですね。

そして最後に、皆様方の会場からも御意見をいただいて、そして、より我々のこのシンポジウムが行動につながっていくような形で終わっていったらいいと思いますので、ぜひ皆さん、協力をお願いしたいと思います。スクリーンに今、アワサングのすばらしい美しい姿が映っておりますけれども。

ということで、私の前振りは終わりました、それでは早速、ミツエ・ヴァーレイさんのほうからお話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

○パネラー ミツエ・ヴァーレイ 初めまして。ハワイ州観光局日本支局長をやっておりますミツエ・ヴァーレイです。このたびハワイを通して、本当に御縁ありまして、安倍昭恵会長、そして水谷由美子先生、周防大島にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。(写真3)

初めて私、周防大島に来させていただきました、昨日、ハワイ日本移民資料館も行かせていただきました。ハワイの住民、ルーツを探るのにもものすごくお世話になっておりまして、ぜひ訪れたいということをお願いしまして連れて行っていただいたのですけれども、すばらしい資料館です。皆さん、もちろん行かれたことあると思うのですけれども、ハワイと日本の歴史って本当に長いですね。ハワイも王朝がありましたね。カラカウア王の頃から、そして日系移民の方々、周防大島からもたくさんの方が来ていただいて、本当に60年にわたる姉妹交流をしていただいているということで、去年、周防大島の皆さんにも来ていただきまして、カウアイ島郡長のデレク・カワカミ (Derek Kawakami) 郡長、そして、カウアイ観光局の局長スー・カノホ (Sue Kanoho) も、くれぐれもよろしくということで伝言を預かっております。ありがとうございます。

今回は、再生型観光ということで、ハワイもこのコロナ禍を経まして、かなり方向性が変わってきております。今回は、そのいろいろな事例を基に、コミュニティの方々とどのように、その自然、そして文化を守りながら、ハワイの場合、サステナブル

ツーリズムというのはもうないんですね。再生型観光ですので一緒に復元していくというディレクションに変わっています。そのお話を少しさせていただければと思います。20分ということで、私、実を言うと、たくさん事例をお見せしたくて、50枚ぐらいスライドがあるんですよね。なので、ちょっとスピーディーに行かせていただきたいと思います。

まず皆さん、ハワイに来られたことある方は、手を挙げてみていただけますか。ありがとうございます。たくさん来ていただいて、さすが姉妹都市。ありがとうございます。もう御存じのとおり、太平洋のど真ん中でございまして、日本からは7時間から8時間、そしてカリフォルニアも5時間ぐらいで行けるんですけれども、本当にポリネシア・トライアングルが一番北のほうにあります。今は、太平洋航海、私どもホクレア号、御存じの方もありません。計器を一切使わずに、世界一周を4年かけてしまして、今ちょうど太平洋を一周するというところで、日本、最終寄港地になっております。ぜひこちらにも寄らせていただきたいと思います。と思っています。

そして、ハワイ一周はですね、8つ島があるんですけれども、そのうちの6つに訪れることができます。

一番上からですね、火山噴火とともに火山プレートが移動して、カウアイ島は500万年前にできている島になります。皆さんの姉妹都市がありますカウアイ島。そして今、ハワイ島、一番新しい島、全部の島入れても、すっぽりはまるという大きい島、いまだに大きくなっているんですよ。

そういった意味合いでは、たくさんの研究所がありますし、島それぞれに体験が違うという素晴らしい島々があります。ぜひ皆さん全島、制覇していただきたいと思います。

そして、人口なんですけれども、山口県と少し似ていまして、沖縄も同じです。大体140万、今ちょっと142万人ぐらいにハワイも少し減りまして、ただ、人種のるつぼと言われておりまして、いろんな人種の方々が一緒に過ごしています。ですので、マイノリティが多いと言いますか、安心して過ごせるというんですかね。日系人も今17%ぐらいいます。

そして、このハワイ州、そしてハワイのそれぞれの島が結んでいる姉妹提携都市というのは31都市ありまして、この周防大島、3番目に古い歴史を持つということで、本当にいろいろな形でケーススタディさせていただいています。

そして、このハワイの観光産業に関してなんですけれども、大変重要なところは、やはり雇用、そして、島でお金を使っただいて、州税になって、それが住民の生活向上に携わっていくわけなんですけれども、やはりホテル宿泊税、実を言いますと13.25%でして、ここからの収入が、全ての観光インフラ、そしてプロモーションや今後の再生型観光、そして地元のコミュニティの方々がつくり上げる様々なイベントやプログラム、そういったものに投下されています。ですので、州民の税金を使わずに、旅行者から頂きますこのホテル宿泊税が、メインのリソースとなっています。

そして、ハワイにはハワイ観光戦略というものがありまして、これ5年ごとに発表されるんですけど、その一番大切なのは、この4本柱になっています。この4本柱というのがやはり自然保全、ハワイもですね、すばらしい、15気候帯のうちの13気候帯ぐらいあるというぐらいすばらしい自然がありまして、そしてハワイアンカルチャー、文化もあります。

そして、コミュニティ・リレーションというのは、この観光のみならず、全ての経済において、コミュニティの方々がどのように参画していくか、産官学のみならず、地元のNPOもそうですし、コミュニティ団体がどのように参画していくかというところが一番重要な柱になっています。

そして、ブランド・マーケティング。昔はですね、もうワイキキ、ヤシの木、ココナッツ、バンケーキ、アサイボールみたいなイメージが多かったと思うんですけれども、後ほどビデオを御覧いただきますけれども、プロモーションの仕方を大きく展開しています。

そして、やはりハワイ・ツーリズム・オーソリティというのは、私どもの上局になりますが、ミッションというものがありまして、たくさん来ていただく方にハワイを知っていただく、そのためには地元の中で商品、品質の向上であったり、雇用をしっかり出していく。ハワイもですね、アメリカ本土のほうに若い方々が、みんな流出していくわけですよね。ですので、その島での雇用をどのように確保していくか、そして、自然資源をどのように守っていくか、そして、環境による影響と問題を、どのように責任を持って管理していくか、これがミッションになっています。

そして、そんな中で、私どもは、州民に年に2回、アンケート調査を行っておりまして、旅行者のみな

らず州民の方々が観光業に携わっていない方々にアンケートを取っています。そういった意味合いでは、この満足度というのは、やはり島に入ってくる旅行者が増えれば増えるほど、この満足度が下がってくるというところで、ハワイでは2015年、ちょうど800万人を超えるぐらいからですかね、もう2015年ぐらいから、レスポンシブル・ツーリズムという言葉を使い始めて、いろいろな啓発、啓蒙活動も始めてまいりました。

コロナ禍で49%まで一旦下がりまして、このときにハワイ現地では、ものすごくコミュニティとの対話を島ごとにして、島ごとのアクションプランを出したんですね。こういった背景の中で、私どもマラマハワイ、このマラマというのは、労わる、そして思いやるという意味なんですけれども、自分たちが生まれたところ、そして育ったところ、プライドを持ってどうやって守っていくかパッションを持つ、そして、それを共有する。アロハスピリットのみならず、マラマとアロハの双胴船じゃないと、ぐらぐらと揺れてくるようになりましたよねということで、私どもは、これをスローガンにしています。

そして、このレスポンシブル・ツーリズムという言葉が出た2015年、2016年ですね。ハワイ、結構早かったと思います、この言葉を使うのは。ここで海洋動物に会っても近づかないこと、そして日焼け止めの使用禁止であったり、森林に入るときにシューズの後ろを確認してくださいね、であったり、進入禁止エリア、こういったいろいろなアクションですよ、こういったものを日本語で訳して、いろんな形で旅行会社さんや皆さんとパンフレットを作ったりしていきました。

ハワイの場合は、例えば、ウミガメを見たら3メートル離れなきゃいけないんですね。ウミガメを守る保護団体が来て、黄色いテープを貼ります。であったりとかですね、特に、ハワイアンモンクシール、保護動物ですけれども、15メートルであったりとか、日焼け止めは、特にマウイ島が一番厳しい、島ごとによっても条例が違うんですけれども、ミネラル・サンスクリーン、これを推奨しておりまして、州のビーチにはポンプが置いてあります。

そういった意味合いで、来る前、いらっしゃる前に、どれだけ様々な形で教育できるか、エデュケーションできるか、啓蒙できるかというところでは、こういった情報配信、大変重要視しておりまして、私どもも日本語に訳して、様々な形で、今はデジ

タルマーケティングが多いですけれども、パンフレットなんかも作成しています。

そして、このハワイなんですけれども、実を言うと、日本と違いまして、州ごとに州議会で様々な法案が出て、条例化していきますね。ですので、プラスチックのバッグが、要するに使用禁止になったのも、それからプラスチックの、もちろんストローも一切ないですし、そういった条例という形で罰金になりますので、なっていくのが早かったんですね。

そういった意味合いでは、観光業界の中でも、ホテルは一切プラスチックのお水を置いてありませんので、浄水器があって、できればハワイに来ていただいて、ハワイのメイド・イン・ハワイのマイボトルであったり、マイバッグを買っていただいて、そして過ごしていただくという形で、ホテルも皆さん、もう全協力していますし、ただ宿泊するだけではなくて、宿泊の5%を、森林をもう一回増やそうという植樹、カハラさんなんかやっています、アウトリガーさんなんかは、そのホテルで、サンゴを守るという形でプロジェクトをやって、宿泊で頂くお金の数%を、そういった自然保護に戻すという形で、観光業界の中で挙げています。

私どもはSDGsローカル2030のケース・デスティーネーションのうちの一つなんです。ですので、例えば、州知事が2045年までに全ての電力を再生エネルギーで賄うという形でMOUにサインしまして、こういった業者さん、アトラクションでも100%太陽光発電でオペレーションをしたりということで、かなり観光の中でも環境に優しいホテル、アトラクションというのが紹介されるようになりました。

それでは、ここで、私どもが啓発をするのに、やはりこういったプレゼンテーション、パンフレットだけでは、なかなか難しいんですね。たくさんの方々に知っていただくには、やはりこれからは動画になってきます。そういった意味合いで、私ども、100本、200本という動画を用意して、日本語のサブタイトルをつけてお見せしているんです。これが、「シェア・ウィズ・アロハ」という動画になります。(動画上映)

○パネリスト ミツエ・ヴァーレイ このように、地元の方々にメッセージをしていただくビデオというのを何十本と作っておりまして、これをデジタルマーケティングで事前に配信させていただき、そして、ハワイは、やはりアフプアアといまして、先ほど本当に周防大島の高校生の皆さんのプレゼン

も、すごく周防大島に似ているなと思ったんですけれども、里山と里海が合体している三角地帯が、ハワイ、昔、王国があった時代にたくさんありまして、それぞれに酋長がいたんですよね。このアフプアアを復元しようという地元の次世代のプログラムが、すごく進んでいまして、小学生から野外実習で必ずこういった体験をする野外授業というのがあります。これが一番、地元の方が目指す自給自足のアフプアアという生活共存圏ですね。

そして、地元では、こういったノンプロフィット・オーガナイズーションが、例えば、リーダーが、大学を出て本土にも行って帰ってきて、自分たちハワイのために頑張るんだということで教育者が大変多くてですね、次世代リーダーが、こういった形で、実際にプログラムを組んで山に連れて行って、固有植物の説明をしたり、「ゲンキボール」といって、この培養のボールを、アラワイ運河というドロドロですごく汚れた、汚染された運河に投げて、きれいにしていく、そういった活動であったり、ハワイは主食、タロイモですけども、そういった主食のタロイモの畑を増やしていったり、そういったものを、今度は旅行者も参画していくプログラムにしていこうということで、まずは、地元で教育プログラムをつくって、地元の子供たちのための教育プログラムを、今度は旅行者の方々にも参画していただくプログラムに成長させていくということですね。増えています。

ここにもビデオが1本ありますので、こちらも御覧ください。

(動画上映)

- パネラー ミツエ・ヴァーレイ このように、やはり、実際、体験を通して旅行者の方々にも一緒にタロ畑に入ってもらって、一緒に養魚池を復元していただいて、そして一緒にハイキングをして、固有植物を学びながら食事をしていただくというようなプログラムが、ハワイでもとても増えていまして、エコツーリズム、ボランツリズムというんですかね、大変プログラムが増えていきます。

そんな中で、ちょうどニホンアワサンゴのお話もお聞きしましたので、ハワイのサンゴ礁の保護に関して、ちょっと調べてまいりました。実を言いますと、ハワイ州のサンゴ礁保護も、1972年に、やはり水質汚染防止法が制定されてから、多くのプロジェクトが、しっかりと施行されております。その中でも、やはりハワイ州サンゴ礁状況報告書、これは連

邦政府のNOAAという研究所があるんですけども、ハワイ大学の海洋研究所、すばらしい、世界でナンバーワンと言われております。そういった方々の研究報告書を、州民に向けて、年に1回必ず出てくるんですよね。そういった報告書を通してサンゴのことを学んだり、今コーラル・リーフ・アライアンスと言いまして、これも連邦政府からの補助金でやっている保全プログラム、こういったプログラムを地元の方々にも参画していただいています。

オバマ元大統領に尽力いただきまして、2010年に、このパパハナウモクアケア、ここは世界遺産に登録されまして、たくさんの海洋研究船が行って、いろいろな研究をしております。こういった、実際に紙を見るのではなく、体験できる研究ですよ、そういったものが大変ハワイは多いです。

また、ハワイ州の取組として、やはり「ハワイサンゴ礁戦略2030」、これレポートがありまして、戦略がありまして、これに沿って様々な、特に苗床で小さなサンゴを作って成長させて、そして群体を広げていくっていうんですかね、こういった固有種も大変ハワイには多いので、こういった固有種を守っていくというプログラムは大変盛んに行われておりまして、やはり、産官学の連携というのは大変必要になってきますね。

そして民間、こちらの取組としては、ここの3つは、特に有名な地元のノンプロフィット・オーガニゼーションで、「マラマ・マウナルア」、「コーラル・リーフ・アライアンス」、「マウイ・オーシャン・センター」、特に私どもは、教育旅行の中で、こういった団体の方々に、特別に日本からの学生の方々にもプログラムを体験していただくようなプログラムを作っていただいたり、もしくは、プレゼンテーションをしていただいたりということで協力をしていただいております。

ハワイ大学でも、もう本当にすばらしい研究所がありまして、多くの学生さんが、すばらしい研究をしていますし、プロジェクトもたくさん施行されています。こういった、今回はあまり詳しく説明はしないんですけども、こういったいろいろな事例があるので、ぜひ、周防大島の高校生、山口の大学生の皆さんも、こういった学生同士の交流を、ぜひ広めていただきたいなと思います。

これは、私どもが主催したプロジェクトなんですけれども、これは京都の立命館宇治高校の方々に来ていただいて、ハワイ島の最南端、アメリカの一番

南ですね、カミロポイントに海洋ごみがすごく漂着するんですね。特に、震災の後も、日本からのごみがたくさん漂流していたんですけども、それを集めて、それもマレーシア、シンガポール、台湾、アメリカ本土からいろんな学生が一緒になって集めて、それを仕分けして、そして、プレゼンテーションをつくって、お互いにプレゼンテーションをして、アクティブ・ラーニングですね、意見交換をするということをやりました。

彼らは、帰って鴨川を清掃して、私どもは世界旅行博というハワイパビリオンで、そのごみで亀とか作っていただいて、亀見たら3メートル離れてくださいよって啓発活動と一緒にして、このオブジェは高校にそのまま飾ってあります。こういうような観光を通したいろいろなメッセージもできるということですね。

または、スチューデント・エナジー・サミットといいまして、これは「ブループラネットファンデーション」、これも現地のNPOなんですけど、学生さんを招致して、いろんな国の学生さんが、再生エネルギーに関してアクティブにプレゼンテーションをする、ワンウェイのプレゼンではなくて意見交換ですね、こういった形で学生サミットというのをしております。

これは、大学生から社会人の方も参加した、先ほどのアフプアアの養魚池、昔は数千とあったのが、今数百しか残っていないんですが、地元の方々がそれを、今復元しているんですね。そして、その復元作業に参加してもらって、実際にいろんなディスカッションをする。こういったいろいろな次世代のプロジェクトというのが大変増えています。

そして、旅行会社さんにもこういったものを体験していただいて、実際にマラマハワイ・パッケージツアーというのを作っていただいて、環境に優しいホテルだけを紹介していただきながら、こういうプロジェクトを、実際に旅行でも体験していただけるようなパッケージも、JTBさん、HISさん、様々な旅行会社さんとも作っています。皆さん旅行会社の方々なんですね。

こういったコロナウイルスの中で、私どもの方向が、バンと変わりました。それはなぜかと言いますと、この、やっぱり島の、これ、コロナ禍のワイキキです。人一人おらず、初めて私も体験しましたけれども、飛行機も一機も飛んで来ず、そうすると、やはり島は自然の回帰がすごい早いんですね。

この本当に6か月足らずの間に、海の透明度が上がって、ワイキキビーチにコバンザメが戻ってきて、そしてハワイアンモンクシールが上がってきて赤ちゃんを産むわけですよ。そういったニュースが地元の流れ、そうすると地元の方々の意識も、ものすごく高くなりまして、それで、このコロナ禍に、今後また800万人、900万人、ちょうど2019年、1,000万人を超えまして、オーバーツーリズムのエリアも増えてまいったので、そういった観光をどうしていくということで、コミュニティに行き、ものすごいコミュニティの意見を吸い上げて、DMAPというアクションプランをつくったのですけれども。

観光がいきなりリベンジ旅行で戻ってきたときに、レンタカーもまだ足りず、労働もまだ戻ってこないときに、いきなり戻ってきたのですね。それで新聞にも載ったりしたのですけれども、これからはブランディングより、ツーリズム・マネジメントであるデスティネーション・マネジメントをしていかなきゃいけない。そしてプロモーションというよりは、エデュケーションに力を入れていかなきゃいけないということで、州民、そして私どもの意識も大変変わりました。

そんな中で再生型観光、リジェネラティブ・ツーリズムということで、どのように次世代、6世代、7世代先に、この自然を、そして文化を、そして人々の歴史を残していけるかということで、地元でたくさんの方々のディスカッションが行われ、島ごとにビジネスリーダー、自治体の方々、学校、そしてコミュニティの方々が島ごとのアクションプランを出して、ちょうど今年3年目なんですね。ダッシュボードで、ウェブサイトで、どこまでそれが進んでいるかも全部、島民にレポートを出しています。

そういうようなアクションが、このコロナ禍で行われまして、様々なシステムも変わりました。州では、オンライン予約システムを導入して、特に、州立公園のハレアカラとかサンライズ、すごい人気なんですけども、予約しないと上がれない、入場制限ですよ。そういった制限や、駐車料金を取って、そのお金を還元していくというようなシステム、それとですね、やっぱり、ハナウマ湾であったり、こういったエデュケーションビデオを必ず見ていただいてから湾のほうに降りていただいて、スノーケルを楽しんでいただき、1日1,400人ぐらいに抑える。昔は3,000人、4,000人入って、サンゴ礁が死にかけたこともありましたので、こういった入場制限が必

要なエリアも出てきているということですね。

ダイヤモンドヘッド、皆さん御存じだと思いますが、登頂30分でてっぺんまで登れまして、すばらしい景色です。ですが、そこに1日6,000人、7,000人が登るとなると、上に登っても、やはり体験も満足にできないのですね。ですので、旅行者の方々にも満足いただいて、地元の方々にも満足いただける。ハワイで、カマアイナ・レートと言うものがありまして、地元の方々、州民は無料で登れるのですが、外から来ていただく方には御料金を頂いて、一緒に保護していただくという形になっています。今は人数制限が入っています。

そういった形で、もう一つこれはすばらしい取組なんですけど、コミュニティの方々に参画していただく。なので、例えば、ビーチで、ハワイ、海に囲まれていますので、周防大島もそうだと思うのですが。エリアによって、潮の流れであったり、ライフガードがないビーチなんかもあるんですね。そういったところに、コミュニティの方々が、これも補助金、ちゃんと出ているんですけども、注意事項を旅行者の方にお伝えしたり、もしくは人数を数えたり、その歴史のお話をしたりという形で、地元の方に参画していただくスチュワードシップ・プログラムというのが、各島で大変増えてきています。

もう一つは、これ観光局といたしまして、「マエマエ・ツールキット」と言いまして、皆さん、きっとココナッツ・ブラとグラス・スカートって、ハワイと思っていられると思うんですが、あれタヒチなんですね。ハワイの本物のフラではございませんので、昔のプロモーションの違った情報というのが、やっぱり伝わっているというので、こういう形でハワイ語もすごく気をつけていまして、空港行っても、ハワイ語で、まずアナウンスが流れて、英語という形になっています。「オキナ」、「カハコー」というハワイ語の記号を使ってくださいであったり、こういうガイドですね、ツールキットを作って、いろいろ旅行会社の方々とか自治体の方々にお知らせしたり、ブランド・ガイドラインと言いまして、こういう写真は避けてくださいね、こういう使い方をしてくださいね、フラというハワイの本来の伝統芸能というものを伝えるには、ファイアー・ダンスはサモアなのですね。そういったこともありまして、同じでも島の踊りによって衣装も違いますし、そういった教育というものを、しっかりエデュケーションしていかないと、違った形で知ら

ないうちに伝わっているのが大変多いということですね。こういったガイドラインなんかも作っています。

あとは、オンラインでオーバーツーリズムエリア、センシティブエリアマップというのがありまして、これはB to Bで業界の方々にお知らせをして、そういったところのプロモーションを避けていただいたり、ナレッジバンクといいまして、パンフレットやいろんな映像なんかで、私どもはライブラリーがあるのですが、プロモーションしないエリア、しない方向性の全ての写真とか映像というのを取り払っています。

そういった形で、とにかく来る前に、いろんな形でB to BもB to Cも含めまして、エデュケーションしていくというのが大切であるということですね。

これ最後になりますけれども、やはり先ほどのホテル税、このリソースというものは、地元還元されなきゃいけないということで、コミュニティ団体、例えば、自然を守る、カルチャーを守る、コミュニティの人たちがイベントをつくる、そういったところに補助金申請が毎年ありまして、これいろんな団体の方が3年プランをかけて申請をしています。そんな形で、いろいろ連携をしていかなきゃいけないということですね。

それで、ハワイは毎年来ても新しいイベントや新しい体験があります。これ最後になります。ちょっと長くなりましたけれども、そのプロモーションビデオの作り方も変え、日本は、ちょっと今、海外渡航される方、少なくてもリカバリーが大変遅れているんですけども、皆さん、やっぱり旅をして、外から日本を見て、どれだけすばらしい国に皆さんが住んでいらっしゃるか、私は石川県出身なんですけれども、ハワイに住んで32年になります。もう外から日本を見て、何てすばらしいところに生まれ、そして、すばらしいところに住まわせてもらっているのか、感謝の気持ちでいっぱいなんですね。ですので、そのパッションと、そしてモチベーションをもって、次世代の方々と一緒に、この日本を守っていただきたいということで、海外旅行をしてください。ものすごく視野が広がります。ということで、このビデオで、私のプレゼンテーションを終わらせていただきたいと思います。

(動画上映)

○パネラー ミツエ・ヴァーレイ ということで、ありがとうございます。

島に生かされている私たちだからこそ世界をリードしていかなければいけないと思います。どうもありがとうございます。（拍手）

○モデレーター 水谷由美子 ミツエ・ヴァーレイさん、本当にありがとうございました。

いくつかキーワードなりサジェッションなりいただいておりますね。マラマとう人を思いやるという心、これ私たちのキーワードとしても覚えたいと思いますし、また、いろんなプログラムありましたけれども、地元の方、あるいは子供さんへのプログラムをツーリストへとつなげていくという、広げていくというようなことですね。こういったこともこの周防大島でも役に立つお話だったのではないかなと思いますね。

それから、コロナ禍で環境に対して皆さんが大変その地域の人の意識が高まった、変わったということですね。そこから新しいリジェネラティブ・ツーリズムですか、再生型観光の展開が進んでいるということで、大変、貴重なお話でした。ありがとうございました。また、後ほど、いろんなコメントをいただきたいと思っています。

それでは、続きまして、佐々木真二郎さんのほうからお願いいたします。

○パネラー 佐々木真二郎 環境省の佐々木です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、環境省の職員を20年ぐらやってるものでして、もともとは自然環境の技術職ですので、国立公園の管理とか全国の希少な野生生物の保護とか、そういったことを扱ってきたものでございます。

3年ほど前から、この地域循環共生圏というものの担当になりまして、環境をちょっとテーマに少し混ぜながら、地域がどうやったら活性化していくのか、地域が元気になっていく方向というのはどうやったらいいんだろうかというのを、ずっと制度として確立したり、地域のそのための支援を行うような仕事をしてまいりました。

日本各地で地方創生とかそういったことが言われているんですけど、何かすごく元気のいい地域となかなか元気が出てこなくて、ちょっと落ち込んできちゃっているかなという地域の差がだんだん今、開いてきているような感じを持っています。

この元気な地域でやっていることって、何で横展開できないのか。横展開簡単だったらどの地域も元気になっているはずなんですけど、横展開できない原因は一体どこにあるんだろうかというのは、ずっと

と私の、全国地方と東京、行ったり来たり勤務する中で問題意識として持っていました。

地域循環共生圏の取組をやっている中で、例えば、どここの地域でこんな施設ができてお客さんが来て賑わっているよ。じゃあ同じ施設を元気のない地域につくったら、本当にその地域、元気になるのかってならないんです。その秘密は一体どこにあるのかというのが、私のずっと長年のテーマでした。

一応、環境の話も少しということですが、地球環境がすごく限界を迎えているというのは、もう皆さん御存じの話だと思います。地球環境、すごくもう限界を迎えていて、例えば、今もう脱炭素と言われていますがそれでも、温暖化が進んであちこちで大雨が降ったりとか自然災害が発生しているというのがありますし、海洋のプラスチックごみなんかもうすごい限界が来ています。

そういった中で、私たちの、やっぱりその原因は、私たちの暮らし方だったり経済、社会システムの問題で、そこを変えていかないといけないというのが、課題意識としてあります。

今までやっぱりその地下資源、化石燃料とかそういったものに頼ってきたものをいかに地上にある資源に転換していくのか、再生可能エネルギーとか、あと自然の恵み、食料もそうですし木材とかもそうです。そういったものに転換をしていく。金属とかは、もう1回取り出したものは地上の資源として扱って、それを徹底的にリサイクルしたりとかほかのものにもう一回活用するというふうな循環型に変えていくというふうな、そういう発想です。

それから、経済の流れも大量に生産して消費して廃棄するという一直線のものの流れじゃなくて、循環させるような適切な量を生産して、適切な量を購入して、適切な量を循環型で使っていくというサーキュラーな考え方、それから経済がどうしても今まで優先されてきて、社会とか環境というものが、もしくは地域の経済というものがちょっと置き去りにされてきたかなという感覚を持っています。

例えば、環境にしわ寄せがいくと、自然環境を収奪して破壊して安くものをつくって売っていくというのがやられてしまったりとか、社会の課題というふうな感じになると、極端な話を言うと、児童労働みたいなものが起こってしまったりとか、そういったひずみがいつにわたってしまっていたのが、経済がちょっと優先されすぎると出てしまう。

それをバランスを取って環境も社会もあと地域の

経済も、シャッター街とかいろいろ困っているところあると思うんですけど、そういったもののバランスを取っていかうという、これSDGsの発想ですね。調和を取るっていう、そういう考え方というのが、これからは大事なんだろうなというふうに考えております。

今、グローバルな話を少ししたんですけど、国内のいろんな地域、これ都市も田舎もどっちもなんですけど、足元を見てみるとどうなんだろう。これすごい課題が多いですよ。私のところでモデル事業をやっているところで、地域の課題を書いてくださって最初にこういう取引があるんです。ここに書いてあるのをざっと書き出しまして、少子化、高齢化、空き家、シャッター街、水産資源が減っているとか一次産業の従事者がいないとか、人口減少とか都市への一極集中というものが大きな背景にもあって、それで様々な課題が地域には生まれて、都市には都市の課題がやっぱりありまして、このあいだ、神田の都市再生の勉強会に行ったら、子供たちが自然の中で遊ぶ、外で遊ぶ環境がそもそもないとか、自然に触れる機会が日常的にない、まちがコンクリートで埋め尽くされているんですから、そんな課題があったり、孤独になっている人が多かったり、都市には都市の課題、地域には地域の課題が、この課題がたくさんあると、私も環境省の職員なので、環境を守りましょうということをいろんな場面で訴えるんですけど、いやいや温暖化も分かるけど、私たちの地域はコミュニティがもう崩壊しかかっているのにそんな温暖化のことをやっている場合じゃないですよというふうになるんです。

まず、優先順位の高いのは、自分たちの暮らしをどう取り返すか、どうやって安定させるか、自分たちの地域を次世代にどうつなげるかというところの意識がもちろん高く、優先順位も高い。

困ったことに、この課題というのが増え続けていくんですね。とにかく、例えば、ウクライナとかでああいうことが起こると燃料代が上がったりとか肥料代が上がったりとか、いろんなところにしわ寄せが来て、地域の課題っていうのはどんどん増えていく傾向にあります。この増えていくというものをいかにして持続可能な形に持っていくかというのが、私たちのテーマでした。

先ほども高校生の方がしゃべってくれたので、余りもうサクッと行きたいのですが、持続可能な地域というのは、私たちはこのたくさんある課題を解決

し続けていく地域が持続可能な方向に向かっているというふうに捉えています。そういった地域は自立した地域です。自分たちの足で立って、自分たちの地域を自分たちで運営し続けている地域ですね。

先ほど、ミツエさんからマネジメントという言葉が出ましたが、いかに地域を自分たちで運営していくかということがすごく大事になってきます。

じゃあこの課題解決をする方法は何かっていったら、先ほど言ったSDGsのプロジェクトを生み出していくことについて、高校生の発表にもありましたトレードという、どこかが伸びればどこかにひずみが来るというのは、いかに会議しながら、いいところ取りをするような、そういう事業を地域で生み出していくことがすごく大事です。

こういった事業を、何かホームランのように1個大きな事業が生まれると地域が元気になるというのはちょっとなかなか考えにくいんです。課題がたくさんあるので、一つの事業では解決できない、たくさん生む必要がありますし、小さなプロジェクトでもいいです。もちろん大きなプロジェクトがあってもいいです。それらをたくさんで生んで、育てていく、そういったことがこれからは求められるというふうに考えています。

私たちは、それを、トレードオフを会議して調和の取れた事業を同時解決という言い方をして、ウィン・ウィンの関係にあるようなプロジェクトを生んでいこうというふうな、そんな言い方をしているところです。

先ほど、高校生の方々が地域循環共生圏のことを説明していただいたんですけど、今ちょっと絵のほうは少し更新した形でやっております。これですね。先ほど申し上げた環境、経済、社会をよくしていくSDGsの事業の地域でたくさん生んで課題解決を続けて、自立した地域をつくる。

あと高校生の話でも都市と地方でこうお互いに支え合うという話が出ましたが、お互いにやっぱり得意な分野が違うので、それで支え合うような分散型のネットワークをつくっていくというのが地域循環共生圏の考え方です。

このネットワークがどんどん広がっていくと、地域、自立した地域が増えていって、それがいろいろとあちこちに広がっていくので、最終的には国全体だとか世界にも広げられれば世界全体が持続可能な社会に向かうだろうというふうなことで考えております。

このときに、一番私たちがすごい根底で大事にしているのは、自然の資源、自然の恵みをいかに我々は持続的に使うことができるかということだと思っています。地下の資源にはなるべく頼らないような社会にこれから変えていこうという中で、頼れるのは、やっぱり自然の力なんですね。その自然の力というのは再生していくんですけれども、再生する範囲を超えてまでは、我々は暮らしていけないわけです。

なので、自然環境を維持して、それから回復させて充実させていく、そういったことをやっていくというのが根底には大事なものだと思っています。

私たち、地域循環共生圏は、この3つが揃うと共生圏ですという三原則というのがあります。ここに、実は先ほど言った、地方創生が横展開できるかできないかの鍵があると思っています。

1つは、地域の人の主体性です。地域の人たちが自分たちで地域のことを運営するというのが大事だと言ったんですけれども、よその人が来て、地域でこういうプロジェクトを起こすのは結構大変なんですね。外の人には地域のいろんな歴史とかそこでいざこざがあった軋轢の歴史とか知らなかったりとかしますし、プロジェクト、地域の中の人のリソースを使わないと起こせない。なので、地域の人たちがやっぱりそれを、外の力を借りるとしてもやっぱり自分たちごとが自分たちごととして関わっていく必要があります。

地域の人たちが参加する、主体的にやる、このときに、この地域づくりってずっと長く続く話です。課題を解決し続けるので、極端なことをいうとずっと続ける話なんですね。長く続けることって、楽しくないと続けられないです。なので、私たちのほうでわくわく感っていうのはすごく大事にしています。楽しく盛り上がる。あとやりがいを持つ、この大切なふたつを次の世代にきちんと引き継ぐというのは、すごいやりがいのある仕事ですね。そういうやりがいを持ちながらやっていく。

次に大事になってくるのがパートナーシップです。協働です。地域の中の人たちがこういう、先ほど申し上げた同時解決の事業を生もうとすると、いろんな分野の人が連結しないとできないんですね。例えば、同時解決の事業ってどんなのがあるかという、農福連携みたいな話がすごい分かりやすいかもしれません。農業をやっていて、地域の耕作放棄地とかを、そこをもう一回再生して農地として使っていこ

う、そういうときに、地域になかなか働き手がいないので、障害者の方を雇用してそこでやっていこうとか、そういったのが農福連携、私たちの共生圏の事業で支援している地域はそこに脱炭素も入れて、障害者の方が炭を焼いて、その炭を農地に土壌改良剤として入れることで、炭素を土の中に固定して温暖化防止にも貢献している、そういう3つの掛け算をやっています。そんな事例もあったりします。

こういうふうなことをやろうと思うと、例えば、農業の人、農地を持っている人とか、それから福祉の、障害者のことに関わっている人たちと、それから脱炭素のことが分かるような、もしくはそこで炭素のいろいろクレジットにしてお金に換えることができる、そういったことができる専門家とかがみんなでコラボレーションして、連携して当たらないとプロジェクトが創成できない。こういうふうな協働というのがすごく大事になってきます。

この協働は地域の中の人々の縦割りを超えていくことも大事ですし、外の人との連携というのもすごく大事になってきます。こういった主体性が発揮された状態でパートナーシップを組むということができないと横展開ができないということが分かってきました。

多くの地域で結構残念なことになっている地域は、まず主体性がない、自分たちごとになっていない、もう自分たちの地域はもうほかの人が誰か助けてくれたらいいみたいになっているところは、なかなかやっぱり最初のスタートが切れないというのがあるんじゃないかなと思っています。

こんな共生圏の例ってどんな地域があるのってことなんですが、岡山県の真庭市で私よく説明します。真庭市って里山資本主義っていう本で有名になった地域で、木質バイオマスの発電所があったりするんですけど、最近はこの木質バイオマスだけでなく、生ごみを集めてきてバイオガスで発電をして電氣を取って、そのバイオマスで発酵させると消化液というのが出るんですけど、その液を今度は有機肥料として農地に入れたりするのですね。

あと、真庭市は山の中の自治体で海を持っていないんですけれども、下流部の瀬戸内海の方のところで、カキの殻がいっぱい余って廃棄に困る、これを砕いて土壌改良材として田んぼに入れると稲の生育がすごくよくなるのですね。健康な稲が育っているということで、それを里海米というお米の名前をつけて、今度は学校給食にする流域連携の素材として

教育素材として活用したんですね。

あと、こういう草原の再生をする。草原は毎年焼いて維持しているのですが、これ山を焼くというのが、なかなか地域のもう畜産農家が元気がなくなってきたところを、観光の視点で、ツーリズムで人が参加して維持していくようないうことをやって、こういうふうには事業はたくさん生まれてくると、だんだん地域が元気になってというのは見えてきます。

最近、阪急阪神百貨店という大阪に本店を持っている百貨店と真庭市がブランド、グリーンブルというグリーンとサステナブルを掛け合わせたブランドを今、つくっています。

このブランドが、真庭は今、こういうふうにはたくさんの環境に配慮した商品を作ったりとか、そこで体験のプログラムを作っているの、それを都市の人たちにしっかりとアピールして、都市の人たちが共感して買ってくれたりとか、あとは現地に行ってみて実際にそのプログラムに参加して環境保全活動に参加するというふうなことをやるためのブランドを立ち上げました。

ただ、交流を生むだけでなく、都市の百貨店は、例えば商品が売るときにこういうふうなデザインをしたら売れるとか、こういうふうなアピールの仕方をしたら売れるよというようなノウハウをいっぱい持っているの、真庭市のいろんな商品をつくりたいという事業者さんのトレーニングをしてもらったり、そういうふうな交流も生まれてきています。

この今、グリーンブルが発展して、地元でトレイルランニングの大会、フォレストレイルというのをやっていたんですけど、ここにグリーンブルがサポートで入ることになりました。何をやったかという、トレイルランの大会にエントリーするときに、グリーンブルアクト粋というちょっと高い金額の粋をわざわざ設定しているんですね。この粋にエントリーしたランナーは、ガイドレクチャー付きの登山道の保全とか森林とか草原とかの環境保全のプログラムに参加できるというふうなことがあり、あとは大会参加費から自然環境保全に寄附されるんですけど、これは地元で蒜山自然再生協議会という草原とかそこにある湿地とかの希少な生き物を守っている活動をやっている協議会ですけど、そこの活動経費にお金を入れるとか、あとはこういうふうにはサステナブルな視点をトレイルランの大会に入れると、協賛企業がたくさん集まるようになったそうで

す。

この協賛企業の方々が入ることで、ランナーの人数を増やさない、大会ってなかなか運営が難しいんですけど、ランナーの人数が増えれば登山道が荒れたり環境が悪くなるので、逆に協賛企業を集めることでランナーの数を増やし過ぎないで大会運営をしようと、そういうことをやっているんですね。

協賛企業の方々もお金を出さずじゃなくて、社員をそこで環境保全のほうに関わってもらおうようなことをして社員の教育をしたりとか、あとはうちの会社はそういう環境保全に貢献していますよというアピールに使ってもらいます。そういうことをやっています。

地域循環共生圏は、こういうホームページとかあとセミナーとかフォーラムとかシンポジウムとかいろいろやっていて、その中で宣伝をしています。メルマガで情報発信しているの、興味のある人はぜひ見てください。

もう一つ、グッドライフアワードっていう環境省の大臣表彰の制度をやっております。これは、先ほど言った同時解決の事業を表彰する制度で、地域循環共生圏は1つのエリアの中でたくさんのそういう事業を生んでいくという発想でやっているんですけど、その中で、きらっと光る事業を表彰する制度がグッドライフアワードです。

これ個人からもエントリーできる裾野の広い賞で、もう11年間やって400の取組が表彰されています。

わくわく感でやるので、これ楽しさの中で運営されています。

その中で、例えば、このプロジェクトマネー、ちょっと今日は観光の話だったので、観光に寄せた話をさせていただくと、これは、旅行者の方がごみを拾いたいと思ったときに、ごみを拾っても、実はどうやって分別したらいいのか、自治体ごとにルールが違うので分からないとか、そもそもごみの収集場所、どこが収集場所なのかも分からない。そういうことが発生します。それに対して対策をということで、地元のパートナーの商店の方とかレストランの方とか、そういった方に協力してもらって体制を整えて、旅行者がパートナーにお金を払ってごみを拾うんですね。わざわざお金を払って旅行者がごみを拾う時代になったというのがすごい話で、パートナーにお金を払うと、ごみの分別の仕方とか道具とかを貸してくれて、ごみ拾いをして返すときちゃんと分別してやってくれる。そんなサービスが今始まり

ます。

あとこれヒダスケというやつで、飛騨市でやっているんですけど、関係人口ですね、創出です。地域で高齢化して過疎化が進んで困っている、その困りごとを発信して、ヌシさんという人が地元におりまして、そのヌシさんがこういうことで助けてほしいというふうにアピールをして、そうすると、飛騨市の中のわりと都市的なエリアの、中心市街地の方とか市街の方とかが応援で来てくれて、私も行ってきただんですけど、ミョウガの畑、耕作放棄地になったミョウガ畑を再生させるために雑草を一日抜くんです。その作業をやったりとかするんですね。

あとは重要文化財のいろんな整理されていないものの写真をひたすら、一日中撮るプログラムとかあるんですけど、そういうのは地元の人たちと一緒に楽しみながらやって、「オカエシ」して、地域通貨でちょっとしたお金が返ってくる、そんな関係人口のプログラムです。

こんなふうな感じで、グッドライフアワードはたくさん表彰例を記事にしているので、もし興味のある人は見ていただけたらと思います。

私の説明は終わりです。以上です。（拍手）

○モデレータ 水谷由美子 佐々木様、ありがとうございました。

今、ごみを拾う旅というか、大変おもしろいというか、そんな時代になってきているんだなということで、具体的な事例をいろいろお話していただいていたありがとうございました。

それでは、ちょっと時間も迫ってまいりましたので、早速ですが、藤本浄孝町長様、地元の立場からどうぞよろしくお願いいたします。

○コメンテータ 藤本浄孝 よろしく願いいたします。御紹介いただきました周防大島町長の藤本浄孝でございます。

まず、BGAP、ブルー&グリーンアートプロジェクトの安倍会長をはじめ水谷先生には、この周防大島の地でシンポジウム3回目ということで、このようにまた皆さんと考える場をいただいておりますことを改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

私からは、今日はこのニホンアワサングの学習施設開館の意義と活用ということでお話をさせていただこうと思っております。

まず、今日は高校生たちも来てくれていますし、また地域の皆さんも雨が降る中ではありますが、

このようにたくさんお越しをいただきました。ありがとうございます。

そして、私、今日はアロハシャツを着ています。このアロハシャツも展示をしていただいていますけれども、水谷先生がデザインをしてくださったこのアワサング、ニホンアワサングとミカンの花をあしらったこのオリジナルアロハであります。

私、赤、黄色、紫、青と5枚持っておりますけれども、これ大変評判がよくて、特にこの赤色なんかはサタフラのとき、サタデーフラのイベントのときに芝生のところでこれを着ると非常に映えていいねというような評判もいただくところでございます。

このアロハシャツは、道の駅、また観光協会のほうでも販売をしていただいています。1枚6,600円ということでございますので、ぜひともお買い求めをいただければと思います。よろしくお願いします。

それで、このようにニホンアワサングの開館の意義ということでございます。

まず、昨日、3月23日にこの地家室園地の拠点施設、地家室園地の休憩所のオープンを皆さんとともにさせていただきました。多くの来賓の皆様、お越しをいただきまして、はなばなしくオープンをすることができました。私の日頃の行いが悪かったのか、少し雨が降ってしまいまして、その点、残念でありましたけれども、皆さんの祝福を受けて、新たな施設の旅立ちということでございました。

既に、1月19日の日に仮オープンということでオープンをさせていただいております。もう既にこれまで2,800名の方がこの拠点施設、お越しいただいています。今日来られている方でもう既に行ったよという方、いらっしゃいますでしょうか。

かなり多く行っていていただいております。ありがとうございます。

私も子供が3人おまして、その子供が保育園で行かせていただいているということで、大変楽しかったというような声もあります。

実際、このアワサングを見ることができる施設ということで、水槽であったり、また映像で見ることができるということ。そして、またAR、VRを使って、タブレットを使ってかざしながら見ることもできるということもございまして、楽しんでいただければと思います。

このアワサングの地家室園地の拠点施設というのは、そもそも30年前にこのニホンアワサングというサングが生息をしていることを確認されたと

ころから始まっております。そして、この白木半島の皆さん、白木半島コミュニティ協議会という協議会がございます。新山玄雄さんが会長を務めておられますけれども、この6つの自治会による白木半島コミュニティ協議会の皆さんの後押し、山口県そして環境省の皆様のお力もいただきながら、この計画が実行に移されて昨日、完成の式典を行ったというところでございます。

昨日、私、非常に強く感じたんですけども、やはり、大きな責任があるなということを感じました。この責任を感じるということはどういうことかという、この施設をしっかりと楽しい施設、ためになる施設になるように運用していかないといけないということでもあります。

この責任を非常に強く感じるところでありますし、今日、ミツエさんや佐々木さんからもお話をいただきました。また昨日、実は佐々木さんとも少しお話をさせていただく中で、この施設の運用ということも、しっかりとやっていかないといけないというお話をいただきました。

今、職員の者が2名、女性の方がおりますけれども、その働き方改革等々もあるんですけども、しっかりと人を配置していくこと、また透明のシーカヤック等もありますけれども、それもしっかりと安全を確認できるような形で進めていかないといけないというようなこともあるところでございます。

このニホンアワサング、このように大島に世界最大級の群生地ということであるんですけども、まず、周防大島、この周防大島の中のこの丸をしてあるところが、地家室園地があるところでありまして、こちらにニホンアワサングが生息をしているということでございます。

この周防大島という地は、今日、地元の方が多くいらっしゃいますけれども、まさにビッグアイランド、瀬戸内のハワイ、瀬戸内海で3番目に面積が大きな島でございます。瀬戸内海の中で、淡路島、そして小豆島、その次が周防大島ということでございます。ですので、大島、ビッグアイランドということでございます。そういった周防大島でございまして、この大島、人口が今1万4,000人を切ろうかというところでもありますけれども、少子高齢化が進んでおりますが、豊かな自然のもとでこの島を盛り立てていきたいというところでもあります。

この地家室園地があるこの地家室の地、また先ほどお話をしました白木半島のお話もしましたけれど

も、先ほどから、先般のシンポジウムでもテーマに取り上げていただきました、民俗学者の宮本常一先生は大島から輩出され、幅広く全国で活躍をされました。この大島の金魚のしっぽのほうに、なぎさ水族館という水族館がございます。このなぎさ水族館は、瀬戸内の魚類や海中生物を展示しております。こちらにいらっしゃるのが飼育員の方です。ただの飼育員の方ではなくて、研究者の方であります。これも、宮本先生の助言により、この水族館はこの水域に住んでいる魚、水中生物をしっかりと研究するという目的で、運用されているということでもあります。

ということで、この周防大島には、地家室園地という拠点施設となぎさ水族館があります。そういったことからこの海洋生物においても非常に研究、そしてまた、これまでの積み重ねられた歴史があります。

そこで、このアワサングを実際に見ていただく、そういった施設にでき上がっておりますし、しっかりとそれを将来つなげていきたいというところでございます。

ですので、この美しい海を、先ほど、ミツエさんのハワイのお話にもありましたけれども、私は周防大島で暮らしておりまして、自然の大切さ、自然の豊かさを今一度、感じてみようと思ひまして、この半年間ぐらい、実は車通勤を減らして自転車を通ったり、あとは山道、この周防大島には広域農道という山沿いの道が整備をされています。その道を自転車で行ったり自分の足で行ったりということもしています。

今まで、私も自然に親しむということ余りやっていたんですけども、そういったことの楽しさを今、新たに感じているところであります。ですので、この自然を大切に守っていく、このことを大切に思うことを続けていきたいとともに、そしてまた、アワサングの施設をこのようにオープンを迎えたところで、さらに皆さんに自然を守っていく、そして大島の宝である日本アワサングのことを知っていただくということを努めていきたいと思っております。

そして、アワサングの施設のオープンのニュースがありましたけれども、周防大島では、今、観光にもこれから力を入れていきたいと思っております。

前任の椎木町長さんのときには、観光交流人口100万人を目指そうということで、観光で来られる

方、また関係人口といいまして、周防大島に御縁を持っていたいてらる方、この方々に100万人来てもらおうということで、これを椎木町長さんのときに実現をされました。そして、その後、私が今、町長1期目で4年目を迎えるところでございますけれども、折からのコロナ禍によってずっと観光の人口が非常に少なくなっている状況でございます。

ですから、その観光の方々にぜひとも戻っていただきたい、この起爆剤にアワサングの拠点施設は担っていけば嬉しいなと思うところであります。

このように、観光、そしてまたハワイと同じように、また環境にも力を入れていきたいと思っています。

先ほど、周防大島高校のみんながプレゼンをしてくれましたけれども、まさにそのとおりでありました。私が言うこともないぐらいだなというふうに思っております。

この環境を行政の立場からもしっかりと守っていくために、いろんな観点からお知恵をいただきながら進めていきたいと思っていますところであります。

時間が10時半までということでもありますので、私、今日すみません、ちょっと緊張してしましまして、なかなか進まないところではあるんですが、大きな責任というものを感しました。

この地家室園地の施設をしっかりと皆さんに知っていただく、そして、実際、地家室園地の沖にアワサングがおりますけれども、実際潜ることはなかなか難しい高齢者の方もいらっしゃるけれども、ぜひとも立ち寄っていただいて、また子供たちにも立ち寄っていただいて、先ほどの話のとおり、海だけではなくて山もきれいにしていこうというような、そういったテーマを持って、いろんな皆さんに訪れていただきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

私からは、以上でございます。（拍手）

○モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。

オーバーツーリズムで苦しむぐらい、お客さんにこの地家室園地を通じて来ていただくために、今日集まっていられる皆さんが口伝えていろんな人に伝えていただくというのを期待したいと思います。ありがとうございます。

それでは、結構、時間も迫ってきておりますけれども、コメンテーターの安倍さんのほうから、お話をちょっとお願いいたします。

○コメンテーター 安倍昭恵 とんだハプニングがございまして、ちょっとお恥ずかしいところをお見せしましたけれども、この環境をやりながら、このペットボトルを出しているという時点で、これが落ちたときに、私は、ペットボトルではいけなかったということをちょっと反省もいたしましたけれども、この主催者挨拶にも書きましたけれども、これから本当に何を大切にしていくかというのを私たちは問われている時代なんだろうなというふうに思っています。

今日わざわざハワイからお越しいただいたミツエさんからも佐々木さんからも、本当にいいお話をいただいて、私も考えさせられるところがたくさんありました。特に、ハワイは観光で来ているところ、まちだと思えますけれども、そこがコロナでどうしよう、どうしよう、もっと観光客を呼び戻すためにはどうしようというふうになるのではなくて、そこで環境が復活したことを、これを守っていかなくてはいけないというふうに考えたというのが、やはりものすごく素晴らしいなというふうに、改めて感じましたし、私たちもそういう観点を忘れてはいけないうんだろうなというふうに思いました。

人間も地域もやはりこれから多様性が大事な時代で、先ほどから何度もお話が出ているように、その得意分野を生かしていくというのが、高校生たちもその話をしていましたけれども、大事ななんだろうなと。

みんな人間でもこぼこぼがあつていいものであつて、その一つのところにみんなが昔のように高度経済成長の時代のように一直線でみんながどこかに向かっていくというよりは、自分がそれぞれ得意なものをちゃんと完成したものが組み合わさっていくというのが、これからの理想的な人間関係であり地域の関係であるなんだろうなというのを感じています。

どんどん過疎が進んでいくところは、都市から見たら末端のように見えるかもしれないですけども、逆の先端であるというふうに私は思っていて、その都市の部分の先端とこの地域の本当に過疎で、でもだからこそ豊かな自然が残っているという、そっちの先端のほうがこれからは最先端になっていくというふうに思っていて、よく地域に行くと、ここ何もなかったからって言われるんですけど、こんな豊かな自然があるじゃないですかと私はいつも言っています。周防大島に実際住んでいらっしゃる方は、もちろん地域のよさも分かっているかもしれないですけど、

都会から来た人に対して、ここは何もないからって
いうことは絶対言わないでいただきたいと思います。

高校生の方たちがいらっしゃいますけれども、将
来的にこの地域にずっと住み続けたいと思っている
人。あら、1人もいない。1回出ていってももちろん
いいです。でも、どこかでこの素晴らしい地域に生
まれ育ったということで、やっぱり誇りに思って生
きていてもらいたいし、できれば、何人かは進学
してもこの地域に戻ってきて、ここには仕事がない
からではなくて、これからは、仕事はつくっていく
時代なので、ここでいい仕事を若い方につくって
いていただきたい、若い皆さんが未来そのものな
んですね。皆さんがこの地域の未来をつくっていく
という、そういう気持ちで頑張っていたきたいな
というふうに思います。

ペットボトルですけれども、日本環境設計って
いう会社がありまして、そこは地下資源ではなくて、
さっき地上資源と言われましたけれども、ペットボ
トルを何度も何度も再生して使っていこうというリ
サイクルをしている会社です。そういうところが
ペットボトルでも悪いものではなくて1回できて
しまったものを捨てるんじゃなくて、何度も何度も
リサイクルをしていきましょうという、そういう考
えの会社もあるので、ペットボトルだけが悪いだけ
ではないですけれども、皆さんのいろんな知恵を集
めて、これからいい社会にしていっていただきたい
と思いますし、このBGAPもそういう形でこれか
ら地域のためにもいろんな提案をしていきたいと思
いますので、ぜひ皆さんにも会員になっていただ
きたいというふうに思います。

特に、周防大島では、柳居議長のお力で本当に
いろいろなことが行われていると思いますし、私も
これからも、議長のお力を借りながら、いろいろ
この地域のためにも頑張っていきたいと思いま
すので、皆さん、どうぞよろしく願いいたします。
(拍手)

○モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます
た。

先ほどの日本環境設計は、名前が今、株式会社
JEPLANというふうに変っています。世界にプラ
ントを輸出して、とにかく世界で、最先端でこう
いうペットボトルなどポリエステルを、それだけ
じゃなくて金属とかそういったこともやっていら
っしゃいます。あと服ですね。衣服、1枚の服か
ら1枚の服ができるというような再生事業もされ
ていまして、大

変興味深いです。私たちのBGAPのメンバーの
ような形で来ていただいております。ありがとうござ
いました。

ちょっと時間がちょうど30分になってしま
いましたが、ちょっとスタートも遅れたこととか、
トラブルがあり、失礼いたしました。ちょっとだけ
延長させていただいて、皆さん、3名の方から何
か質問とかしら、そういうのがそれぞれにもしあ
りましたら、簡単に質問して簡単に答え願えれ
ばと思いますがいかがですか。

ミツエさん、いかがですか。ちょっと言い
足りなかったこととか、ほかの人の話を聞いて、
何かこう思ったとか、まとめに向かっていくよ
うなお話でお願いいたします。

○パネラー ミツエ・ヴァーレイ ありがとう
ございます。特に佐々木さんの環境省での取組
でいろんな地域の事例ですね、私もすごいノ
ートに書かせていただいたんですけども、グッド
ライフ・アワードであったりプロジェクトマナ
ティ、こういった日本の活動ってもっとも
外に発信するといいなって思いまして、ハ
ワイでもぜひ英語版をいただいたら、御紹
介させていただきたいなと思います。

日本の事例が、本当に世界の事例になると思
いますので、ぜひまたいろいろ御教授いただ
けるといいたうんですが、そういった中で、
パートナーシップ、ここはハワイも多いん
ですけども、温度差がものすごくあるもの
をどのようにパートナーシップをコラボレ
ーションを生んでいくかというところで、
もし尽力されている部分があれば教えてい
ただければと思います。

○パネラー 佐々木真二郎 パートナ
ーシップはすごく奥深い世界が広がって
います。結構、人と一緒に仕事をするの
って、私も昔思っていたんですけど、め
んどくさいんですよね、いっぱい説明を
しなければいけないし、相手に協
力してもらわなきゃいけないし、相
手のメリットも説明できなきゃいけ
ないし、結構めんどくさいんです。でも、
ことわざでもあるんですけど、早く行
きたかったら1人で行けばいいん
ですけど、遠くまで行きたかったら
みんなで行かないといけませんよ
っていうのがあって、実は、大
きなことをやっていこうとか、本
当にいいものをつくろうと思うと、
みんなで協力しないとできない。
このみんなで協力をするときに、
実はこつがあって、環境省HA協
働ガバナンスという言葉が最近、
使いたんですけど、いろいろ人々
が話をする、対話

をするときに、やっぱり、例えば、先ほどちょっと話をしましたが、その人たちの間に、過去に軋轢があって、けんかしたことがあるのかないかとかはやっぱり理解しておかないといけません。けんかしたことがあったら、それを修復してからじゃないとパートナーシップは組めなくなるとか、あとはその場で相手のことを一方的に否定する人とか。1人で自分の意見だけ主張する人がいてもいけないので、そういうところをちょっとへこませるような、調整をするような場を仕切る、ファシリテートするような機能を誰かが発揮しなければいけなかったりとか、別に専門家じゃなくてもいいですけど。

そういうパートナーシップをするときのガバナンスをどうやって確保するかというのは、すごく大事だということが分かってきて、環境省では、その協働ガバナンスを冊子でまとめたりして、どういうふうなことがポイントですよみたいなのをまとめたりもしているんで、もし興味のある方はそれも見ていただけたらと思っています。

- モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。本当にそうですね。協働って本当に大変なことなのですね。しかし、最も大事なことということで、はい、ありがとうございます。

佐々木さん、何かありますでしょうか。

- パネリスト 佐々木真二郎 私からは、ぜひ地家室の施設ができたことで地域の方々にエールとあと御協力をお願いしたいなと思います。本当に昨日、私も見てきたんですけれども、素晴らしい施設ができたなというふうに思っております。ただ、行政のあるあるでして、箱ができた後、だんだん右肩下がりでご入館者数が減ってくるというのはよくある話でございます。そこで、魅力的な運営ができるかということがすごく大事で、そこで楽しむことがたくさんあって、やっぱり何回も来たくなるような仕掛けというのがやっぱりやれないといけません。ただ、これって職員の方だけでやるのって、すごく大変なんですよ、人数も限られているし、そもそもそこで受付として電話番号をしたりとか来館者の対応をしているだけでも時間がなくなってくる。そういうときにやっぱり助けになるのが、地域の方々だったりとか、地域の外にいる人でも応援してくれる人たちなんですね。

そういう人たちが、先ほど自分たちのできることをやるという話がありましたけど、支え合うっていうのがありましたけど、自分たちが、例えば、こう

いうことで協力できるよ。ただ単に人に行ったらいいよってお勧めしてくれることももちろん大事です。

でも、例えば、ちょっとあそこのスイセン畑の管理を、私たちもちょっと体を動かすついでにやろうかなとか、子供たちがそこで遊んでいるときにちょっと見守りをやろうかなとか、いろんなちょっとあそこでちょっとしたイベントをやれるようにしようとか、そういう関わり方ってすごく実はたくさんあって、そういういいアイデアってみんなでわいわいがやがや話しているときに出てくるんですね。

なので、ぜひその施設に行って、その施設の中で職員の方も含めて、みんなで盛り上がっていただいて、ここの施設どうやったらもっと楽しくなるかなと、どうやったら使い倒せるかなって話をさせていただいて、それを特に市役所が施設を持ったりもするので、市役所、町役場も含めて、皆さんでどうやったら実現できるのかという方向で議論を前向きに重ねていけることができるかと、そこがすごく大事なかなと思って、ぜひ発展した素晴らしい施設になることを期待しています。

以上です。

- モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。先ほど、ハワイでもコミュニティーの方が環境問題ですごく関わっていらっしゃいましたし、素晴らしいアイデアをサジェッションいただきました。町長いかがですか。

- パネラー 佐々木真二郎 ごめんなさい、話が長くて。

旅人が現地に来たときに、景色がよかったとか食べものがおいしかったとか、いろいろ記憶に残るんですけど、私、個人的には、一番記憶に残るのが、その地域の人と交わした雑談だと思います。そこで、何気ない会話をしたことが、その地域のことを教えてもらったことが、実はすごく心に残る、それがまた次、この地域を応援しようという原動力になるんです。

地域の方々が挨拶に関わって外から来た人を案内するとか教えてあげるといえることができると、すごくそこがうまくいくと思います。そういった意味でも協力、協働ができるべきかなと思っています。

- パネラー 藤本浄孝 すみません、アドバイスをいただきまして、まことにありがとうございます。しっかりと活かしてまいりたいと思っています。

やはり、安倍先生からも先般のシンポジウムのときにこの周防大島を、こんなにいいところでみんな

育っているんだよということを誇りに思っほしいということをおっしゃっていただきました。やはりこの地域のことを、やはり住んでいる我々が地域のことを好きになっていく、地域をよくしたいと思っっていくということが、大切になりますし、そういった機会をどんどん人材を育成していく、みんなに教えていくということが必要だなと思いました。

あと一点、このパートナーシップということであると、周防大島はカウアイ島との60年のこのつながりというものをつないできています。私もそのボタンを引き継ぐものとして、このパートナーシップということ、とすると、私、今町長で努めさせてもらってまして、私が積極的にこのパートナー、姉妹等提携の、例えばカウアイ島と積極的に関わらないことがあると途絶えてしまうことがあります。

ですので、やはりこの周防大島の60年続いた秘訣というのは、やはり国際文化協会という法人をしっかり構えて、私だけの意見ではなくて、皆さんの意見でこの相手と関わっていく、そういう方法を編み出してこられて、そのようにやっておられるからこのように続くのだなということを、改めて感じるところであります。

ですので、この白木半島コミュニティ協議会であったり、地家室園地もそういった1人のアイデアだけではなくて、皆さんの意見を集合体でつくっていった、よい形にするということも心がけていきたいなということをお話を聞きながら感じておりました。

- モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。白木半島の協議会の皆さん、今日来ていただいておりますが、いかがでしょうか。何か御発言をすることはありますか。ちょっと光って手が挙がっていても見えないんですけど、大丈夫でしょうか。

それでは、手が挙がっていますね、どうぞ、ちょっと御発言ください。

- 新山玄雄 白木半島コミュニティ協議会 会長 一言、御礼申し上げます。新山です。昨日、地家室園地があのようオープンいたしました。皆さんのおかげであります。今、いろいろな御意見というんですか、御教示をいただきましたけれども、それをしっかりと踏まえて、地元のほうでもその施設がしっかりと生きていくように、そして、活性化や交流の促進になるように力を尽くしてまいりたいと思いますので、どうぞよろしく御支援、御指導いただきますように、今日はありがとうございました。（拍

手）

- モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。協議会の会長さんからの御発言で、大変、未来が明るいというふうに思っています。

最後に、昭恵さんのほうから一言。

- コメンテーター 安倍昭恵 きょうは本当にありがとうございました。せっかくこのハワイからミツエさんも来ていただいて、いろいろなハワイの取組も知ることができたので、ぜひ高校生や大学生が積極的にハワイの高校生、大学生と今はオンラインでもつながれるので、そういう交流をして、お互いにどうしているかというのを、知ってもらう取組をこれからしていただければ嬉しいなというふうに思います。

また、日本アワサンゴは周防大島だけのものではなくて、これは日本の宝だと私は思いますので、どんどんこれを発信していただいて、多くの方たち、まずは日本の人たちに知ってもらい、そして、世界にも発信して、日本、今山口県は、山口市ですかね、ニューヨークタイムズで行くべき世界の52都市の3位になっているので、これを大いに利用して、世界の方たちにもこのアワサンゴを見に来てもらえたらなというふうに思います。

今日は本当に長時間でしたけれども、皆さん御協力ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。（拍手）

- モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。今日は「海のある周防大島とハワイの幸福」というようなタイトルで、ハワイのお話、そしてまた循環していくことで、また環境を守っていくとか、地家室園地への期待、そういう話がありました。

とにかく今日のお話の中に出てきた協働だったりとか、それから主体性、だから、これから私たちも人が何かやってくれるとか、そういうことじゃなくて、身近な環境、そういったものを自発的に何か守っていくとか、あるいはお客様が来たらそういう観光客の人とも交流しながら、この周防大島の魅力を伝えていくとか、あるいは一緒に環境を守っていくとかみたいな、そういう行動へとつながっていくような、そういう気持ちが皆様のお話を伺って感じられました。どうぞ御一緒に、そういった活動に向かっていったら、大変嬉しいと思います。

そして、このBGAPはこうやってして2020年からずっと活動をさせていただいております。こういう活動があったときに、チラシなど情報をお伝えする

ことになっていまして、今日お配りしておりますプログラムの中の7ページのほうにQRコードが出ております。今までのQRコード、文字起こししたものをそれから見ていただくこともできますし、それから、名前とインターネットのアドレス、それを送っていただきますと、今後のシンポジウムや展覧会等の御案内をさせていただきますので、ぜひともクラブの会員になっていただく、もうお名前とアドレスだけで、ほか個人情報は何も我々は知らない状態で御案内することになります。

ぜひこういう活動に興味がおありの方は、会員になっていただく、また一緒にこういう活動をしていく、メンバーになっていただくということなども期待しながら、活動をしていくところでございます。

ちょっと延長いたしまして申し訳ございませんが、本日は、長時間にわたりまして御参加くださいまして、本当にありがとうございました。（拍手）

雨の中、お氣をつけてお帰りいただきたいと思います。それでは、マイクを司会者のほうに戻したいと思います。

○司会 以上で、シンポジウム、「海のある周防大島とハワイの幸福～地域循環共生と再生型観光の視点から～」を終了させていただきます。

今一度、御登壇いただきました皆様に拍手をお願いいたします。（拍手）

皆様、本日は御来場いただき、ありがとうございました。

本日の全てのプログラムはチラシ、パンフレット記載のユーチューブより後日配信いたします。プログラム裏面と前方スクリーンには過去の実績をまとめた「サステイナブルの地域創生に向けたハンドブック」と今後のイベントの案内をさせていただきます。B G A Pクラブの御案内がございます。

また、受付時にプログラムと併せてお渡しいたしましたアンケートへの御協力もどうぞよろしくお願い申し上げます。

改めまして、本日は皆様、起こしいただきましてありがとうございました。どうぞ気を付けてお帰りください。（拍手）（写真4）（写真5）



写真4 アロハシャツの展覧会（水谷由美子デザイン 会場ロビーにて）



写真5 登壇者による集合写真（左から水谷由美子 安倍昭恵 ミツエ・ヴァーレイ 佐々木真二郎 藤本浄孝）

付録1-2 「ブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP 2023Vol.2 海のある周防大島とハワイの幸福～地域循環共生と再生型観光の視点から～」
プログラム 転載

祝・周防大島町地家室園地拠点施設・環境省地家室園地休憩所開館記念イベント

Blue & Green Art Project BGAP 2023 Vol. II



Blue & Green Art Project BGAP 2023 Vol. II

ブルー＆グリーンアートプロジェクト
BGAP 2023 Vol. II

海のある周防大島と ハワイの幸福

— 地域循環共生と再生型観光の視点から —

2024 / SUN
3 / 24
10:30-12:30
(開場 10:00)

場所 周防大島町 橘総合センター

〒742-2806 山口県大島郡周防大島町大字西安下庄 445-2
☎ 0820-77-0100

主催：ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会 BGAP
共催：周防大島町
協力：環境省 / ハワイ州観光局日本支局 / 周防大島高校
公益財団法人山口県大島郡国際文化協会
後援：山口県立大学

主催者挨拶



ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会 会長

安倍 昭恵 Akie Abe

私達人間は短い一生を地球に住まわせていただいているのだと思います。

自然は決して人が支配するものではなく、共に生きていくもの。日本人は古代から自然の中に神を見出し人も自然の一部であると考えてきました。今こそかつての考え方を取り戻し、豊かな自然環境を守っていかなくてはならないと私は思っています。

ここ周防大島に群生している世界最大規模のニホンアワサングは日本の宝でもあります。私達は多様性の重要性を考えさせられていますが、ニホンアワサングのまわりの多様な生物たちから人間が学ぶことが沢山あるのではないのでしょうか。多くの方にニホンアワサングの存在を知っていただき、この地を訪れて実際に見ていただくことで多様性を受け入れる社会の実現に繋がれば良いと思います。

この度のシンポジウム開催にあたり周防大島町をはじめ環境省、ハワイ州観光局日本支局など多くの皆様にご支援を頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。ご来場の皆様におかれましてはシンポジウムをお楽しみください。

来賓挨拶



山口県議会 議長

柳居 俊学 Shungaku Yanai

ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP 2023 Vol. II の開催を、心からお祝い申し上げます。

瀬戸内のハワイと称される周防大島は、温暖な気候と、穏やかな海や彩り豊かな自然を体験できる場所であり、こうした地域特性を生かした独自の価値づくりにより、新たな人の流れと地域産業に好循環を生む取り組みが創出されており、瀬戸内海の自然体験や、環境学習の拠点として今回整備された「地家室園地休憩所」、「地家室園地拠点施設」を中心に交流人口の拡大による地域活性化が大いに期待されるところです。

また、地域循環共生と再生型観光の視点から意見交換が行われ、観光と環境の関わりから周防大島の今後について、異なる視点からアプローチがなされることを大変興味深く感じています。

この取組が、地域活性化に向け、多くの皆様にとって新たな発見の場となりますよう願いたします。

共催者挨拶



周防大島町長

藤本 淨孝 Kiyotaka Fujimoto

ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP 2023 Vol. II 「海のある周防大島とハワイの幸福 ―地域循環共生と再生型観光の視点から―」シンポジウムのご開催に寄せてご挨拶を申し上げます。

周防大島町地家室園地拠点施設・環境省地家室園地休憩所のオープンを祝っていただき、壮大なシンポジウムを BGAP の皆さまと周防大島町が共催させていただくことは大きな喜びであり、このイベントにご一緒させていただく全ての皆さまに町を代表し、心から感謝を申し上げます。

BGAP の皆さんにはこの地で2回に渡り海の豊かさや SDGs、民俗学者の宮本常一先生の功績や地域循環、地域創生に至るまで深く思いを寄せる場をご提供いただきました。

そしてこの度は周防大島から多くの移民を輩出し、繋がりが強いハワイと海における地域循環共生と観光について大いなるヒントを授けていただけると楽しみにしています。

以前、安倍昭恵先生には「この地はこんなに素晴らしいと自信をもって！」と我々にとって誇らしいお言葉をいただいたことが実に印象的でした。是非、地域一体の町づくりに共に夢見るようなひと時となりますようお願い申し上げます。

プログラム

◆あいさつ◆

主催者：安倍 昭恵（BGAP 会長）
来 賓：柳居 俊学（山口県議会議員）
岸 信千世（衆議院議員）
岡 正朗（山口県立大学理事長）

◆基調プレゼンテーション◆

安達 向日葵 / 上岡 陸可（周防大島高校 普通科 環境コース 2 年）
「アワサンゴ保護で日本の未来を救う！ ～ 周防大島高校発地域循環共生圏（ローカル SDGs）づくり ～」

◆シンポジウム◆

パネラー

佐々木 真二郎（環境省大臣官房地域政策課地域循環共生圏推進室長）「地域循環共生圏の推進」
ミツエ・ヴァーレイ（ハワイ州観光局日本支局 局長）「ハワイの再生型観光について」
藤本 淨孝（周防大島町長）「ニホンアワサンゴの学習施設開館の意義と活用」
コメンテーター 安倍 昭恵（元内閣総理大臣安倍晋三夫人）
モデレーター 水谷 由美子（山口県立大学名誉教授）

◆展覧会◆

ニホンアワサンゴに着想された周防大島の豊かな暮らし ～ 7 色のオリジナルアロハシャツ ～

企画趣旨



ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会 実行委員長

水谷 由美子 Yumiko Mizutani

ブルー＆グリーンアートプロジェクトは 2020 年に発足されました。それ以来、地域活性化の視点として海と陸を繋げた活動をする
ことを重視してきました。今年度の 1 回目の事業では「海と陸とウェルビーイング～幸せは手仕事にやどる～」をテーマとして、
地域社会と環境の関係に生活の豊かさの概念を導入しました。そこでデイヴィッド・ロックフェラー Jr. 夫妻をお招きして国内外
の海洋問題に関する基調講演をして頂き、そこで日本ならではの解決の可能性について、日本人の自然を敬い、美を尊ぶ心の存在
について指摘されました。

今年度第 2 回目となる今回は、周防大島町にある世界最大規模のニホンアワサンゴの群生地を巡って同町と環境省によって作られ
た周防大島町地家室園地・環境省地家室園地休憩所の本格的オープンングを祝して開催させていただきます。

周防大島町では今までに 2 回のシンポジウムを通じてニホンアワサンゴと周防大島町の関係や宮本常一による海と陸に関する地域
活性化の理念や手法について議論してきました。

今回は「海のある周防大島とハワイの幸福―地域循環共生と再生型観光の視点から―」をテーマにします。環境省が提唱するサス
テナブルな地域循環共生圏を地域活性化の手法として具体的に検討をします。オープンされたばかりの地家室園地は自然体験や環
境学習の場として、地域内外あるいは国内外の人々のユニークな観光のデスティネーションとして期待されています。

世界規模の観光の島ハワイ州では再生型観光に取り組まれています。観光と環境の関わりから周防大島がさらに国内外から注目さ
れるより良い島になる、つまり住人も来訪者も幸福を感じられる島になるにはどうしたら良いか。この疑問についてハワイの実践
例に学びたいと思います。

会場の皆様からのご意見も賜りたいと思っておりますので、どうぞご発言をお願いします。

登壇者プロフィール



ハワイ州観光局日本支局 局長

ミツエ・ヴァーレイ Mitsue Varley

石川県出身、1992年ハワイへ移住。オアフ島北東部に位置するクアロア・ランチ・ハワイでカスタマーサービス、オペレーションマネージャー、営業部長を経験した後、PR会社で観光関連企業の広報活動に携わり、2000年からオアフ観光局のアジア地区ディレクターとしてオアフ島の観光促進に従事。2011年a.Link,LLCに参画し、2012年ハワイ州政府からの業務委託を請け、ハワイ州観光局日本支局のマーケティング本部長、局次長、2019年4月局長に就任。



周防大島町長

藤本 淨孝 Kiyotaka Fujimoto

2000年周防大島町長に就任。「人と自然が響きあう、笑顔あふれる安心のまち、周防大島～私たちの、たのしい、すみたい、いきいたい島～」を掲げる。周防大島町とハワイの交流は古く、1963年ハワイ州カウアイ島と姉妹島提携を締結。お互いの島を訪問しあい、文化、産業、スポーツなど様々な交流を進め、2023年には姉妹島提携60周年を迎え、両島の絆をより強固に、そして次世代に引き継いでいくために姉妹島交流確認書に署名。



環境省大臣官房地域政策課地域循環共生圏推進室長

佐々木 真二郎 Shinjiro Sasaki

2002年、環境省に入省。環境省レンジャーとして、国立公園や世界自然遺産の保全管理、希少野生生物の保護を担当。東日本大震災では、自然環境を活かして復興に貢献する「グリーン復興プロジェクト」として、みちのく潮風トレイルの整備などにかかわる。現場では、阿蘇くじゅう国立公園の管理や、長崎県対馬のツシマヤマネコの保護増殖事業を担当。また、2017年から2019年まで福井県自然環境課長として、年縞（ねんこう）博物館の建設、コウノトリの野生復帰事業や自然再生事業を担当。2020年7月より現職。



ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会 会長

安倍 昭恵 Akie Abe

聖心女子学院幼稚園から高等学校卒業。聖心女子専門学校英語科卒業。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修了。株式会社電通新聞局を経て1987年安倍晋三氏と結婚。趣味は、ランニング、ゴルフ、お米づくり、書道。2006年から山口県立大学企画デザイン研究室と共同研究を開始し、2013年からファッション創造による農業振興および地域活性化の活動を目指すアグリアート・フェスティバル、その後継としてBGAPを2020年に立ち上げる。2018年から2021年まで山口県立大学大学院国際文化学研究科非常勤講師。



ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会 実行委員長

水谷 由美子 Yumiko Mizutani

三重県生まれ。お茶の水女子大学大学院修了。山口県立大学名誉教授。服飾デザイン・服飾美学・サービスデザインを専攻。2002年にヘルシンキ芸術デザイン大学（現アールト大学）大学院客員教授としてフィンランドに在住。2009年から10年以上、ラップランド大学と共に、サステナブルと地域資源の活用をテーマとする共同研究を実施。その他、ハワイ、中国、韓国、フランス、カタール等の各大学との国際交流を通じたファッションショーを教育研究創作活動として実施。国内外で活躍するデザイナーなどクリエーターを多数輩出。

スタッフ

企画・運営	安倍 昭恵 水谷 由美子
総合プロデュース・ディレクション	水谷 由美子
コーディネート協力	本川 キース（株式会社鳳凰マネジメント 代表取締役社長、アドバイザー） 桂 小春（ハワイ州観光局日本支局 イベントプロモーションマネージャー）
舞台統括・演出	原田 裕作
グラフィックデザイン	津村 実奈
グラフィック協力	下川 まつゑ（山口県立大学国際文化学部実習助手）
グラフィック写真提供	水谷 由美子
映像編集・配信	原田 裕作
写真撮影	川部 那萌
司会	柳沢 みゆう（周防大島高校 普通科2年）

アグリアート・フェスティバル と ブルー＆グリーンアートプロジェクト ヒストリー

アグリアート・フェスティバル 2013～2019

2013 年	農業スタイルコレクション 2013 in 長門油谷 with 会津若松（ラポールゆや、長門市）mompekkko「グローバル」
2014 年	アグリアート・フェスティバル 2014 大地の声をさく（ラポールゆや、長門市）mompekkko「raita」
2015 年	アグリアート・フェスティバル 2015 和歌清寂～夏は涼しく～（ラポールゆや、長門市）mompekkko「takijima」
2016 年	アグリアート・フェスティバル 2016 自然との対話（ルネッサながと、長門市）mompekkko「cosmo」
2017 年	アグリアート・フェスティバル 2017 The Force of Water 水の力（ルネッサながと、長門市）mompekkko「nagato」
2018 年	アグリアート・フェスティバル 2018 リアル・アグリ～風と遊ぶ～（ルネッサながと、長門市）mompekkko「motonosumi」
2019 年	アグリアート・フェスティバル 2019 光の棚田（ルネッサながと、長門市）mompekkko「tanada」

ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP 2020～現在

2020 年	シンポジウム＆ファッションショー 海と陸の結婚（旧文洋小学校、長門市）
2021 年	シンポジウム、ミニコンサート＆ファッションショー 海と陸の過去・現在・未来 ～和のサステナビリティで世界へ～ （ラポールゆや、長門市） シンポジウム＆ワークショップ 自然を知り活かし豊かな暮らしをデザインする ～日本の和ハーブ、長門の和ハーブ～ （旧文洋小学校、長門市） ビーチクリーン & シンポジウム 海の豊かさを周防大島における近未来の生活デザインに活かす ～SDGs から白木半島地区の可能性を探る～（周防大島町橋総合センター、大島郡周防大島町）
2022 年	シンポジウム＆展覧会 民俗学者「宮本常一」に学ぶ地域創生～地域循環がある周防大島町のライフデザイン～ （周防大島町橋総合センター、大島郡周防大島町） 展覧会＆ワークショップ 海を巡るファッションの旅 Step By Step（ギャラリー ラ・セーヌ、山口市）
2023 年	シンポジウム＆展覧会 海と陸とウェルビーイング～幸せは手仕事にやどる～（ラポールゆや、長門市）

展覧会



ニホンアワサングに着想された周防大島の豊かな暮らし ～7色のオリジナルアロハシャツ～

2021年に周防大島町と周防大島高校及び山口県立大学の間で締結された3者連携の一環として、周防大島高校の生徒のためのオリジナルアロハシャツがデザインされた。

テキスタイルのモチーフはニホンアワサングが生息する海の上に、周防大島を象徴するみかんの花が浮かんでいる状況表現している。

その後、2023年から一般用に7色のアロハシャツ（各色 SML サイズ）が商品開発されており、現在、周防大島町で販売されている。市民にも着用されて、周防大島とハワイの架け橋になるようなアロハシャツに成長することが期待されている。

- | | |
|------|--|
| 制作 | 周防大島高校アロハ・プロジェクト実行委員会 |
| 商品開発 | 水谷 由美子(テキスタイル&ファッションデザイン
山口県立大学名誉教授) |
| | 清水 竜介(マネジメント 元山口県教育委員会) |
| 製造 | 株式会社フルグラフィックファクトリー |
| 販売 | 公益財団法人山口県大島郡国際文化協会 |
| 販売場所 | グリーンスティながうら
道の駅サザンセトとうわ
マリッサリゾート サザンセト周防大島 |

アーカイブ



【サステナブルな地域創生に向けたハンドブック】

2020年～2022年5回分のシンポジウムを下記のエッセイの付録として採録。

「ブルー＆グリーンアートプロジェクト2022と地域文化創造の実践的研究

～ サステナブルデザインと「海を巡るファッションの旅 Step By Step」を事例として ～」

水谷由美子他、「山口県立大学学術情報 第16号」[国際文化学部紀要通巻第29号]、2023年。



【山口県立大学 リポジトリ】

こちらから以下のタイトルを検索することで、昨年10月に開催されたBGAP 2023 Vol. 1のアーカイブをご覧くださいことができます。

(2024年4月以降)

『地域におけるサステナブルな創造活動とウェルビーイング～「BGAP2023 海と陸とウェルビーイング 幸せは手仕事にやどる」を事例として～』



全てのプログラムは後日公式 Youtube チャンネルより配信。

Blue & Green Art Project



YouTube で検索



【BGAP クラブ会員募集】

ご入会をご希望の方は bgap.club@gmail.com にお名前とメールアドレス
をご送信ください。今後のイベント情報をご案内します。

【問合先】

〒753-0056 山口県山口市湯田温泉 2-3-26-901

BGAP Office (担当：水谷)

☎ 090-7776-9763 ✉ yumiko0911green@gmail.com

付録Ⅰ-2

「ブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP 2024 海と陸とアップサイクル The Sea, Land and Upcycling」収録

Ⅰ 主催者及び来賓の挨拶

主催者 安倍昭恵 ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会 会長
来賓 柳居俊学 山口県議会議長
吉田真次 衆議院議員
来賓紹介 前田晋太郎 下関市長

Ⅱ 基調プレゼンテーション「農業文化振興からアートを通じた海と陸を繋げた地域文化創造の活動へ」

水谷由美子 ブルー＆グリーンアートプロジェクト
実行委員会 実行委員長

Ⅲ シンポジウム 「海と陸とアップサイクル The Sea, Land and Upcycling」

パネラー

長坂 真護（美術家）「サステイナブルキャピタリズム、輝かないものはこの世にない」
柏原エリナ（ライトモードアーティスト）「海洋プラスチック問題に光をあてる」
韓 昌完（下関市立大学学長）「街とその不確かな未来と教育－芸術教育を中心に」

コメンテーター

前田晋太郎（下関市長）
安倍昭恵（元内閣総理大臣故安倍晋三夫人）

モデレーター

水谷由美子（山口県立大学名誉教授）

司会

高松綾香（アナウンサー）

Ⅰ 主催者及び来賓の挨拶

○司会 高松綾香 皆様、大変長らくお待たせいたしました。ただいまから、「ブルー＆グリーンアートプロジェクト2024海と陸とアップサイクル」を開催いたします。

本日の司会進行は、高松綾香が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

まずは、主催者を代表いたしまして、ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会会長、元内閣

総理大臣、故安倍晋三夫人、安倍昭恵が御挨拶いたします。安倍昭恵会長、お願いいたします。（拍手）

○安倍昭恵 ブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP会長 皆さん、こんにちは。今日は、お足元の悪い中、またそれぞれお忙しい中、このBGAPのプロジェクトに多数お集まりをいただきまして、ありがとうございます。

私は、主人と結婚して初めて地方で暮らすことになりました。そして、3.11の後に東京、その頃は東京に住んでいたんですけども、東京のスーパーやコンビニから食べる物がどんどんなくなっていく状況を見て、これからはお金があっても物が食べられないという時代が来るかもしれない。自給自足の生活をするのが一番強いのではないかと思って、下関でお米作りを始めました。

安倍の父が亡くなってしばらくは下関に住んでいましたけれども、その頃は本当にこの地方の自然の豊かさ、美しい海、そして山がすぐそばにあって、自然の移り変わりを田んぼや山の木々の色の移り変わりによって感じる事ができる、本当にこの地方の暮らしというのは豊かだなというふうに思ったのですけれども、その3.11の後にお米作りを始めて、農業の重要さというのを改めて感じるようになりました。

やはり地方でしっかり農作物を作っていたいでいるおかげで、都会の生活が成り立っているんだなというのを改めて感じて、そして多くの若者たちにもっと農業に関心を持ってもらいたい。そのためにはどうしたらいいんだろう。若者たちがファッションで農業を感じてもらえないかということで、山口県立大学の水谷教授と一緒に共同研究という形でファッションショーを始めました。

先ほど映像で見ていただいたと思いますけれども、アグリアートフェスティバルという形で長門市で開催をしていて、一度は主人にも登壇してもらったことがあります。そして、現在はブルー＆グリーン、山や陸だけではなくてやはり海の環境も、海に囲まれている日本、そして海に囲まれている山口県をしっかりと、この海の環境を考えていかなきゃいけないということで、ブルー＆グリーンアートプロジェクトということで現在は活動が続けさせていただいております。

今回は、アップサイクルということで、2人のすてきなゲストをお迎えして、後でプレゼンをしてい

ただきますけれども、この地域の環境を守っていくために、また日本の豊かさを世界に発信するために、今私たちが何ができるんだろうか、ぜひ皆様にも一緒に考えていただければと思います。

これからもこの地域のために、私も何かしら尽力していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。今日はちょっと長くなりますけれども、どうぞ最後までお付き合いをいただければと思いますので、よろしくをお願いいたします。

今日は、わざわざ後で御挨拶いただきますけれども、柳居議長にも遠くからいらしていただきましたし、前田市長、そして吉田さんにも選挙のさなか、わざわざお越しをいただきました。この後、御挨拶をいただきますけれども、皆様方には合わせてよろしくお祈りを申し上げます。ありがとうございます。（拍手）

○司会 高松綾香 安倍昭恵会長、ありがとうございました。

続きまして、御来賓であり、またブルー＆グリーンアートプロジェクト代表顧問の山口県会議長、柳居俊学様から御挨拶をいただきます。お願いいたします。（拍手）

○柳居俊学 山口県会議長 祝辞。「ブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP2024 海と陸とアップサイクル」の開催により、ここに一言お祝いを申し上げます。

プロジェクト会長の安倍昭恵様をはじめ、実行委員長の山口県立大学名誉教授 水谷由美子様、並びに開催にあたり御尽力をいただいた関係の皆様方に深く敬意を表します。

さて近年、地球温暖化を要因とする気候変動や生態系への影響、また海洋ごみ問題など地球規模での新たな環境問題が顕在化する中、持続可能な社会の実現に向け、多様な主体がそれぞれの役割を認識し、必要な取組への積極的な参加が求められています。こうした中、海と陸の廃棄物による環境と経済の循環について、創造的再利用とも言われるアップサイクルの観点から、意見交換が行われますことは大変意義深いものと感じております。

また本日は、シンポジウムに加えて演奏会や展覧会が開催され、とりわけハワイの作家の方々による着物を活用したアップサイクルへの挑戦は、廃棄物消滅はもとより、日本の象徴的伝統文化の価値を再発見できる大変貴重な機会でございます。

ここで、祝辞にはあえてございませんが、勝手に

思いを少し述べさせていただきます。実は長門でこういうシンポジウムを、昭恵様や水谷先生が開催をしておられるときに、御縁をいただいて一度寄せていただきました。

以来、今度は海のほうも少しテーマにしようということで、皆さん御存じですかね、山口県の東南端に大島郡の周防大島という島がございます。これも広島県と愛媛県の県境を指しています。ここにニホンアワサンゴというサンゴの群生が見つかりました。

これをこれからどのようにしていこうかということで、昭恵会長が大島に行ってやろうと、選挙区でもない大島に行ってやろうと、こういうことで3回も4回も足を運んでいただきまして、海岸の清掃活動や、そして島の高校生を集めてシンポジウムを3回もしていただきました。

そして、そのニホンアワサンゴをこれからどういふふうに活用していこうかということで、保護活動や監視活動をしていただいたので、これにて地域の振興を図っていこうということで、ビジターセンターを作っていたらこうということで、環境省にずっとお願いをしておりましたが、なかなか環境省は予算の少ないところで、予算がいただけないところに昭恵会長が環境省の方を連れておいでくれたら、なぜか予算がつきました。

そして、今年の1月にビジターセンターがオープンいたしました。それができたところが本当に過疎地域で、小さな漁村が7つほどございます。半島の先のほうです。訪れる人も少ない。それから地域の方々も大変年をとっておりますが、これを御縁に地域振興が少しずつ起こり始めて、いろんな方が訪ねてくださるようになりました。やはり離島ですから、海が命ですから、これを活用しながら、共に振興を図っていこうということでございます。

私は議長ということですが、本来このBGAPの研究員にしてくださいということを昭恵会長にずっとお願いをして、7年目になります。さっき、その安倍総理の絵画の展示のところで御挨拶されたときに、研究員という言葉を使っていたので、7年目にしてBGAPの私は研究員に就任をされた。今日は記念すべき年でございました。ありがとうございました。（拍手）

今、ここでアワサンゴと、それからクラゲの研究をしています。最近是人魚の研究にも力を注いでおります。この辺でなかなか研究員にしていられなかったのだらうと思っています。いずれにいたしま

しても、海を守りながら一生懸命、このBGAPの理念に応じた活動を進めていきたいと願っています。

私ども県議会といたしましても、将来にわたって、県民生活が豊かなものとなるよう、活力ある地方創生に向け、一生懸命取り組んでまいりたいと考えております。皆様方の御支援と御協力をいただきながら、これに議会としても全力投球を出すことを願っています。

結びに、本日のシンポジウム、展覧会の御盛會と、御参集の皆様方の御健勝、御多幸を念願いたしまして、お祝いの言葉といたします。令和6年10月19日、山口県議会議長、柳居俊学。おめでとうございます。（拍手）

○司会 高松綾香 柳居俊学様、ありがとうございます。続きまして、衆議院議員、吉田真次様から御挨拶をいただきます。吉田様、よろしくお願いいたします。（拍手）

○吉田真次 衆議院議員 皆様、こんにちは。今日はBGAPのプログラムの御開催、足元の悪い中、皆様方お集まりの下、開催されますことを心からお喜び申し上げます。

私も玄関を開けたら30秒で海に飛び込めて、そして家のすぐ裏には山があって、田んぼと畑がある、いわゆる田舎に住んでいるものであります。日本の原風景で昔こんなところが多かったなど、皆様にも想像していただけるのではないかというふうに思いますけれども。しかしながら昨今は温暖化に伴う海洋環境の変化とか、あるいは地球規模で自然環境が変わりつつあるという状況であります。

私たちは、やはり新しい技術とか、あるいは変革を起こすイノベーション、そうしたものを追いかけていくということは大事ではありますが、やはり先祖の皆様が残してくれた自然、それから豊かなふるさと、こうしたものをしっかり守っていかなければいけないだろうと、こういうふうに思っているところでございます。

今日のこのプログラムでは、先ほど柳居議長からお話がありましたように、創造的再利用ということで、アップサイクルというものでありますけれども、今まで廃棄物とかあるいは不要になったもの、そうしたものをより質の高いものにアップグレードして、再利用していこうという考え方でございます。これは限られた資源に配慮しながら、そして環境にも優しく、私たちの生活をより豊かなものにするという大変大切な考え方であるというふうに私も

思っております。

本日は、シンポジウムやそれからコンサート、展覧会等もあるというふうにお聞きをしております。本日、皆様方がここで見たことや聞いたこと、そしてお感じになられたことを、この下関の地から全国に発信していただくことを祈念いたすところでございます。

結びになりますけれども、このプロジェクトを開催していただきました安倍会長や水谷先生をはじめ、関係者の皆様方に感謝を申し上げますとともに、実りの多い会になることを心から念願をして、措辞ではございますけれども、私の御挨拶に代えさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。（拍手）

○司会 高松綾香 吉田真次様、ありがとうございます。

では、ここで本日お越しいただきました御来賓の皆様を改めて御紹介いたします。

山口県議会議長、柳居俊学様。

○柳居俊学 山口県議会議長 おめでとうございます。（拍手）

○司会 高松綾香 衆議院議員、吉田真次様。

○吉田真次 衆議院議員 おめでとうございます。（拍手）

○司会 高松綾香 下関市長、前田晋太郎様。

○前田晋太郎 下関市長 おめでとうございます。（拍手）

○司会 高松綾香 以上の皆様でございます。本日はお忙しい中、御出席を賜りまして誠にありがとうございます。

Ⅱ 基調プレゼンテーション「農業文化振興からアートを通じた海と陸を繋げた地域文化創造の活動へ」

それでは、ただいまから本日最初のプログラムとなります、基調プレゼンテーションを始めさせていただきます。基調プレゼンテーションでは、本企画の趣旨やこれまで行ってきた活動について、実行委員長の水谷由美子より御紹介いたします（写真1）。

それでは、水谷実行委員長、お願いいたします。

○水谷由美子 ブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP実行委員長 皆さん、こんにちは。ただいま御紹介いただきました、水谷由美子でございます。本日は足元の悪い中、本当にいらっしやっていたいて心より感謝申し上げます。



写真1 水谷由美子 基調プレゼンテーション

今まで何回も来ていただいた方には少しダブルかもしれませんが、私も先ほど安倍会長がおっしゃったように、2013年から活動しております、その経緯を簡単に御紹介したいというふうに思います。

それで、ここにありますように、農業文化振興からアートを通じた陸と海をつなげた地域文化創造の活動へということで、10分ちょっとお話をさせていただきます。

最初、2013年から2019年までアグリアート・フェスティバルというのをやってまいりまして、約7回のプロジェクトをやりました。そして現在しておりますブルー&グリーンアートプロジェクト、これを2020年から8回、短い期間でも攻めておりまして、安倍会長と一緒に長門だけでなく、周防大島、山口市、そして今回下関市でやらせていただいております。

ここは概略のテーマを示しておりますけれども、最初、昭恵会長の提案によりまして、東日本大震災から着想され、そして実際に実現したのは2013年からということになっております。農業を通じた日本の伝統文化とか精神とか、そういうものに着目し、そして農作業に必要な「mompekkko」という農作業着を開発してまいりました。

2019年のテーマは「光の棚田」なのですが、棚田サミットが長門市で行われて、それが一応まとめの年となりました。

そしてブルー&グリーンアートプロジェクトが2020年に開始されたのですが、昭恵会長とミーティングしまして、次のテーマなり組織をどうしていくかという中で、東日本大震災のときに海を守るために陸の開発といいますが、開発というよりも整備ですね、そういう活動をして、それでカキ養殖をやっていた方が1年で見事に復活さ

れたという感動的なお話を伺いました。海と陸を繋ぐ活動で地域活性化をされているこの事例に着想を得て、このブルー&グリーンアートプロジェクトが開始されました。

という感じで、周防大島のほうに行きまして、民俗学者、宮本常一先生に学ぶ地域創生といったような方向にも展開したり、去年は海と陸とウェルビーイングということで、現在の新しい概念、いかに生きるかの概念、ウェルビーイングを取り上げさせていただいております。

昨年度の2回目には、周防大島にハワイ州観光局から日本支局長ミツエ・ヴァーレイ様をパネラーとしてお招きするなど、国際的に展開をさせていただいております。ビジュアルを簡単に見ていただいて、今度はmompekkkoの開発ということで、山口県の交流のある地域のテキスタイルを使ったり、あるいは岩国のほうにある玖珂縮とか、柳井縞とか、そういうところから着想を得て、次の年から新しい山口縞というのを創作するために、糸からオリジナルを織りました。そしてそのもんぺに「mompekkko」という愛称をつけまして、開発してまいりました。

これは2015年ですね。ずっと昭恵夫人は我々が開発したもののモデルとして出ていただきました。また安倍晋三先生にも来ていただき、ラポールゆやで行われたファッションショーで、モンペッコをプレゼントさせていただきました。履いていただけたでしょうか。

これは普通農業するときに早乙女の儀式があったりしますが、新しいデザインをして舞台の上で共同でやって、まさに農業文化の新しい形を提示したものです。今日の展示会のディレクターをしております下川まつゑさんのデザインでございます。

今日、コンサートに参加していただく、DOZAN11 aka 三木道三さんと呼ばせていただくわけなんです、このときに既にモデルとして、そしてコンサートのシンガーとして出演していただいたものでございます。このときのmompekkkoはプリント地です。実験的にDOZAN11さんが開発された写真から作曲をするソフトを開発され、その発表会に行かせていただきました。その方法からこのテキスタイルをデザインするというチャレンジをしたものです。

これは同じ2017年に、ハワイ島のマウイカレッジの皆さん、今日また学生さんやスタッフの先生方やいろいろな関係者の方が来ていただいております。

ども、それとそれからフィンランドの国立ラップランド大学からも招きまして、一緒にファッションショーとか展覧会をさせていただいたものです。

これは2018年です。昭恵夫人が着ていただいているものは、先ほどDOZAN11さんが開発されたソフトを使って、その弟さんの三木学さんという色研究の第一人者の方がいらっしゃって、その方にヘルプしていただきまして、一枚物の布を使ってデザインしたものでございます。

これはモンペッコ、サロペッコ、ツナギッコということで、みんな何たらっこってつくんですけども、ちょっとマリメッコのパクリっていうふうにいる人もいますけれども、すみません。ひょっとしてそうかもしれません。ここにまた新しくスモクッコという、何でも上手に何たらっこってなるのですね。ということで、これはコスモという柄ですね。これは今日会場に来てくれている荒木麻耶さんがデザインを中心にやったんですけども、いろいろ販売してみると、やっぱりベーシックな細かい柄のパンツが一番売れるというアンケート結果が出ております。

こういうキーワードでいろんな活動をやった方がいいわけですけども、初めて、図の赤いところを私が長年取り組んできた地域なんですけれども、下関に初めて今日こういった開催をさせていただくことになって、本当に歴史の一步だと思っております。

陸の文化からの着想ということで、こういう活動をしてきたわけでございますけれども、そこから海へと進出いたしました、これは後畑の棚田、長門市ですけど、初めて、ずっとこういうのがしたいと、昭恵夫人と一緒に言っていたのですけれども、コスモス畑で、後ろが海が見えておりまして、本当に自然の中でのファッションショーをさせていただいたものでございます。先ほど言ったのが、このBGAP構想の源になった気仙沼の話ですね。

2020年に、やはり新型コロナウイルスの蔓延がありまして、規模を縮小したりいろんなことで断念したりということもありましたが、現在まで毎年続けております。2020年のテーマが陸と海と結婚ということで、先ほど柳居俊学議長が周防大島の話を読まれたんですけども、そのアワサンゴに着想を得まして、アワサンゴは夏には赤色に、冬にはグリーンになるということで、そういった季節によって色彩を変えるサンゴの視覚的特徴をウェディングドレスで

表現しました。

その延長で、これは周防大島高校のために、そして現在は地域の皆様、それから海外に行った、あるいはこちらに来ていただいたとき用に着用されています。このアワサンゴのいる海の中に浮かぶミカンの花なんですけれども、このデザインを私がさせていただきまして、これが今商品化されて周防大島で販売されています。

これはピーチクリーンをさせていただいたときに落ちていたカキパイプで、これは広島県から流れてくるんです。瀬戸内海側の山口県には随分流れ着いていて、防府の野島にも流れ着いています。それらを使った作品です。

昨年、陸と海とウェルビーイング、幸せは手仕事に宿るということで、シンポジウムと展覧会をさせていただきました。

これは、昭恵夫人のお友達でいらっしゃるデヴィッド・ロックフェラー・ジュニアと奥様のスーザン・ロックフェラーさんをお招きして、海洋環境問題についての海外から見た日本の課題と可能性、こういったものをまず基調プレゼンテーションでいただいているところです。

展覧会の様子ですね。一番奥の向かって右側の2着をちょっと見ていただけたらと思います。あれは私が企画プロデュースした海と陸の象徴するワンピースです。フィンランドで活躍している大田舞さんのデザインなんですけれども、ちょうどそれを、プロダクト的に作りましたので、実行委員会から、スーザンさんと昭恵夫人にプレゼントしたところでございます。昭恵夫人が今日着てくださっているのでもっと立っていただいてもよろしいですか。（拍手）もう一回光が入りましたので。ありがとうございました。

そして、今日はちょっとお召しになっていただいているませんが、昨年私が開発しまして、もう一つのテーマ柄によるドレスということで、今日MCをしていただいている高松綾香さんが、去年の司会の際に来てくださったドレスのデザインも生まれました。

2023年度の2番目の取組といたしまして、「海のある周防大島とハワイの幸福、地域循環共生と再生型観光の視点から」というテーマで、ハワイ州政府観光局の日本支局長ミツエ・ヴァーレイさんをお招きしました。そして環境省からも佐々木真二郎様に来ていただきまして、パネルディスカッションをさ

せていただきました。

日本支局長とおっしゃるので、東京に在住かなと思ったら実はホノルルにお住まいということで、いろいろ企画の関係上、大変焦りましたけれども、政府観光局が自発的に来てくださりまして、大変ありがたい状況でございます。

そして、周防大島の町長が赤い服を着ていらっしゃいますけれども、町長はさっき御紹介したアロハシャツをいつも着てくださっているという、そんな状況でございます。

そして、本日のパネラーでいらっしゃいます長坂真護さんの作品を、今回、展示させていただいています。企画の話し合いの中で、昭恵夫人から安倍晋三先生が、実は真護さんのアトリエに行こうという創作をされたという話になって、それで晋三先生の作品も一緒に展示をさせていただくことになりました。後ほど皆さん休憩のとき、あるいはお帰りのときに、ぜひ作品を身近で見ていただけたらありがたいなと思っております。これは2人がコラボレーションして作られた作品ということですね。後ほど、ちょっと昭恵夫人と真護さんにコメントをいただきたいと思っておりますけれども。

(動画上映)

ということで、御覧いただきました。安倍晋三元総理のすばらしいクリエイターとしての姿も感じていただけたんじゃないかなと思います。ありがとうございます。これはちょっとBGAP、最後に前からBGAP大学構想とって、私たち何のためにこれ、もうずっとやっているんですが、カウントしましたら15回やっております、それでここに書いておりますように、山口の地域と世界をつないで国内外の環境に関する社会問題を、芸術や文化で解決するための実践事例やワークショップなどを通じて学習するという、そして地球の持続可能性を実現するために、海と陸の関わりを中心課題として学び、その価値を認識して、いかに行動に移していけるか、ここが重要なところで、我々がただしゃべってもいけなくて、皆様と一緒にどうやって行動に移せるか、ここがポイントになっております。

そして、その行動の中で我々はどうのような幸福感を得て、充実した生活を過ごせるかなどの指針を得ること。これはウェルビーイングという概念を先ほどから紹介しているところですね。上記内容は、BGAPの5年間で実践目標としてきたことございまして、講師陣は今までに登壇されたパネラーやそ

の他の専門家、BGAP大学修了の資格をオーソライズするものにしていきたいと、夢を持っておりまして、まずはBGAPクラブに登録をお願いしますということでございます。

御清聴どうもありがとうございました。(拍手)

失礼いたしました。自分の発表が終わったらさっさと帰ろうとしておりましたが、ここで展覧会に参加された皆さんを御紹介したいと思っておりますので、皆さんこの上に上がっていただきたいと思います。

今回、展覧会をさせていただきましたけれども、そのメインで展示をしていただいています。改めて、長坂真護さんでいらっしゃいます。(拍手)

そして、ライトモードアーティストの柏原エリナさんでいらっしゃいます。(拍手)

そして、創作をやられたハワイのマリア・ラズウティMaria Razzauti先生。以下、学生の皆さんでございます。(拍手)

そして、こちらに山口ファッション&テキスタイル研究所の、全員今日は来れていないんですけども、その3人でございます。(拍手)

次は山口企画デザイン研究所の、お若い二人でございます。ありがとうございます。(拍手)

そしてマヴェリックさんです。入ってすぐの展示をされている。環境問題に新しい開発をされて、将来大変なことになるかもしれない可能性をはらんだ研究でございまして、それに関わっていらっしゃるお二人でございます。ありがとうございます。(拍手)

先ほどビデオと写真などで、晋三先生のアーティストとしての側面を御紹介させていただきましたけれども、ちょっと一言だけでもコメントをいただけますか。

○安倍昭恵 ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP会長 そうですね。すばらしい活動をしているのを、主人に紹介したいなと思ってアトリエに、最初、個展、展覧会に行ってもらって、その後、制作を一緒にという話をいただいたので、主人と一緒に行って作らせていただきましたけれども、こういう一面があるんだなというのを、なんか私はすごく、主人の新しい面を見たなっていうふうに思っていました。真護さんはどう思ったかしらね。

○長坂真護 美術家 初めまして、美術家の長坂真護と申します。こんにちは。(拍手)

僕の作品も後で紹介しますが、晋三さんの夏休

みという作品がそこに展示してあって、改めてアートは偉大で尊いなと思ったのは、残忍なことがあって、不幸があったのですけれども、それでもあの絵は晋三さんの肉筆が描いた絵が、今もなおあそこで輝いていると思うと、本当に一緒にいたあのときの思い出もよみがえりますし、皆さんにそのアートを提供できるということは、あのとき晋三さんに描き方を、手ほどきさせていただいて本当によかったなとしみじみ思っております。今日は、この後でプレゼンテーションをやらせてもらいますので、よろしくお願いします。（拍手）

- 水谷由美子 ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP実行委員長 突然の振りですみませんでした。ありがとうございます（写真2）。



写真2 展覧会出展者による集合写真

Ⅲ シンポジウム 「海と陸とアップサイクル The Sea, Land and Upcycling」

- 司会 高松綾香 皆様、大変お待たせいたしました。ただいまからシンポジウム、海と陸とアップサイクルを開始いたします。

まず、パネルディスカッションに先立ちまして、本日御参加いただきますパネラーの皆様に順次、御発表いただきます。

では、始めにアーティストの長坂真護様の発表です。テーマは、「サステナブル・キャピタリズム 輝かないものはこの世にない」です。それでは、長坂様どうぞよろしくお願いいたします。

- パネラー 長坂真護 皆さん、こんにちは。美術家の長坂真護です（写真3）。僕も山口、下関、初めてです。初めての機会を与えてくださった昭恵さん、水谷先生、本当に今日はありがとうございます。（拍手）

プレゼンテーションに移る前に、今回ちょっとお

持ちできなかったんですけども、この作品、さっき晋三さんが描いていた、僕と一緒に描いていた作品で、さっき解説で二人で描いていたとおっしゃっていたのですけれども、実は三人で描いています。

最後の真ん中の赤紫になっている部分は、昭恵さんが施してくれました。なので、将来僕がピカソ以上に有名になれば、国宝級の、今お二人にまだ劣っていますんで、僕がこのまま頑張って、これから話すプレゼンで、僕がピカソ以上になるんですね。必ずこの作品は国宝級になると信じていますので、ぜひ皆さん、今度また美術館でお披露目できたらと思います。（拍手）

だからアートって本当にいいなと思って、やっぱり晋三さんと過ごしたスタジオの日々、すごく思い出されますし、あとはこうやって展示することによって、生前の記憶や、そして故人の思いというか、そういったものが今もなおキャンパスの上では鮮明に残っていると。それがやっぱり芸術の醍醐味であって、例えばパリのルーブル美術館に、いまだダビンチのモナリザの絵が真作として展示されている。それって全然劣化していなくて新鮮なものじゃないですか。そこでやっぱり僕も、アートに魅了されて、そして今日まで芸術活動をさせてもらっています。

この絵も、2年前の7月に起こった事件の後ですね、手が勝手に動いて描いた絵です。タイトルが、これは展示してあるんですけども、「春夏秋冬、そして天」という、ネズミのように見えるのは僕が描いた晋三さんです。日本の頂点の富士山から、パラパラ雨とか種をまいて、僕らの貢献人、僕らチルドレンの僕たちが、これからを担う、頑張れよと言っているような、そんなメッセージを僕が受信して、絵にして、そして昭恵さんの御自宅のほうに収めさせていただいた絵です。今日はそれも特別に見られます



写真3 長坂真護 活動紹介

ので、ぜひこの後、見ていただければと思います。

それじゃあ、本題の「サステナブル・キャピタリズム 輝かないものはこの世にない」をさせていただきます。よろしくお願いします。（拍手）

皆さん、SDGsって知っていますか。SDGsって聞いたことありますか。もう7、8年前は誰も知らなかったのですけれども、サステナブル・キャピタリズムのサステナブルはSDGsのSです。サステナブルディベロップメントゴールズ、これ知っていますか。SDGsの訳。知っていますね。

キャピタリズムというのは、資本主義とか共創社会とか、僕らが豊かになったそのもののことを言います。それを合体して、サステナブル・キャピタリズムという概念を僕が考えてですね、今日になるまで提唱しています。

そんな僕が、もともと何をしていたか。僕は2009年から2015年まで、ただの路上の絵描きでした。世界中の15ヶ国を回って、ただ路上で一生懸命絵を描く。アメリカ、ヨーロッパ、いろんなところに行っていました。一枚も絵が売れない画家が何で世界中を旅できたか。

これ実は、僕は各国々の主要都市に行って買い付けのバイヤーをやっていました。例えば、ニューヨークに行ってiPadを買って、日本でヤフオクで売ると。パリに行ってルイビトンのバッグ買って、それを日本で売る。お金なかったんですけれども、そのせどりで世界での画家の活動、路上の画家の活動が実はできていたという裏の顔がありました。

今は、社会活動家として紹介されることも多いのですけれども、2015年11月13日、これも残忍な事件が起きました。パリ同時多発テロです。皆さん記憶にあると思います。

僕もこのパリのテロ後、すぐ行ったんですね。これなんですすぐ行ったか。社会活動のためじゃないんです。実は友達から電話があって、今パリでバイヤーがいなくなっているから、ビジネスチャンスだと。そう言われて、往復4万円のチケットを、日本からパリのチケットを買って、買い付けに行ったのが本心です。そんな自分が2015年8月に発表していたのが右手の女性の絵です。人を殺す、あやめる道具を、避妊具で避妊しているような絵なんですけれども、どちらも人をつくらなくて、当時テロリズムが横行していたので、「No War」、戦争反対という絵を発表していました。テロが起こる3か月前です。でもそれは、たった自分の安全な国の日本

でNo Warと言いながら、でも裏の顔ではテロが起こって、金もうけができると言って、自分がパリに行っている自分に気づいてしまったんですね。

そのパリのテロ現場を見て、数百の銃弾の痕が生々しく今もある、その当時あって、そして数千の花が手向けられ、そして、数千人の人が泣き崩れ、Pray for Parisと言ってお祈りをずっとしている姿を見て、そんな時代の背景と自分の生き方を照らし合わせて無力だと思いました。

人として、絵描きとして、もう絵を描けないやと思ったときに満月を見たんですね、パリで。そのとき何か月光に照らされて、心がふと和になった。

それで気づいたのが、戦争反対なんて自分にできるはずない。自分は無力だ。でも、こうやって出会った人の前で平和な月の光をこんなもんだと伝えることはできるな、こんな自分でもというので、戦争反対の画家から平和を祈る画家に変わっていきました。

このとき、神様がほほ笑んでくれました。さっきのSDGsのSの字を学ぶことができたんですね。今日は、皆さん、サステナブルって、よく正直分かっていない方が多いと思うんです。すごい実は簡単な概念です。今から説明します。たった3つ覚えるだけでいいです。

僕が買い付けをしているときに、隣にきたロサンゼルス人のアシュリーという友達ができました。

「何やってるの、LAで」って話を聞いたら、彼女はこう言ったんです。「LAでサステナブルビジネスをやっている」と。2015年12月31日、初めて自分にサステナブルという言葉が入ってきました。SDGsのSです。「アシュリー、それって何なの」。「私は、オーガニック化粧品を売っているんだ」と。「じゃ、オーガニック化粧品を肌にいいプロダクトをつくるのがサステナブルなの」と聞いたら、全然違うと。

彼女はこう言いました。「サステナブルは3つのコンセプトです。簡単です。文化の提供、経済の提供、そして、環境の提供を同軸でやってしまうことがサステナブルなんだ」と、アシュリーはそう言いました。

アシュリーにとってのカルチャーは、オーガニックヘルシークラブをつくることです。今回のBGAPのコミュニティそのもののことを指します。

そして、そこで得られた情報からつくり出すオーガニックプロダクツ、オーガニック化粧品。ここが

らが目にうろこでした。

彼女は、こう言ったんです。「オーガニック化粧品が、売れば売れるほど何が起これると思う」と言われたんです。「お金がもうかるよね」。「違う甘い。オーガニック化粧品が売れば売れるほど、農業に汚染された地域を地球上から一つずつ減らす」と言ったんです。

ええ、お金稼ぎして、自分がブランドやって、地球がきれいになっていいんだ。そんな概念が今ある。「何言ってるの、真護君。LAでは、この概念を取り入れた企業家しか今は成功していないの」。そう聞いて、僕はもう感動して、マゴ・クリエーション、サステナブル・クリエーティング・カンパニー、マゴ・クリエーションという会社を何やるかも決めずに、勝手に2016年につくってしまいました。

もう何をじゃあ、自分は何やっているんだ。何も分からず1年進んでしまったときに、またここで、世界中の電子機器のごみが集まるガーナという国の情報のニュースが入ってきてしまいました。

どうぞ、この動画を見てください。

(動画上映)

御視聴ありがとうございます。スチール・ア・ブラック・スター映画の短編を出させていただきました。ありがとうございます。(拍手)

衝撃が走りました。あんなに豊かに僕たちを支えてくれた資本主義、そして、僕が世界中旅することを許してくれた転売による利益、その消費活動の全てが、この国の若者たちがたった1日5ドルで、1日働いて、それで毒ガスを吸って死んでしまう街というものを発見してしまったんです。

悔しかったです。僕どうにかして、当時、お金は、貯金20万円しかなかったです。でも、何とかしてアートの力を使って、この状況を変えたいと心から願ったときに、天からサステナブルとアートの神様が下りてきてくれました。

あのアシュリーの言葉を思い出したんです。自分にとってのカルチャー、この街を救いたい、自分にとってのカルチャー、アートがあるじゃないかと。そして、自分にとっての経済圏で何だろう。つくったアートをみんなに売ればいいんだ。そして、僕が現地を掃除して、それをアートにして売れば、僕の何が起これるか。スラムからごみ減るよね。

アシュリーに電話しました。「これってサステナブル」って聞いたら、「コングラッチュレーションズ、ジス・イズ・サステナブル」と言ってくれまし

た。

そして、このアイデアから生まれた、この1枚の絵画、もちろんごみからできています。材料費1万円でできました。デビューの個展で、何と1,500万円で販売することができました。ありがとうございます。(拍手)

そういう僕の怒濤の恩返しが始まります。毎日、ムーンタワーというムーンフェスティバルというフェスティバルを開催したり、そして、無料の学校、あとは1,000個のガスマスクの提供、そして、リサイクル工場アートギャラリーを現地に造ることができました。

その影響は、貧困国以外に僕たちにも反響が大きく得られました。アメリカで個展をやったり、あとは上野の森ミュージアムというミュージアムで、その年10万人動員しまして、そして、あのサステナブルアートのアイデアで30億円アートを販売することができました。すごいです。原価1万円のアートが30億円で売れた。

実はCIDという経営診断、うちの会社、たった6期目だったんですけど、出してみました。そこで、我々その他小売業の会社なんですからけれども、何と5万2,000社登録している中、うちの会社が1位だったんですね、経営界1位をとることができました。ありがとうございます。(拍手)

だから、慈善事業ってお金もうからない。サステナブル、SDGsって心でやるものだからって皆さん思いがちなんですけれども、これからの時代、しっかり数字でも数を稼げる、利益を出せることをここで証明することができました。

そして、この利益をもって1億円スラムに出資させていただきました。マゴモーターズという会社をつくりました。

その新規事業を発表します。1つはリサイクル事業です。僕と同じようなことを始めました。みんな掃除して、それをつくったチップで、こういう建材をつくりたい。僕が今日つけているネックレスをつくったり、こういうものがつくられればつくられるほど雇用が生まれて、ごみが減る。そういう新規事業をつくりました。

そして、ガスを吸ってCO₂を吸収して酸素をつくる事業をやろうということで、モリンガのお茶を4,000本植えまして、農家さんもスラムから選定しましてモリンガファームもつくりました。これも来週、阪急梅田で発売されます。

そして、マゴモーターズの所以だった電気自動車、先進的な技術を彼らにプレゼントしたい、後進的なものばかりやらせたくないという気持ちで電気自動車の会社をつくって、来年この電気自動車の車をガーナに走らせる予定で進めています。

そして、これが最後のプロジェクト、今回の海トリックのサイクロンにもひもづいてくるんです。残念ながら2022年スラムから15分ぐらい歩いた場所に大量の寄附、先進国が寄附した服の墓場をたまたま発見してしまいました。

これは、僕が撮った写真です。そして、僕はこれを掃除しよう、そう決めてビーチボーイズという部署をつくって、5名社員を増やしまして、毎日通いながら掃除してもらいました。

ここで起こる大きな問題があります。我々が掃除すると、僕たちの倉庫がいっぱいになっちゃいます。それを解決するために、また日本の技術、炭化装置を導入しまして、今まで回収したごみを200分の1にする装置というものも工場に設置しました。

そして、僕はこの衝動を得て、「真実の海」という作品も制作させてもらいました。

そんな中、2020年に撮った写真です。そして先日、海に行って、僕、同じ画角で写真撮りました。どこまできれいになったか、皆さんにもお見せします。スリー、ツー、ワン。ここまできれいになりました。(拍手) ありがとうございます。

今までこの2年取った量は2,000トン。掃除してそれを圧縮して10トンのカーボンに変えました。そのカーボンを混ぜてつくったのが、このコンクリートブロックです。

そして、皆さんにいつもこう説明するんです。炭化装置って何、カーボンって何。カーボンというのは、鉛筆とかダイヤモンドと同じ素材なんだっていつも説明しているときに、ふと思ったんです。もし、あの寄附されたアパレルごみを掃除して、それから、もしダイヤモンドが本当にできるのであればものすごいことなんじゃないか。僕は1年前に思いついて、そこからいろんな会社に当たって、実は今日持ってきているものがあります(写真4)。

見えるかな。じゃあ、ちょっと開けてみますね。見えましたか。反射しているかな。これダイヤモンド、0.5カラット、この海ごみからつくりました。(拍手) ありがとうございます。

輝かないものなんてないんです。ダイヤモンドできました。これ本当に完全に100%、あの海のごみ



写真4 ゴミからできたダイヤモンド

から、寄附されたものからできたものです。ありがとうございます。

そして、スラムに戻ります。ここに代表的なごみ山があります。大きなごみ山です。今の社会の裏問題です。このごみ山計算すると、40メートル掛ける40メートル掛ける40メートルの立方体です。掛け算すると1万2,800トンのごみ山ですね。

これをさっきの炭化装置にかけて24時間運転すると、計算すると100年でごみ山はなくなります。じゃあ100台買えばいいんじゃないの。100台買えば、たった1年でスラムのごみ山はなくせるってことが分かったんです。つまりスラムは、なくせないものじゃなかったんですね。僕たちが見過ごしてなかったものなんです。

僕が、このスラム掃除チームを政府にこんなプレゼンテーションしています。

2030年、このスラムにサステナブルなきれいなまちづくりさせてください。僕らマゴモーターにみんなさせてください。そこにはあの建材をつくったミュージアム、そして、みんなで踊るこういうシアター、そして学校、あとは無料のホスピタル、全部僕らのアートの売上げ、さっき言った30億円の金額でやりますと。そういうプレゼンテーションをしてサッカークラブもつくる、そういうプレゼンテーションをしたときに、ガーナの環境大臣、ガーナの教育大臣のプレゼンテーションがもう終わっています。そして、アクラ初の女性首相、小池百合子さんみたいな方にプレゼンテーションをしたら、全員が涙を浮かべて賛同して、我々の会社にまちづくりの許可を下ろすという、そういうところまで今こぎ着けることができました。

もう皆さん想像できると思います。このガーナの黒い国旗、これ1957年、ガーナが独立した際に、ま

だ独立できていない、僕たちの星はまだ輝いていないんだっていう意味で、皮肉の意味を込めて黒い星をデザインしたんです。

でも、あのダイヤモンドのように僕らが努力すれば、どんなにごみや汚いと言われていたものでも磨き上げて、努力の結晶があれば、必ず先ほどのダイヤモンドのように必ず輝くんだと。そういうことがもうできるのです。

僕ら、我々の手によって、2030年に向けて、我々10億円投資します。世界人類初のスラムの告別を日本人の我々がやる。そして、コレクターのみんなの応援でやる。我々がスラムをなくす人類初のことをやってのけます。

僕は、絶対あと数年後、ノーベル平和賞を取ります。（拍手）ぜひ、そのとき、昭恵さんの持っている絵は、もう1億円とか10億円とか、ピカソを超えた、さっき言ったピカソを超えて有名になって、晋三さんと昭恵さんとこれつくったあの子の国宝級の、国の宝に変えていきますので、これからはぜひ僕たちマゴモーターズの応援をよろしくお願いいたします。

今日は、最後まで聞いていただいて誠にありがとうございました。（拍手）

○司会 高松綾香 続きまして、ライトモードアーティスト、柏原エリナ様の発表です。テーマは、「海洋プラスチック問題に光を当てる」です。それでは、柏原様、どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○パネラー 柏原エリナ いやあ、ちょっとすばらしかったですよね。本当に感動しました。長坂君のアートを武器にして世界を変えていくっていう、そういう心に、心からエールを送りたいと思います。

ここからちょっと規模が変わってしまうので、皆さんちょっとテンションを下げるのが大変だと思う

ので、今すごいホームランバッターが、大谷君のようなホームランバッターが打った後みたいな感じになっていますけれども、ぜひ続けてよろしくお願いします（写真5）。

私は、1985年から空間演出とか環境デザインなどのクリエーションをデザイナー、アーティストとして行ってきました。また、ライトアーティストとして、美術館や科学館で光の作品を発表してきました。

特に、LEDが開発されてから入手ができるようになった1990年頃からは、その特性の熱を持たない、それから、電圧が低くて電池で点灯することができる光を使って、身にまとう光のアートというのをつくってきました。その後、幾つかの大学で発表したりとか、光の演出や光造形という事業を行ってきました。

そんな中で、2019年にバンクーバーでの海洋プラスチック問題をテーマにしたファッションショーに出品しました。このことをきっかけに環境問題という社会的問題を作品に取り組みようになりました。

そのことによって発表の場所も変わりましたし、美術館やギャラリーに足を運ばないような方々にも作品を見ていただく機会が増えました。

本日は、その活動を御紹介して、今感じていることをお伝えしたいと思います。すごくちょっとローカルな話なんですけれども、ぜひ。

この写真は、会場のエントランスホールに展示させていただいている作品なんですけれども、バンクーバーで出品する海にプラスチックごみを食べた光るクラゲというイメージとして作品をつくって持って来ました。

このように光を組み合わせた作品は、くしくも海洋プラスチック問題に光を当てたいと考えるような自治体などの意図とリンクをして、様々な場所で展示されて、普段そのような関係や関心がない人々も光で引き寄せることになりました。

このような私の従来の身にまとう光の作品は、こういうイベントや国内では企業の販売促進イベントや大型のイルミネーションのオープニングの点灯式なんかに使われて、提供してきました。

そして、海外では、アート系のファッションショー、特にテクノロジーアートのファッションショーとか、ガラスアートのファッションショーなどで発表してきました。

始まりは、コロナ禍のちょっと前だったんですね。2018年にアートディレクターのキャサリン・ロー



写真5 柏原エリナ 活動紹介

レスという人から、2019年7月にカナダのバンクーバーで「海洋プラスチック問題からごみを考える」、海洋プラスチック問題をテーマにしたイベントを考えていて、その中でファッション産業の観点からごみ問題を考えるきっかけになるようなファッションショーを企画しています。興味ありますかと聞かれたんですね。それが、その後、様々な流れをつくって、本日この場所で、そして、長坂君のような方にお目にかかるような始まりでした。「Future Oceans」という海洋プラスチックゴミを問題点にしたファッションショーでした。

そのときには、世界中の人から応募された10人のデザイナーが選ばれて、私が日本から出品しました。

このテーマを与えられて、考え始めたときに、世界はエコロジー、エシカル、サステナブル、SDGsという地球環境への関心がすごく高まっているときでした。

そこで今までのように、個人のレベルで生活環境の中で見直すだけでなく、一歩進めて制作する作品とかを、教えている大学でも、この流れを取り組んでいこうというふうに思いました。

それは、私たちの世代だけでなく、これからバトンをつなげていく新しい世代にも考えてほしいテーマだなと思ったからです。

そこで、当時教えていた桜美林大学の芸術学部の関係者に相談して、デザインプロジェクトという、学校では普通、学内での発表が多いのですが、産学連携で学外でも活動や発表ができる授業に取り込んでいただいて、学生たちと一緒に春先の湘南海岸でクリーンアップ活動をしました。

一見、ごみなどあんまりないように見えるようなきれいな海岸だったのですけれども総勢6人ぐらいで、キャンペーンに参加した一般の人たちと一緒にごみを集めたら、こんなに大量にありました。

それは、春先で穏やかな日の光を浴びた海の中では、一体どんなことが起こっているのだろうとちょっと考えるのが恐ろしいことを想像するような大変な量でした。

授業では、SDGsや海洋プラスチック問題などを調べながら、出品作品をみんなでディスカッションして、制作方法とかを考えて、海洋生物の中では、クラゲには海水を浄化する能力を持っているものがあつたりとか、自ら分裂してコピーをつくって増加したりとか、不老不死と言われるものがあるということ調べたので、そこで、クラゲをモチーフにし

て、そのミステリアスな存在で未来の海のために貢献してくれるということを期待して、未来的な光のドレスにしようと決めました。

また、プラスチックごみ問題をアピールするために、プラスチックごみを食べたクラゲということでイメージをつくって、このように制作して、よく見ると分かると思うんですけども、ハイブリッドカーやリサイクルペットボトルを、装飾的に使っていて、光の入っているクラゲが放浪しています。

このショーは、主催はオーシャン・レガシー・ファンデーションという海洋プラスチックごみ問題に対処することを目的にしたバンクーバーの非営利団体でした。

日本にも、JEAN—ジャパン・エンバイロンメンタル・アクション・ネットワークという海岸のクリーンアップ活動をする一般社団法人があります。私たちは、このJEAN主催の湘南海岸のクリーンアップイベントに参加しました。

そこのマリーナは、すごく大きくて、富裕層が使っているんですけども、ここの普通の富裕層にアピールして、周辺の海をクリーンアップする費用を寄附してもらうということが目的のファッションショーでした。

ランウエーは、こういう大きなボートの並ぶ桟橋のランウエーで、私はこの3点をみんなの代表で持って行って、プロのモデルさんが着た作品を見て、学生たちはすごく喜んでいました。

これは、海外のほかのデザイナーの作品で、漁網とかを使ったドレスなんですね。そのときに海外のSDGsの取組とかクリエイターの取組など、いろいろ情報を交換させていただきました。

その後、戻ってきてからは、町田市市の市庁舎でエコフェスタに参加させてもらったり、展示をこういうふうに市庁舎の中でさせていただきました。本当にローカルです。

そして、そういう活動が安倍昭恵夫人にも伝わりまして、昭恵夫人が身につけてくださるということで、ペットボトルとプラごみのアクセサリをつくって、昨日もずっとつけてくださって、今日もつけてくださって、ありがとうございます。

そうして、その後、大学ではずっと次の世代に伝えるためにSDGsやサステナブルをテーマにして、幾つもの自治体と協力して、毎年様々な場所でアート作品とともにこの作品を伝える活動をしてきました。

例えば、2021年には、町田市の放置竹林問題を取り上げて、その竹を使って光るオブジェをつくって公園に設置してパフォーマンスをして、公園に何気なく訪れた人たちに、そういう意図を伝えて、それまで見たことがないような竹のオブジェとかパフォーマンスを見ていただきました。

また、2022年には、大学のある町田市の近郊の8都市連携海洋プラスチックごみキャンペーンに参加することになりました。

町田市は、海に面していないのですけれども、我々の家庭から出たプラスチックごみが海につながっていることを皆さんに知っていただきたいということで協力を依頼されました。

私たちの家庭のごみから出たごみが、海岸から海に流れ着いて、その先にクレジットカード1枚分ぐらいの約5グラムのマイクロプラスチックを毎週私たちは食べているという事実、学生たちがすごく驚いて、そのことを伝えようと、ちょっとスライドの上のほうに小さく出ています。1枚、上のほうにちょっとだけ小さく見えていると思うのですけれども、クレジットカードサイズの分を毎週食べているんだということを伝えてきました。

そういうことで、8都市の連携に参加したことで、今年は3月に横浜トリエンナーレという大きなアートイベントがあったんですけれども、そこでオープニングのイベントに電灯ワークショップで参加しました。

これは、横浜市の資源環境局というところの協力で、横浜市の港湾局の協力もいただいて、横浜港で回収されたごみの中から流木とか発泡スチロールを使って会場をつくりました。

一見すると大きくて美しい海ですけれども、そこの中には人類の負の遺産がいっぱいあるんだなということを、子供たちにも理解してもらって、海から回収されたごみを使って、未来に美しい海を取り戻したいということで海の生き物をつくるワークショップをしました。

会場は、龍宮城のイメージの空間で、乙姫と流木の魚と亀がいて、クラゲが漂っているみたいな、それが青い光の会場になっています。そこで、それはたくさんの生き物が、その未来の海を取り戻そうとか、想像しようということで、その中で子供たちと流木で魚や亀をつくりました。

現在では、川崎市の環境局生活環境廃棄物政策さんと、11月3日に開催される川崎祭で、やっぱりリ

サイクル資源のワークショップをしています。だから、毎回ごみをあさりに行っているようなんですけれども、これもちゃんとしたアート活動だと思って、頑張ってみなと一緒にやっています。

2019年のそのフューチャー・オーシャンズというファッションショーに参加したということは、その後、様々に考えを変えることになりました。

これまでは、作品を完成させるまでというのは、無駄も多く出て、残った材料とか試作とか、実験材料とかの廃材が結構気になってはいたんですね。再利用したいと思っていたので、その素材をキープしていたら、膨大な量にもなっていたんですけれども、世の中では環境問題とかエコロジーとかサステナブルという風潮が生まれていて、何とかそれに近づけたいと思うんですけれども、それまでの私の作品は、そういうものをうまく取り組むようなことが個人ではできていなかったんですが、大学の協力を得て、そういう活動ができるようになりました。

そして、こういう突然与えられた環境問題の作品のテーマに取り組む機会は、素材を見直すことでもあるし、リサイクル素材を活用するということは同じ素材を扱うという意味では、素材のいいところを見つけるという同じ取組方というか、作品の制作とつながるものがあるのだなということで、今まで考えていなかったような制作も続けていけることができました。

そして、廃棄物、自分の家にもいっぱいあるのですけれども、作品の残骸とかが、また違った意味で私の目に見えるようになりました。

ごみ問題とか、そういうものを扱った作品をつくり、発表するということは、今までギャラリーとか美術館になかなか来られなかった、そういう作品とは違って、日常生活の中で、その存在をアピールすることができて、多くの人に伝えることができる。アート、本当にさっきも長坂君が言っていたみたいに、アートがもつ違う新しい力を見せてもらった気がします。

そして、自治体からたくさん御依頼やお誘いがあるんですけれども、それは多分、環境問題に取り組んで、いかに市民にそれを伝えていくかということを検討している人たちにとって、私たちの分かりやすいデザインされたパネル表現とか、不思議で人を呼び寄せるような、ほかにはない光の作品が新鮮な要求として求められているんじゃないかなと思っています。

そして、光というのは、私にとってはメディアなのですけれども、ただ光の作品であるということは、光源だったり電子部品だったり電源だったり、そういうものをさっき燃えて、材料を取ろうとしてみたいな、ああいう問題があるものではあるんですけれども、100%エコロジカルとは言えないものなんですけれども、私は長くつくってきたので、その中で様々な素材がいろいろ開発されて進化してきたことを見てきたんですね。

それで、これからもテクノロジーの進化とか、皆さんの意識の中で、そういうことが解決されるような未来が来るということを期待しています。

その後、今でもやっぱり私にとって光は大切なメディアで要素です。環境問題とかごみ問題というカットから、ちょっと一見離れて見えるテーマでも、美しい光がその中に入ることによって、多くの人に興味を持ってもらって人を呼び寄せる力になるのかなと思ってつくっています。

その後、横浜港湾局とか川崎港湾局の御協力で、いろいろ流木を無償でトラック何台分とかって頂いているんですけれども、それでアクセサリーをつくっていて、今日、水谷先生もちょっとつけてくださっています流木のアクセサリーをつくったり、ほかには和紙やピンなどのナチュラルな素材でつくったり、作品も随分変化してきました。

SDGsやエシカルという概念が広がるとともに、地球環境問題は新しい時限へ展開しています。日常的にできるリデュース・リユース・リサイクル・リフューズのような生活角度を一步進めてアート力やデザイン力とするアップサイクルという試みも今回のテーマになっているように、皆さんが志していることだと思います。

これまでのリサイクル作品のレベルを飛躍させて、洗練された未来につながるようなデザインをするために、これらの問題解決を心がけている企業の方々や、それらを大きく動かしたいと考えていらっしゃる企業の方々と協力して我々個人ではできないことを進めていけたらいいなと思っています。

本日はありがとうございました。（拍手）

○司会 高松綾香 柏原エリナ様、ありがとうございました。（拍手）

それでは、続きまして、下関市立大学学長、韓昌完様の発表です。テーマは、「まちとその不確かな未来と教育・環境・芸術教育を中心に」です。

それでは、韓昌完学長、どうぞよろしく願ひい

たします。（拍手）

○パネラー 韓 昌完 こんにちは。ちょっと芸術と関係のない人間が、今日参加してしまったのですけれども、非常に勉強になりました。大学もこういった取組を取り入れて、教育、研究に活かさないといけないなというふうに思っております（写真6）。

昭恵さんの後援で今日参加するようになりました



写真6 韓昌完による発表

けれども、水谷先生、こういう機会をいただいて本当にありがとうございます。

「まちとその不確かな未来」というタイトルですけれども、私ちょっと村上春樹が好きで、村上春樹の小説のタイトルをちょっとパクりましたけれども、残念ながら、今年ノーベル文学賞見逃してしまいました。

私は、下関市立大学で、今学長をしております、下関市立大学は、今日いらっしゃった前田市長の公約に基づいて、今現在、総合大学化というのを進めております。来年4月には看護学部も設置されますので、3学部体制で、学生数が2,000名を超えまして、全国の公立大学が101ありますけれども、それで、その中で14番目の規模になります。

これからは、世界に向けていろいろ活躍しないといけないと思ったところで、今日、皆さんから、世界で活躍されている皆さんから、いろいろヒントをいただきましたので活かしていきたいというふうに思います。

今日、ちょっと下関のことを考えてみたいというふうに思っていますけれども、確かに1889年度に赤間関市という市で出発して、そのときには31個しか市がなかったわけなんですけれども、どんどん時代の流れとともに、昔中心だった下関からいろんなものが外に出てしましまして、今、未来どうなるのかという不安を掲げて市民の皆さんも考えていらっしゃると思うんですけれども、少子化・高齢化がどんど

ん進んでおりまして、それと産業構造も大分変化していきまして、昔強みだったものが、今は決して強みじゃない状態になっているという状況ですね。

気づいてしまえば、今は政府から出された資料の中に、今ここの辺にいますけれども、消滅の可能性が高いという市町村が、もうCまで行くともう消滅していきだろうというふうを考えられるんですけども、下関市はDに位置づけられまして、山口県の街って、ほぼ宇部市とか山口市とか周南市とか、あとお隣の北九州市も一緒ですね。下手すると下に消滅するかもしれないという自治体に落ちてしまうという可能性もある、そういう状況になっております。

例えば、萩市とかは、もう既に入っていますね、萩市とか美祢市とか長門市とかは、もう既に入っています、ちょっと憂鬱な話ですけども。

それで、ちょっと世界で似たような状況のある街はないのかなとちょっと調べたところ、フランスのナント市というところがありました。

ナント市が、結構、フランスの中では。この間、アメリカのニューヨークタイムズが山口市を2024年で一度行かないといけない世界52都市の3番目に選んだために、市内観光客増えていました。ニューヨークタイム誌が、世界で1番住みやすい街というのを1位に選んだのはフランスの中でも上位にいつもランクされているナント市みたいです。

この街って、実は産業構造の変化とかを伴って、一度ものすごく衰退してしまったんですね。これが、こういう形がちょっとあんまり見づらいですけども、ちょっと私、日頃大学にいるもんですから、学問の世界では、こういうスライドが一般的ですけども、今日は全然目立ちますね、このスライドって。みんな映像とか、いろいろ流していますから、ちょっと目立ちますけれども、ナント市は発展していましたね。産業が発展していった、産業構造が変化しますよね。アメリカもそういう街っていっぱいありまして、例えば、デトロイトは自動車産業が発展していて、それが衰退していくと街も一緒に衰退していくという、そういう例が世界中にいっぱいあるんです。それで1回衰退した街が回復していくということがなかなかないんですよ。難しいんですよ、1回衰退してしまうと。

皆さん方、下関市民の皆さんは、御存じだと思うんですけども、下関市は昔すごかったんですよ。そういった時代があって、でも結局、ナント市も一緒だったんですよ。お隣の街にどんどん、その機能

が移転してしまったんですね。

下関もそういう痛い過去がありますよね。いろんなものが福岡に行っちゃって。結局、つつい出てしまっ、今の下関の衰退というふうになってきているわけなんですけれども、それでナント市はどうしたのかというと、芸術と文化と教育で街をもう一回復興させようという取組を始めました。

それで、どうなったのかというと、今はほんと上がってきているわけなんですけれども、先ほど壮大な地球規模のガーナのプロジェクト、今もう30代でされているというのを見て、私は30代何したのかといたら大学院生でした。一生懸命論文書いていたけれども、もうしっかり既に世界で活躍しているのを見て、今の世の中って、活躍の舞台が広がっているなというふうに思ったのですけれども。ナント市は、そこまでじゃないんですが、街の中を芸術と文化、それと観光、あとレジャー、スポーツ、それと、レストラン、こういったものをどんどん整備していく「緑の島」という再生プロジェクトを始めたということなんです、下関も、あるかば一とか江戸エリアとか、そういった観光に力を入れ始めていまして、プランを立てて今積極的にやっておりますけれども、もっとナント市は本格的にそういうプロジェクトをやったという事例になります。

このときに、教育がとても大事にされていたんですが、皆さん、承知だと思うんですけども、長州藩が日本の歴史を変えたという歴史がありますけれども、どこから始まったのかというと、やっぱり教育から始まったわけですね。

言われてみれば、後から話が出ますけれども、今、文科省とか国は、18歳人口が、2040年には80万を切りますから、それをどう埋めるかということで、外国人留学生を入れなさいとか、それと労働人口の10%が学び直して大学に戻れば、それが70万であると。だから大学の今定員が66万人ぐらいですから、リカレント教育を積極的にやれば大学の危機は乗り越えられるよとか、この間つい最近、学長会議が東北でありましたけれども、文科省から言われましたけれども、なかなかそんな簡単な問題ではないのです。確かに今、先ほどA Iの話とかも出ましたけれども、そういった時代に、まだ学ばないといけないことっていっぱいあるわけですから、それは大学が提供するといえ、確かにそのとおりだと思うのですが、ナント市もその文化政策で、まず市民にそういった意識を持ってもらおうとって、積極的にそ

ういった市民に対する教育を実施してきたという経緯がありました。

それで、その中心になった人物が、文化を消費するだけではなくて、その文化に対して、議論して、参加して、新しくつくっていく、そういう市民を育てないといけないのですよねということを言って、教育がとっても大事であると。

ということで、このナント市に大学があるんですね。このナント国立建築大学という大学がありました。この大学を中心に何をしたのかというと、このプロジェクトを実施する中心にしてもらって、それと教育を積極的に行ってきたと、ということなんです。

どんな教育をしたのかというと芸術教育、それとそれを町の風景と建築物とか、様々なこととつなげて、市民に対する意識を高める、文化意識を高める教育を同時並行に行ってきたと。

そういうことで、都市再生の担い手が公的な教育機関で育てられているということとはとても大事であると。

ということで、実は本学もデータサイエンス学部と看護学部つくっていますけれども、将来的に今ITと農業を結びつけるという取組が世界的に、特に日本は農業、食べ物に関しては世界的な競争力を持っていますので、下関の農業とIT技術を本学のデータサイエンス学部と結びつけて、東南アジアからそういった方たちを農業に専念できるような方たちを受け入れて、地元と協力してやっていくという寄附講座をつくらうとして今プロジェクトを立ち上げる準備をしています。

これと、もう一つは観光ですね、観光を大学が中心になってやっていく。観光フォーラムとかを立ち上げてやっていくとか、そういったことも、市と、前田市長と協議しながら今進めている状況です。

これに加えて、芸術教育、環境教育というのをやっぱり大学が中心になってやっていかないといけないと思っています。実は、これ教育の大事さでちょっと入れましたけれど、皆さん最近のノーベル賞もどんどんユダヤ人が取っていますけれども、世界人口の0.2%しかいないユダヤ人がノーベル賞の受賞者の20%を示しています。あとアイビーリーグと言ってアメリカのとても優秀な大学の21%をユダヤ人が示していますけれども、この力って何ですかということなんですよ。教育を昔から、彼らずっと2000年近く迫害を受けてきたので、財産を築

いたら奪われる。財産をたくさん持ったとしても奪われるという中で、やっぱり持つべきものは何なのかということ、奪われないもの。これは知識しかない。それ教育だよねというので、ずっと教育にものすごい力を入れてきて、こういった人材を養成してきたと、ということなんですね。

最近、残念ながら、申し訳ないのですが、その教育に関する関心が薄れてきているというのがとても残念に思っていますし、今、日本の小中学校の教育が正直言って結構危機的な状況なんですね。

それが例えばヨーロッパとかだと、芸術教育とか、それと環境教育というのがとても中心になっていまして、とても私が参考になっているのは、専門的な教員をどんどん採用していったということなんです。要するに専門性を高めて教育の質を上げるということをやっているんですけど、皆さん御存じですよ。日本は今教員の担い手がどんどん減ってしまって、今度山口県は教員免許を持たなくても教壇に立つようにするというのを打ち出すぐらいですから、このまま行って大丈夫ですかということをやっぱり考えないといけないかなと。

世界各地では環境教育もとても力を入れていますので、今度日本の小中学校でも、こういった取組をやっていかないといけないなというふうに思いながら、つい3日前に学長会議で文科省から出された資料です。今、日本の教育現場の学生の1クラス35名だとしたら、どういう学生が今クラス形成されているのかを文科省がやっとな国が示してくれました。発達障害の可能性のある子、それとギフテッドと言って特定の分野で優れた才能を持っている子、それと不登校ぎみにある子、そういった子たちがどんどんクラスの中において、こういうので構成されているので、じゃあ、どうい教育を行えばいいですかという問題意識を国がもう提示するようになってきたと。私これは15年前から言っていますけれども、やっとなですね。

それで、教育がどう変わりますかといったときに、やっとな乗りました。これもうフィンランドとか、お隣の韓国も実施していますけれども、学生主体の教育をやらないといけないよねと、あと学年を関係なくやらないといけないよねとか、それと教室以外の選択肢とかもありますよねと。

先ほどドイツは幼稚園が日本語で言うと自然ガーデンみたいな、幼稚園の名前がガーデンなんですよ。要するにガーデンで遊ぶように教育をしましょうと

いうのをもうドイツではやっているのですが、そういった、いろんなところで、いろんな多様な形での教育を行っていいじゃないかということと、あと教師がコーチングをやらないといけないですよというのを文科省が言い出しました。だから多様な人材と社会と企業と民間といろんなところと協働して教育を行わないといけないですよと。

これは何で学長会議で出されたかという、こういった子たちが今度大学に入りますよという話なんです。だから大学もこういった子供たちに対する対応能力を高めないといけないですよという話なんです。だから、ああ、確かにそのとおりです。だけど今の大学はまだそういう体制になってないですね。だから、これも大学の課題ではあるというふうに思います。

いずれにしても都市の再生には、文化・芸術・教育というのは、もう本当に欠かせない重要なポイントであって、投資していかないとけないし、市の大学である下関市立大学も、そういった分野に様々な主体と連携を取りながら、今度取り組んでいきたいというふうに思います。

今日、真護さんは、長坂さんは、ちょっと今度うちの大学で、講演で、特別講演で呼びたいなというふうに思いまして、若者にどんどん士気を与えていただきたいなというふうに思いながら聞きました。

すみません。今日はもうこういう話になっちゃいましたけれども、ちょっと異質的な話だったかもしれません。

今日は本当にありがとうございました。（拍手）

○司会 高松綾香 韓昌完様、ありがとうございました。

では、ここからの進行は、モデレーターとして実行委員長の水谷由美子が務めてまいります。

それでは、水谷実行委員長、お願いいたします。

○モデレーター 水谷由美子 皆さん、大変長らくお付き合いいただいてありがとうございます。

本来なら時間になってきているんですけども、最後の締めのちょっとやっていきたいので、もうちょっとだけお付き合いをお願いしたいと思います（写真7）。

今、御発表いただきました韓学長は、出張の御予定がありまして席を外されましたけれども、よろしくお願いいたします。

それでは、今3人のプレゼンテーションを聞かれて、前田様、下関市長のお立場でコメントをいただ



写真7 シンポジウムの様子（左から水谷由美子、安倍昭恵、前田晋太郎、長坂真護、柏原エリナ）

きたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○コメンテーター 前田晋太郎 やっと出番が、（笑声）お待たせしました、市民の皆さん。（拍手）

と言いましても、私の顔はしょっちゅう皆さん見ていただいていますし、話も聞いていただいているので、今日は皆さんにとって非常に刺激のある、すばらしい時間になったのではないかな。時間が確かに、今、先生言われたように長くなったかもしれないけど、それも楽しくてね、あっという間だったということなんだろうと思います。

真護さんの活動は、実は、私、恥ずかしながら今日初めてお聞きしまして。しかし、世界を越えて、ガーナなんですよ。

○パネラー 長坂真護 そうですね。ガーナで。

○コメンテーター 前田晋太郎 ガーナをあそこまで盛り上げて、もう国レベルで。何か今、日本で大使とか、大使じゃないけれども、特命的な国から指示を受けたり、何もまだしてないんですか。ご自分の力で。

○パネラー 長坂真護 全くもうゼロから。もう資本もなかったんで、政府に頼らないのかみたいなこともすごく言われたんですけど、まず政府に頼る前に自分が頼られる存在にならないと、ね。（拍手）ありがとうございます。

○コメンテーター 前田晋太郎 すごいですね。

○パネラー 長坂真護 力量が合わないじゃないですか。だから、それまでは歯食いしばって、自分たちの内部のインナーマッスル鍛えるんだみたいな。そういうところに、この7年使ったって感じでした。

○コメンテーター 前田晋太郎 先ほどの話を一つ一つ着地させていけば、もう恐らくこれは世界初の、これまでも人類が見たことのないようなピースフルな事例になると思いますし、ぜひ、先ほど晋三先生の昭恵さんの絵もですね、5億、10億と言わず、本

当に価値のあるもの、ぜひ下関に置いていただきたいなと。

- パネラー 長坂真護 分かりました。
- コメンテーター 前田晋太郎 いろいろ連携をさせていただければなと。
- パネラー 長坂真護 ぜひ、はい。
- コメンテーター 前田晋太郎 今日御縁ですね。
- パネラー 長坂真護 ありがとうございます。
- コメンテーター 前田晋太郎 ありがとうございます。

下関は、今、環境に対して非常に力を入れております。よく自治体は、環境には力を入れていますよと。もう当たり前のように口にする市長はいっぱいいると思うんですが、本当に今下関は力を入れていて。実は今年ですね、脱炭素先行地域という、国が脱炭素の社会を実現してくれる自治体やる気があったら応援しますよという制度があるんですが、そこに手を挙げまして、非常に狭き門なんですけど、第5次選考、5回目の選考に手を挙げまして、36自治体が手を挙げたんですが、9個しか選ばれなかったんですが、そこに見事採択を受けました。（拍手）

これね、すばらしいニュースで、ただ、手、はい、はって手挙げていいわけじゃなくて、こういうことをやって下関を元気にしていきますよ、環境問題を改善していきますよという目標を掲げて、それをプレゼンして、国に認めてもらう——ちょっと話し過ぎですかね。いや、もうずっと待っていたんで、もう、（笑声）湧き出てくる。

- パネラー 長坂真護 いやもう、聞きたい、マニフェストを聞きたいです。下関の。
- コメンテーター 前田晋太郎 例えばですね、もうね、簡単に言うと、まず皆さん環境に何かプラスのことを自分がやっていこうということを、手を挙げてくれた人たちにポイントを出します。ポイント制度ね。このポイントがたまると、簡単に言うとちょっとプレゼントがある。要は目標を持ってもらう。みんなに。環境に対して。例えば電気を一つ小まめに消すこととか、こういう環境のイベントに参加をしてくれたら、ポイントがつかますよと。皆さんの要は自分の持っているカードにポイントがたまっていく。そういう、何か簡単にシンプルに言い過ぎて、ちょっと軽く感じてしまうかもしれないけど、これを全市民に、これを我々行政が主導してやっていく。

そして、また、電気会社の、今度、電力会社を下

関、今度春につくったんですよ。第三セクターで。下関も資本金を入れてですね。これどういうことかという、今、皆さんごみ袋、毎日ごみ捨てるでしょ。赤いごみ袋ね。どの家庭にも必ずあるんですよ。このごみ袋は奥山の焼却場に行って燃やしますね、行政がね。この熱を、燃やしたら熱が出ますけど、すごい熱が出るんだけど、実はこの熱を電気に我々は変えて中国電力に売却していたんです。大体3億円分ぐらいの電気があります。毎年ね。この3億円の利益をまた行政サービスに使っていたんだけど、これを先ほど言った電気会社買い取らせることにします。

これから、今から、クリーンな電気を風力発電とか太陽光とか、こういったものを全部買い取って、今度は皆さんに安く売するようなシステムをつくります。市民に。戦争が起きたときね、ウクライナで、電気代めちゃくちゃ上がったでしょ。めちゃくちゃ上がったんですよ、これ。中国電力。ああいう戦争でとか、地震とか、有事の際に、世の中が動いて変動すると、やっぱり電気とかエネルギーの価格って上がるんです。どうしても。これ仕方がないですけども。こういったものにも影響されないクリーンな電気を下関はずっとサステナブルに皆さんに提供する今仕組みをつくることにしました。

こういったことを続けていくことで、当然、下関市民の意識を変えたい。ごみを1つ誰かのために拾ったり、誰かのために草を抜いてあげたり、誰かのために隣のおばあちゃんに声をかけてあげて、みんなで声をかけあっていくような優しい気持ちでいられる下関市をつくっていくために、環境問題を改善していくというのは様々なところに影響が出ます。今日は時間が限られていますから、ざくっと話していますけれども、そういったことを応援する、皆さんにまたお力を借りながら、様々な新しいアイデアが生まれれば、私は積極的にコミットしていきたいなとも思っていますし、こんな感じですか。コメントになってないですかね、すみません。（笑声）

- モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。とにかく市民にとっては、下関市は優しいまちづくりを環境解決とともに実現されようと市長がしておられますから、ますます期待したいですね。ありがとうございます。

それでは、昭恵さんお願いします。

- コメンテーター 安倍昭恵 いや、本当、御2人のプレゼンはすばしかったですよね。もう少したく

さんの方に聞いていただきたいなというふうには思ったのですが。今日来てくださった皆さんは長い時間聞いていただいたので、ぜひ周りの方たちに、こういう活動をしている人がいるんだよということをお伝えいただければと思います。

私は人生で一番大事なことは御縁だというふうに思っていて、御縁をどういうふうに活かしていくかという。今日皆さんここにたまたまお声かけさせていただいて、時間があって来られて、この2人のお話を聞いたというの、すごい御縁の一つだというふうに思いますので、ぜひ、これを何かきっかけにして、自分なりの何か環境に取り組んでいただければうれしいと思います。

あのプレゼンだけ聞いていると、長坂真護ってすごい人だなと思うんですよ。でも彼は、すごくない時代にいろいろありまして、多分もう調べてネットで検索していただいたら、いろんな過去のことが出てくると思うのですが。でも、そんな中で、やっぱり、すごい強い思いで、今、話していてもですね、彼と、本当に前を向いて、人の悪口言ったりとか、そういうのも一切なく、自分がやりたいことだけをひたすらに追い求めていっているという、その姿がですね、やはり私はきっと周りの人たちもそれについていくし、きっと天とか神様もそれに向かって協力していくしという、あるべき姿を示してくれているのではないかなと思って、多くの若い人たちに彼を見習ってもらいたいなというふうに思っています。

エリナさんは、もともと光のアーティストだったということを私はすっかり忘れていて、この海洋ごみの、このブローチのことしか分かっていないぐらいだったんですけども、でも、やはり、そちらのほうにも導かれていったというの、何か大きなミッションを持っていらっしゃるんだと思いますし、その中でも大学生や子供たちが海洋ごみを拾ったりという地道な活動の中でいろんなことを感じていくというのがもう本当に大事なことだと思うので、ぜひ、また今日お集まりの皆さんと一緒にですね、学生や若い人たちと一緒に、そういう活動をさせていただければうれしい。こういうものを、海岸いっぱいありますから、ごみもいっぱいありますから、それを拾って、みんなで作ったりみたいなこともできたらいいなあなんて思いながら聞いておりました。

○モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます

た。

やはり、すごい御発表だったんだけど、翻って我々に置き換えて考えれば、今、昭恵夫人がおっしゃったように、個人の生活の中で、こういう環境をアートするといいますか、そういうことが大切なことじゃないかなと思います。

私、今、流木のブローチ、柏原先生のお作りになったものをつけさせていただいているのですが。流木などを材料にしているのだけでも、ものすごく洗練された造形で、感動させていただくような素敵なものだと思うんですね。

やっぱり環境問題というのは、身近な問題としては、そういう美を感じるとか、あるいは、共感を感じるとか、そういう行動に移していけるようなきっかけというのは、やっぱり感動がないと駄目だと思うんですね。美がないと駄目。だから、そういう意味で、今日はとても示唆深いお話をいっぱいいただいたんだと思います。

私もこのBGAPをずっと続けさせていただいて、作品制作を続けています。本当に素朴なものですが、私の作品「循環の風」というのを帰りに見てもらいたいです。私も一人の生活者として、身近なものに注目しました。サザエの蓋があるじゃないですか、あれにですね、ドライバーで、すごい強烈なドライバーで、穴を2つ開けました。穴さえあればボタンになるわけですね。じゃあ、その表面を安定させるためには、どうするのって。漆の大内塗の先生に指導をいただいて、それで人工の漆を上から塗らして、それで何とか持続可能なものになるということで、身近にあるごみというか、捨てるような物ですね、そういう物をもう一回見直していけば、何か新しい驚きとか、楽しさとか、そういうものが生まれてきます。

そういうことで、また皆さんと一緒にもっとボタン作りしましょうかみたいなワークショップもしたいようなところですけども、そんなようなふうに思います。

最後に、ちょっと時間がなくなったので、御一言ずついただいて締めていきたいと思います。

それじゃあ、柏原先生のほうからお願いします。

○パネラー 柏原エリナ 普段、私は東京の町田で活動しているのですが、この下関までごみと一緒に流れ着いたように（笑声）なっているんですけども、何がきっかけになるか分かりません。なので、私も学生たちやワークショップする子供たちに

何かのきっかけになればいいなと思いながら、いつもワークショップや作品発表をするようにしています。

皆さんにとっても、きっと何がきっかけになるかわからないと思いますので、ぜひ、水谷先生や昭恵さんのこういう活動に引き続き御協力いただければいいなと思います。ありがとうございました。（拍手）

○モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。長坂さん、お願いします。

○パネラー 長坂真護 今日本当に初めて下関に来て、初めての山口で、その案内が昭恵さんだったというの、すごく幸運で、初めましての皆さんと、そしてすごい前向きな皆さんが集まっているなと思うんですね。こういう得体の知れない僕たちの話を聞きに来てくれる時点で相当の先駆者であって、パイオニアだなんて本当に感じました。

そして、さっき市長がグリーンポイントカードみたいな、つくるんだということを言っていて、僕はこんなことをたくらんでいるんですけど、姉妹都市提携を結んで、うちの農園とですね。そしたらモリンガ農園4,000本やっているんですね。（「何を」と呼ぶ者あり）モリンガ。モリンガというのが、CO₂をほかの植物より50倍吸収するんですよ。かなりカーボンニュートラルになるんですね。それでポイントにしてもらえれば、多分ここのフグ全部食べられるんじゃないか。（笑声）それぐらい貢献していると思うんですね。

でも、それがコミュニティーだと思うんですね。さっき、うん。コミュニティーをつくって、みんな笑っているこの状態がコミュニティーなんです。

そして、これだけのCO₂を吸収した、削減した、認めてくださいという経済圏をつくって、そして、そのお金で、僕はフグ食べるのは冗談ですけど、また苗を増やして、その苗がまたCO₂を吸収して、カーボンニュートラルの世界をつくっていく。これが皆さんが大事にしているいわゆるコクリエーション。みんなでやるんだ。みんなで一つのことを目指してやっていくんだ。それは、無理なく、笑って。無理なく、ポイントをもらってということを社会的にインパクトに出せば、下関とガーナ、すごいじゃん、すごい世界的なことやってるじゃん、僕らの価値も上がるんです。はい。それが（拍手）ありがとうございます。

だから、クライシス、こういう環境問題とか、こ

ういう海洋プラスチックごみとか危機的なことで不安になっちゃうんですけども、やっぱり僕らの人間のこの知見を使って、笑いながら、さっきのDOZANさんのレゲエじゃないけれども、みんなハッピーになりながら、社会問題、地球問題を解決していくというやり方を、今日、何か、下関で再発見できて見出すことができました。

本当に今日は呼んでいただいてありがとうございます。また、ぜひ呼んでください。（拍手）

○モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。続いて、前田市長お願いします。

○コメンテーター 前田晋太郎 今日は本当皆さん長時間にわたって、この下関でシンポジウムしていただいてありがとうございます。

昭恵さんがずっと活動されていたのは私も知っているんですね。元秘書なので、それは当然知っているんですけども、いつ下関でやってくれるのかな、ずっと思いながら、今日、このようなすばらしいメンバーに囲まれて、柏原さんも先ほどすみません、私、コメント漏れてしまいましたけど、すばらしい活動で、下関も海に囲まれていますし、ビーチクリーンの意識とかも結構市民に定着をしている町でもありますし、皆さんの柏原さんの活動を、また下関もたくさんもっと市民に知っていただいて、また自分たちのまた、そういった活動につなげてもらえるとうれしいなとか思ったりもしました。この活動チームの名前がBGAP、BGAPですね。もっと下関の市民に知っていただくように、次、何ができるかなということを今日すごく痛切に感じておりますし、皆さんにお力いただきながら、先ほど言った環境問題の取組も頑張ってやっていきたいなと思いますので、皆さんどうぞよろしくお願いします。

今日はどうもありがとうございました。（拍手）

○モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。昭恵さん、お願いします。

○コメンテーター 安倍昭恵 本当に今日は長い間ありがとうございます。

真護さんが言っていたサステナブルの経済と、私もこのメッセージにも書いたんですけど、経済と環境って相反するもののように思っていて、日本の霞が関では経産省の力のほうが全然強くて、環境省って予算も少ないしという中で、でも、今からは、それが一緒に伸びていくということが本当の意味でのサステナブルなんだなということを改めて感じました。

それから、海外で活動している人に対して、よく

海外のことより日本のことをやってくださいという人がいるんですけども。私、電子機器のごみの山というのは何となく想像がつくと思うんですけども、洋服が海岸に山積みになっているのを見たときにすごくショックだったんですね。それは善意なんですよ。みんなアフリカで着る物もなくて困っている人がいるだろうから、じゃあ私たちが着ない物を送ってあげましょうという、私たちの善意があのようなごみになってしまっているという現実があるということを知ったときに、すごく、電子機器の山もごみの山もそうなんだけど、そっちのほうがむしろもっと私にとってはショックで、私たちがよかれと思ってやっていることが実はものすごく迷惑になっていることもあるんだということも、いろんなことをやっぱりこれから世界のことも知っていかなきゃいけないんだなということを真護君から教えてもらっています。やっぱりテレビの情報とかだけではなく、今いろんな情報があるので、目を見開けば、いろんなところにアクセスできるので、皆さんいろんな情報をこれから取って、賢くなって、自分の行動をそこから決めていっていただきたいなというふうに思います。今日はありがとうございました。（拍手）

それから、ごめんなさい。市長が挨拶もなく、こんな、ずうっと1つの会にいるということは普通のことでないので、（笑声）市長は本当に主人の秘書だからというわけじゃないですけども、本当に素晴らしい市長だと私は思っているの、（拍手）これからも応援していただけたと思います。（拍手）

○モデレーター 水谷由美子 ありがとうございます。本当に最後の短い時間しか御発言していただけなかったこと（笑声）申し訳ございません。多分、短くても濃い強い力でおっしゃって、皆さんの心に響いたんじゃないかなと思っています。

今日の企画は、最初、長坂真護さんの「サステナブル・キャピタリズム」という提唱されている考えと、そしてその活動というものをまず皆さんに知っていただきたいというところから始まったわけなんです。要するに環境問題というのは、今日楽しいとか、美しいとか、そういうことに関連している柏原先生の作品だとか、いろいろものを見ていただいたと思うんですが、文化と環境と経済が循環するという考え方の下で、長坂さんがこれだけ個人という、いわゆる政府の委託を受けてどうのではなくて、自

らがやってらっしゃるというのを皆さん聞かれたと思います。それは素晴らしいことですね。そういうところに学んで、我々も環境をよくすることは楽しいことだし、それはお金が循環したりして人々の生活を豊かにしていくこととつながっているんだという、そういうふうなことが可能性としていっぱいあるということを再認識した中で、何が自分で活動していけるのか、行動できるかというところにいろんな示唆をいただけたのではないかなというふうに思っております。

今日は大変長い時間お付き合いいただいて本当にありがとうございました。

そして今日ハワイの皆さんも、ずっと付き合ってくださいました。日本語が分かんなかったかもしれませんが彼女たちが着物をアップサイクルして、ハワイの神様だったり、自然だったり、そういうものの思想を作品に込めて作ってくださっています。それを日本文化の着物とミックスしてということで、アップサイクルということをしてながら、国際交流だったり、色んな相互に学び合える、感じ合える、そういう機会としての作品ということでございます。最後にお帰りになるときに、改めてまたそれぞれの作品を御覧いただけたとうれしいなと思います。

今日は本当にパネラーの先生、そしてコメンテーターの先生どうもありがとうございました。

皆さん拍手をお願いいたします。（拍手）

それでは、マイクを司会の方にお戻しします。

○司会 高松綾香

水谷実行委員長、ありがとうございました。

そしてパネラー、コメンテーターの皆様に大きな拍手を改めてお送りください。（拍手）ありがとうございました。

以上をもちまして、ブルー＆グリーンアートプロジェクト2024「海と陸とアップサイクル」の全プログラムを終了いたします。

長時間、皆様ありがとうございました。

付録1-2 海と陸とアップサイクルプログラム 転載

Blue & Green Art Project
BGAP 2024

シンポジウム
+
ミニコンサート
+
展覧会

【企画】 安倍 昭恵 水谷 由美子
【主催】 ブルー&グリーンアートプロジェクト実行委員会
【後援】 下関市 下関教育委員会
【協賛】 有限会社マヴェリック
株式会社環境ロジテック
株式会社 Archis
【協力】 山口県立大学国際文化学部
有限会社ナルナセバ
山口ファッション & テキスタイル研究所 Y-FATI
山口企画デザイン研究所 Y-PADI
【助成】 公益財団法人東芝国際交流財団

TOSHIBA
公益財団法人 東芝国際交流財団

海
と
陸
と
ア
ッ
プ
サ
イ
ク
ル

The Sea,
Land
and
Upcycling

2024 年
10月19日 土
14:00~17:00 (13:30 開場)

下関市民会館 (中ホール)
〒750-0025 下関市竹崎町 4 丁目 5-1

入場無料・申込み不要



主催者挨拶



ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会 会長

安倍 昭恵 Abe Akie

2013 年から続けてきたアグリアートフェスティバルを更に進化させていくために BGAP として新たな活動を始め 5 年目になりました。今回も素晴らしいゲストをお招きして下関で開催できることを大変嬉しく思っています。

現在私たちの生活はどんどん豊かに便利になっています。そして常に新しい物を求め、古い物はゴミと化していく・・・気候変動が加速し絶滅危惧種も増えている中、私たちはこの地球をどう守っていくのか、一人ひとりの意識改革が本当に必要な時です。経済成長と環境問題を同時に解決していくため、新たな価値観と経験による知恵や工夫により今後様々なアイデアが生まれてくることを期待しています。その中のひとつがアップサイクルという考え方。日本人の持つ“もったいない”という精神を活かし捨てられていくような物、使えなくなってしまった物を、再び価値を高めて蘇らせる、それはきっと人の心も豊かになる商品になるはずです。ゲストの方々の活動の中にも様々なヒントがあると思いますので皆様も一緒に考えてみてください。

最新のテクノロジーと自然豊かな資源を利用し楽しく、かつよく、豊かな最先端の地域づくりを BGAP では皆さんとともに取り組んでいきたいと思っています。

来賓挨拶



山口県議会 議長

柳居 俊学 Yanai Shungaku

ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP2024 の開催を、心からお祝い申し上げます。

近年、地球規模での新たな環境課題が顕在化する中、持続可能な社会の実現に向け、多様な主体が、それぞれの役割を認識し、必要な取組への積極的な参画が求められています。こうした中、海と陸の廃棄物による環境と経済の循環について、「創造的再利用」とも言われるアップサイクルの観点から意見交換が行われますことは、大変意義深いものと感じています。また、本日の展覧会における、ハワイの作家等による着物を活用したアップサイクルへの挑戦は、廃棄物削減という面だけでなく、日本の象徴的な伝統文化の価値を再発見することができる、大変貴重な機会であります。この取組が、地域のより良い環境づくりや、豊かな暮らしの創造に繋がる契機となりますようお願いいたします。

企画趣旨



ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会 実行委員長

水谷 由美子 Mizutani Yumiko

ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会は 2020 年から、海と陸をつなげ芸術や生活文化を通して地域の活性化や地域文化創造を目指して、長門市や周防大島町などで活動をしてきました。今回は「海と陸とアップサイクル The Sea, Land and Upcycling」をタイトルとして始めて下関市で開催します。

アップサイクルの手法として、ポリエステルなど衣服素材や金属などを工業的な最先端技術を用いて循環させ、新しい原料を作りまた衣服や生活用品などを再創造する産業分野での実践についてシンポジウムなどで紹介してきました。今回は、産業廃棄物や海に流れ着いたもの、あるいはライフスタイルの変化で着られなくなった着物などを用いて作られた現代アートや服飾作品などを展示します。

シンポジウムでは、パネラーの活動を通じて、アップサイクルの背景にある国際的な課題、表現の可能性さらに社会的な意義や価値などについて考えます。同時に開催地である下関における現状を知り、課題解決に向けた議論を会場の皆様と共に展開することを目指しています。

プログラム

【司会】高松 綾香（アナウンサー）

開演・挨拶

14:00～

【主催者挨拶】

安倍 昭恵（BGAP 会長・元内閣総理大臣故安倍晋三夫人）

【来賓挨拶】

柳居 俊学（山口県議会議長）

吉田 真次（衆議院議員）

【来賓紹介】

前田 晋太郎（下関市長）

基調プレゼンテーション

14:10～

水谷 由美子（ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP 実行委員長）

「農業文化振興からアートを通じた海と陸を繋げた地域文化創造の活動へ」

2013 年から長門市をフィールドとして農業文化振興を目指し7回行われたアグリアート・フェスティバル AAF の後継として、ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP が 2020 年にはじまった。活動の場所は、周防大島町、山口市そして下関市へと拡大されている。また年間の回数も増えており、地域住民への日常的な教育的視点を持った BGAP 大学の構想の一環としても期待がかかっている。国連で採択された SDGs の活動の広がりの中で、海と陸の課題は繋げて取り組まれるべきだというサステナブルな考えと実践、そして環境問題を芸術文化で課題解決する方法を探ることが BGAP の特徴である。今回は2013年からの活動の経緯と現在について紹介する。

展覧会出展者 紹介

ミニコンサート

14:35～

【友情出演】

DOZAN11 aka 三木道三（レゲエミュージシャン）

かしてみかしてみ / 新しい未来 / 大仕事 / Lifetime Respect

（15分休憩）

シンポジウム

15:00～

【パネラー】

長坂 真護（アーティスト）

「サステイナブルキャピタリズム、輝かないものはこの世にない」

1957 年国際社会より独立を果たしたガーナ共和国、しかしガーナの国旗に黒い星がデザインされている理由は【未だ我々の星（自由と正義）は輝いていない】というアイロニーが含まれている、70 年余り経過した現代においてもその状況は変わらない、そこに一石を通す社会問題解決型アーティスト、長坂真護が仕掛ける、サステイナブル × キャピタリズムのその全貌の本意を来場者皆様にお伝えさせて下さい！

柏原 エリナ（ライトモードアーティスト）

「海洋プラスチック問題に光をあてる」

2019 年カナダ・バンクーバーで開催された、海洋プラスチックゴミ問題をテーマにした“Future Oceans 2019”への参加以降、柏原が講師として担当した、東京都町田市の桜美林大学、玉川大学、名古屋市の金城学院大学での、海洋ゴミ問題をテーマにした学生たちとの取り組みを制作途中も併せて紹介する。またこのテーマを得た以後の SDGs を意識した柏原の制作作品も写真で紹介する。

韓 昌完（下関市立大学学長）

「街とその不確かな未来と教育一環境、芸術教育を中心に」

下関市はこれまで港湾都市として繁栄してきたが、産業構造の変化や急速に進む少子高齢化など多くの課題に直面しており、その未来が不確かなものとなっている。世界では、都市再発展の重要なキーワードとして「環境」、「芸術」、またそれに対する「教育」が重要視されている。フランスのナント市をはじめ、世界の取り組みを紹介し、今後の下関市の方向性を探ってみることとする。

【コメンテーター】

前田 晋太郎（下関市長）

安倍 昭恵（元 内閣総理大臣故安倍晋三夫人）

【モデレーター】

水谷 由美子（山口県立大学名誉教授）

閉会 16:40

展覧会終了 17:00

シンポジウム パネラー



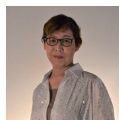
長坂 真護
Nagasaka Mago
アーティスト

1984年福井県生まれ。2017年6月、ガーナのスラム街・アグボグブロシーを訪れ、先進国が捨てた電子機器を燃やすことで生計を立てる人々と出会う。以降、廃棄物で作品を制作し、その売上から生まれた資金で現地にリサイクル工場建設を進めるほか、環境を汚染しない農業やEVなどの事業を展開。経済・文化・環境（社会貢献）の3軸が好循環する新しい資本主義の仕組み「サステナブル・キャピタリズム」を提唱し、スラム街をサステナブルタウンへ変貌させるため、日々精力的に活動が続けている。



韓 昌完
HAN Chang wan
下関市立大学学長

東北大学大学院医学系研究科、同大学大学院経済学研究科の博士課程を修了し、W 博士号（障害科学・経営学）を取得。下関市立大学の理事・副学長を経て、2022年4月に日本国内において、韓国国籍を持つ国公立大学初の学長として同大学学長に就任。2015年、教育現場で「気になる子」や「発達障害」という言葉のひとり歩きでひろがる間違った認識を正すべく研究成果をまとめ、ベストセラー『その子、発達障害ではありません IN-Childの奇跡』（さくら舎）を執筆する。



柏原 エリナ
Kashiwara Erina
ライトモードアーティスト

光をモチーフに大型イルミネーションからアクセサリーまで制作、発表している。2008年からはウェアラブルテクノロジーファッションの、海外発表を数多く行ってきた。2019年バンクーバー、海洋プラスチックゴミキャンペーンイベント“Future Oceans”のファッションショーに日本から唯一デザイナーとして参加。国内8都市海洋プラスチック削減キャンペーンにオブジェ制作、2024年横浜トリエンナーレ、オープニング展示で横浜港で回収した流木などを活用したワークショップと展示を行った。2026年にはニューヨークでのガラスアートファッションショーに出演予定。

シンポジウム コメンテーター



前田 晋太郎
Maeda Shintaro
下関市長

1976年、下関市生まれ。長崎大学水産学部を卒業後、2003年に安倍晋三事務所に入る。2011年まで安倍晋三元首相の秘書を務め、同年に下関市議会議員に立候補し、初当選。議員2期目の途中である2017年に下関市長選に立候補し、初当選。現在2期目。趣味は料理、ギター演奏、ランニングなどのコンディショニング、座右の銘は「初心忘るべからず」

シンポジウム モデレーター



水谷 由美子
Mizutani Yumiko
ブルー＆グリーンアートプロジェクト
実行委員長

三重県生まれ。お茶の水女子大学大学院修了。山口県立大学名誉教授。服飾デザイン・服飾美学・サービスデザインを専攻。2002年にヘルシンキ芸術デザイン大学（現アールト大学）大学院客員教授としてフィンランドに在住。2009年から10年以上、ラップランド大学と共に、サステナブルと地域資源の活用をテーマとする共同研究を実施。その他、ハワイ、中国、韓国、フランス、カタール等の各大学との国際交流を通じたファッションショーを教育研究創作活動として実施。国内外で活躍するデザイナーなどクリエイターを多数輩出。



安倍 昭恵
Abe Akie
ブルー＆グリーンアートプロジェクト
会長

聖心女子学院幼稚園から高等学校卒業。聖心女子専門学校英語科卒業。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修了。株式会社電通新聞局を経て1987年安倍晋三氏と結婚。趣味は、ランニング、ゴルフ、お米づくり。2006年から山口県立大学企画デザイン研究室と共同開発を開始し、2013年からファッション創造による農業振興および地域活性化の活動を目指すアグリアート・フェスティバル、その後継としてBGAPを2020年に立ち上げる。2018年から2021年まで山口県立大学大学院国際文化学研究科非常勤講師。

ミニコンサート

司会



高松 綾香
Takamatsu Ayaka
アナウンサー

2015年、KRY山口放送入社。熱血テレビや報道番組MCを8年間務める。日テレ系列全国のアナウンサーから選ばれるアナウンス大賞で歴代最年少でラジオ部門グランプリを受賞。2023年からフリーへ転向。現在広島でもTVレギュラー出演中。



DOZAN11 aka 三木道三
レゲエミュージシャン

1996年「三木道三」名義でデビュー。2001年『Lifetime Respect』が、90万枚以上売り上げジャパニーズレゲエ初のオリコン週間ランキング1位を獲得。2002年歌手活動引退。2014年『DOZAN11』名義でアルバム発表、伊勢神宮での奉納演奏から歌手活動再開。2021年初出版の絵本『リディムくんとメロディーちゃん』がAmazon絵本・児童書ランキング1位獲得。2022年、芸術家ヤノベケンジ氏とコラボしたNFT絵本を出版。山口県の高級日本酒「夢雀」とのコラボ日本酒『Lifetime Respect 20』を制作。

展覧会 出展者

no.
01



長坂 真護
Nagasaka Mago

作品1：[月シリーズ]

平和と健康のイメージがお月様で表現された作品。

作品2：[ドラゴン]

長坂真護氏の夢に現れた真実の象徴としてのドラゴンが描かれた。

作品3：[春夏秋冬そして天]

作品4：[Pray your happiness]

安倍晋三氏が亡くなられた後、長坂真護氏におりてきたイメージが描かれた2作品。

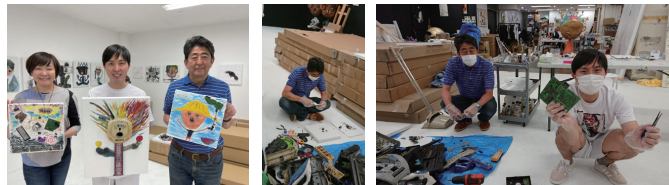
no.
02



安倍 晋三
Abe Shinzo

「夏休み」

安倍晋三氏の夏休みの思い出が描かれた作品。



no.
03



柏原 エリナ
Kashiwara Erina

「未来の海を光で輝かせるクラゲ達」

作品1：[Jellyfish-Avenir]

シルクオーガンジー、和紙布、水引、リサイクルペットボトルパーツ、LED

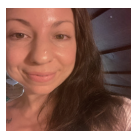
作品2：[Jellyfish-Futuro]

シルクオーガンジー、和紙布、水引、海洋プラスチックゴミ、LED

作品は、桜美林大学芸術学部のプロジェク授業として制作された。授業では、Japan Environmental Action Network (JEAN)主催の海岸クリーンアップキャンペーンに実際に参加して、海岸のプラスチックゴミ採集も行った。海洋の自然、生物を調べ、「光」と組み合わせる事を考えて、クラゲを造形のテーマに選んだ。発光する不思議なメカニズムを調べ、検討する中で、クラゲには海水を浄化する能力を有するものがあり、また自ら分裂しコピーを作って増殖したり、中には不老不死といえるものもあるという。そのミステリアスな生態が未来の海のために貢献してくれることを期待して美しく未来的な光のドレスを制作し、いつか美しい海洋環境を取り戻す事を願いながら制作した。

◆ハワイ大学マウイカレッジ UHMC◆

no.
04
-1

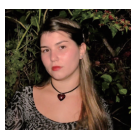


Meghan Reny

「Hoku Moon and Her Waters」

ハワイの月暦からインスピレーションを得て、アップサイクルウェアを制作。作品の上部は、月の満ち欠けである「hoku」を、スカートは美しい着物の生地で「ワイ」、つまり海の水を表現した。月とハワイの水の美しさに敬意を表し、月、大地、水のつながりが私たちすべてに生命を吹き込むこと、そしてこの深い関係を守ることが私たちの「クレアナ」＝「責任」であることを意図して制作した。

no.
04
-2



Aliza Clarke

「Haleakalā, "House of the Sun"」

私の家は休火山ハレアカラにある。そこは文化的な歴史と精神的な意義が豊かな場所であり、その大地にインスピレーションを受け、その美しさと神聖さをスカートに表現した。縞模様の赤い着物は、ハレアカラの稜線と谷を形作った溶岩の層を象徴しています。本作品を通して、ハレアカラの神聖さと、土地、太陽、ハワイの人々の永遠の絆に敬意を表します。

no.
04
-3



Brielle Pacli-Donato

「WaiKō」

マウイ島で栽培されているサトウキビを表している。白と桃色の振袖は、マウイの公式カラーであるピンクを、ドレスの脇を流れる紫の道行とブルーのオーガンジーは、労働者が作った灌漑用水を象徴している。ドレスの裾には、サトウキビを模した緑色の装飾を取り付けた。



Maria Razzauti

UNIVERSITY OF HAWAII MAUI COLLEGE FASHION TECH INSTRUCTOR

アーティスト。ハワイ大学マウイ・カレッジのファッション・テクノロジーを卒業。2017年、学生時代にUHCM代表に選ばれ、山口県スーパーグローバルファッションワークショップに参加。2015年よりUHCMでファッション・テックの講師を務め、単位取得コースと非取得コースを指導。2022年にはアート、アクセサリー、ファッションのブランド「ハッピー・アイランド・ガール」を立ち上げた。今回は、山口県立大学水谷由美子名誉教授から提供されたヴィンテージ着物をアップサイクルするプロジェクトの学生指導を行った。

Guest from UHCM.

Mrs. Stephanie Ohigashi, Director of UHCM International Office / Dr. Valerie Matsunaga, Director of UHCM Pharmacy Technology Program
Mr. Lee Ohigashi, Regent Emeritus, University of Hawaii / Mr. Alan Matsunaga, Retired, First Hawaiian Bank

no.
05



水谷 由美子

Mizutani Yumiko

山口県立大学名誉教授

「循環の風」

着古された道行コートを使い、着物風ワンピースをデザインした。一切、切られていないコートは手縫いで加工したため元の着物に戻り循環する。端切れのバッチワーク、縫いとめる、内側の紐で吊り上げるなどの技法により、風がもたらした造形というイメージを表現した。サザエの蓋を洗浄・穴空け・表面塗装などの加工を施し、オリジナルな装飾用ボタンを制作した。

着物提供：田村哲信 ボタン加工指導：桑原大内塗大内人形製作所
協力：原垂紀夫 松浦奈津子

◆山口ファッション＆テキスタイル研究所 Y-FATI / 山口企画デザイン研究所 Y-PADI◆

no.
06



カイサヨコ

Kai Sayoko

テキスタイル作家

「Wake me up!」

織物産地は素材の宝庫である。糸や布、眠っている素材たちの声が渦巻いている。大地からの恵の鮮やかなブルーに目覚めさせてもらったかのように素材は命を吹き返す。海のブルーが心を癒してくれるように身に纏う人や周りの人の心へ穏やかな空気が流れ人々の心を癒してくれますように。

素材：絹織生地（丹後ちりめん） 絹糸
技法：自家栽培藍生葉染
協力：与謝野町立織物技能訓練センター 田茂井康悦

no.
07



小田 玲子

Oda Reiko

周南公立大学非常勤講師
手芸サークル主宰

「白銀比のプルオーバー＆スカート」

反物で真四角のプルオーバーを作ってみようと思い、シンプルなデザインを追求しました。取り外し可能な襟も作った。完成後「白銀比」という日本古来の美的比率があることを知った。試しにパーツの比率を調べたら近似値が出たので驚いた。もらった反物でボックスプリーツ付きのギャザースカートを作って合わせた。

no.
08



おおうち あみ

Ouchi Ami

ニットデザイナー

「球体ピンクタックワンピース」

透かし模様の着物の裏を見て着想を得た作品。織物の技法に驚き、表と裏を組み合わせた作品にすることで、織物の奥深さと面白さを表現した。さらにボールを布で交互につつむことでピンクタックとなり、ボリュームたっぷりの作品となった。

no.
09



武永 佳奈

Takenaga Yoshina

倉敷市立短期大学
専任講師

「芒に月」

廃棄となる2枚の着物を使い、和を感じさせるスーツを制作。花札の「芒に月」の配色と、ジャケットとパンツにかけ繋がる円で、調和や力強さを表現した。

no.
10



原田 裕作

Harada Yusaku

滋賀県立大学大学院生
山口企画デザイン研究所

「循環一糸と水一」

布の製造（織り）工程で発生する「ふさ耳」をリメイクした作品。繊維廃材が新たに「循環」する様子と、海と山を通じて水が「循環」する様子を重ね合わせ、デザインに落とし込んだ。今回は主に綿の先染め織物が織られる際に発生したものを使用し、多くの色が混じり、かつ非常に柔らかいという素材由来の特徴をデザインに活かしている。

素材提供：兵庫県立工業技術センター繊維工業技術支援センター

no.
11



石田 彩夏

Ishida Sayaka

山口企画デザイン研究所

「Garden」

風が吹き抜ける洋風庭園をイメージしたドレス。素材には古くなったカーテン、及びカーテンレース生地を使用した。揺れる木々、フラワーアーチなどから着想を得て、華やかな緑のツヤ感や生き生きとした花のハリを表現した。

no.
12

有限会社マヴェリック

「カーボンリサイクル技術でゴミの地産地消を実現し、地域全体が繁栄する仕組み」

カーボンリサイクル技術を活用し、行政や事業者、地域の人々と連携して「カーボン循環型社会」を創造することで、地域のゴミを資源に変え、海や山を再生することができる。このプロジェクトは、ブルーカーボン（海洋）とグリーンカーボン（森林）を活用し、自然環境の再生を目指し、自然と人間が調和し、地域全体が共に繁栄する社会を実現することを目指している。

アグリアート・フェスティバル と ブルー＆グリーンアートプロジェクト ヒストリー

■農業スタイルコレクション 2013

2013 年 農業スタイルコレクション 2013 in 長門油谷 with 会津若松 mompekkko 「グローバル」(2013.10.13)＜ラポールゆや / 長門市＞

■アグリアート・フェスティバル 2014～2019

2014 年 アグリアート・フェスティバル 2014 大地の声をきく mompekkko 「raita」(2014.10.12)＜ラポールゆや / 長門市＞

2015 年 アグリアート・フェスティバル 2015 和敬清寂～夏は涼しく～mompekkko 「takijima」(2015.7.26)＜ラポールゆや / 長門市＞

2016 年 アグリアート・フェスティバル 2016 自然との対話 mompekkko 「cosmo」(2016.10.23)＜ルネッサながと / 長門市＞

2017 年 アグリアート・フェスティバル 2017 The Force of Water 水の力 mompekkko 「nagato」(2017.10.29)＜ルネッサながと / 長門市＞

2018 年 アグリアート・フェスティバル 2018 リアル・アグリ～風と遊ぶ～ mompekkko 「motonosumi」(2018.10.28)＜ルネッサながと / 長門市＞

2019 年 アグリアート・フェスティバル 2019 光の棚田 mompekkko 「tanada」(2019.10.13)＜ルネッサながと / 長門市＞

■ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP 2020～現在

2020 年 Blue & Green Art Project 2020 ～海と陸の結婚～(2020.10.25)＜旧文洋小学校、東後畑棚田 / 長門市＞

2021 年 自然を知り活かし豊かな暮らしをデザインする～日本の和ハーブ、長門の和ハーブ～(2021.4.18)＜旧文洋小学校 / 長門市＞

ビーチクリーン & シンポジウム「海の豊かさを周防大島における近未来の生活デザインに活かす～SDGs から白木半島地区の可能性を探る～」(2021.6.27)＜周防大島町橋総合センター / 大島郡＞

Blue & Green Art Project 2021 ～海と陸の過去・現在・未来～(2021.7.11)＜ラポールゆや / 長門市＞

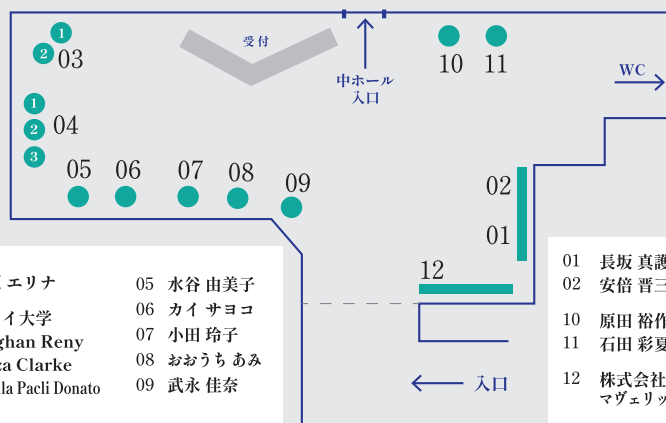
2022 年 民俗学者「宮本常一」に学ぶ地域創生～地域循環がある周防大島町のライフデザイン～(2022.5.22)＜周防大島町橋総合センター / 大島郡＞

展覧会「海をめぐるファッションの旅～Step By Step～」(服飾・染織・アクセサリーの作品展 & 裂織「つづれ」のワークショップ)(2022.10.23-24)＜Gallery ラ・セーナ / 山口市＞

2023 年 Blue & Green Art project 2023 海と陸とウェルビーイング～幸せは仕事にやどる～(2023.10.22)＜ラポールゆや / 長門市＞

Blue & Green Art Project BGAP 2023 Vol. II 海のある周防大島とハワイの幸福～地域循環共生と再生型観光の視点から～(2024.03.24)＜周防大島町橋総合センター / 大島郡＞

【作品展示 案内図】



企画・運営 安倍 昭恵 水谷 由美子
 総合プロデュース・ディレクション 水谷 由美子
 制作ディレクション 原田 裕作
 制作 株式会社 Archis
 山口ファッション&テキスタイル研究所 Y-FATI
 山口企画デザイン研究所 Y-PADI
 舞台ディレクション 原田 裕作
 舞台補助 下川 まつゑ、田村 真子、石田 彩夏
 展覧会ディレクション 下川 まつゑ
 グラフィックデザイン 下川 まつゑ、武永 佳奈
 映像撮影・編集 入江 正敏、内山 久宜（山口メディア研究所）
 写真撮影 貝崎 健（フォトグラファー）
 MC 高松 綾香（アナウンサー）



【サステナブルな地域創生に向けたハンドブック】

2023 年開催のシンポジウムを付録として採録。
 「地域におけるサステナブルな創造活動とウェルビーイング～
 「BGAP2023 海と陸とウェルビーイング幸せは手仕事にやどる」を事
 例として～」水谷由美子他、「山口県立大学学術情報 17 巻」[大学院
 論集通巻 25 号]、2024 年。



プログラムの一部及び展示作品は
 後日、公式 YouTube チャンネルより配信。

Blue & Green Art Project YouTube で検索

【BGAP クラブ会員募集】

ご入会をご希望の方は bgap.club@gmail.com にお名前とメールアドレスを
 お送りください。今後のイベント情報をご案内します。

【問合先】ブルー & グリーンアートプロジェクト BGAP 実行委員会事務局
 〒753-0056 山口市湯田温泉 3-3-8-902
 090-7776-9763 yumiko0911green@gmail.com